はじめに

システムの作動が有効性を維持し続けるためには、本性的に持続可能なものでなければならない。持続可能性とは、もっとも端的な感覚で言えば、「生き続ける」ということである。だがたんに持続可能なシステムでは、どのようにして同時に創造性を維持できるのか。これは、実は簡単な問題ではない。持続可能性と創造性は、実は必ずしも折り合いの良いものではない。たとえば社会的現実性の変動幅を一定範囲内に抑え、経済成長もいくぶんか押さえながら、持続可能な社会を想定する場合には、持続可能性とは、実質的に「停滞」の別名となる。

他方、科学哲学者のカール・ポパーが初期にイメージしていたような、断続的な大胆な仮説の提示による「連続的創造」は、論理形式としては可能だが、実際にどうすることなのかははっきりしない。たとえば生物には一定頻度で突然変異があるが、突然変異体のほとんどは、既存の環境体制の強靭さの前で、生き残れず消えていく。その場合には、単に新たなものが出現するだけではなく、持続的な展開可能性がなければ、変異体も新たな現実を形成する局面まで、生き残ることができないことを意味する。たんに言葉で奇抜なことを言うだけでは、「ただ言ってみただけ」という可能性が高い。ここに「大胆な発想」と「システムの持続的な作動」の間に大きな裂け目がある。この裂け目は、簡単には整合化できはしない。

創造的であることは、システムの維持に限定すれば、必要条件でもなければ、必ずしも歓迎されてもいない。むしろ創造性の萌芽は、当初はつねにノイズの出現に感じられる。そのノイズが持続的な作動回路に入るためには、システムに他の部分システムや他の手法が可能でもあるような隙間や選択性が、どこかで用意され、内在的に含まれていなければならない。進化論で遺伝子の「突然変異」によって新たな生命体が出現するという「突然変異説」は、重要な主張である。だがこの学説の最大の難題は、特定の部位に突然変異が起きた場合、他の部位も整合的に連動して突然変異に対応する変化を起こし、突然変異に見合う「有機構成」全体の組み換えがどのようにして起きるかをまったく示せないことにある。

かりにシステムが一つの作動原理によって十全に制御されているのであれば、出現した当初のノイズは、またたくまに排除されてしまう。そうなればシステムの作動の一貫性は、同時に他の選択の排除と裏合わせである。一貫して作動するものは、たんに機械的なだけではなく、内在する創発の可能性を同時に排除し続けるシステムでもある。システムは、たとえどのように機械的に作動するものであっても、同時に他の選択肢も可能であるように組み立てていくためには、かなり多くの工夫が必要となる。

社会システムに近い場面で考えてみると、創造性に力点を置けば、一般には試行錯誤を繰り返すた

めに、膨大な無駄が出る。それはシステム内のゴミとなり、システムから除去すれば「廃棄物」である。ところがこのゴミを留保し続けると、システムのなかに創造的な活動の範囲が限定されてくる。ゴミは無駄なものであれば減らしたほうが良い。だがゴミになる可能性の中にも、創造性に寄与する部分は含まれている。こうした局面も課題の一つである。

これらの問題を考えるうえで、モデルケースとして何を選ぶかも重要である。湧き上がる入道雲のような「自己組織化するシステム」を選ぶのか、次々と新たな区分が出現する差異化する色彩感覚を選ぶのか、あるいは反復と分岐を備えた AI プログラムを選ぶのか、さまざまなモデルの選択があるに違いない。あるいは領域的なモデル設定も重要だと思える。新たな素材物質の出現をモデルにするのか、心のシステムをモデルにするのか、さらには地球環境的なシステムをモデルとするのかで、取り出せる局面が変わってくる。実際、歴史的には、すでに多くの構想と工夫があった。すでに持続可能性と創造性を整合化し、両立させることのできるモデル的構想は、いくつもあった。それらを検討しながらたんに構想にとどまらず、実現可能性に向けて何が必要となるかを考えていきたい。

それと同時に、この冊子では、さまざまなシステム的構想を学ぶための多くの材料を提示したいと思う。こうしたモデルケースの設定は、本来は並列的に配置され、学ばれるようなものではないのかもしれない。だがシステムの出現の仕方は、一つではなく、またシステムの出現や生成という課題を含めると、そこには多くの分岐が含まれるという予想をもっている。

システムの静的な特質は、複数の要素の維持コストの総和に比べて、要素の複合体の維持コストが明確に低いことである。これは複合化による安定化を意味しており、化学的な化合でも似たようなことが起きる。そのレベルから、システムそのものが動的に生成し続ける場面まで構想を広げようとすると、まったく異なる指標を使い、別の組み立てをしなければならなくなる。そしてそうした局面で課題を立てて、進んでみようと思う。それぞれの構想は、それぞれの高原もしくは孤島の出現にかかわる。しかも「生成し続ける孤島」にかかわるのである。無数の出現し続ける孤島に近い。こうした課題にかかわるさいには、物事を統一的な視野の元に配置するような議論では足りていないことがわかる。むしろ分散型の展開可能性を内部に含む構想こそ必要とされるのである。

1　物はどのようにして物であり続けるのか――動力学の構想

岩石や小さな小石が、雨風に晒されている。大きな巨石は数十万年、風雨に晒されても、なお巨石であり続けている。典型的な「超持続可能性」である。だが持続可能性の事例として活用するには、あまりにも極端だと感じられる。そもそも容易に変化しないので、巨石なのである。周囲の木々や草花が入れ替り、土壌が流れても、巨石は巨石のままである。だが巨石も、風雨に耐え、太陽光に晒されても自己維持している以上、何かそこに相応しい仕組みは当然ありそうである。典型的には、物が物であり、均衡を維持している状態を説明する仕組みが、「動力学」(ダイナミクス)である。ニュートンは物質論を構想するさいに、物が物として均衡状態にある仕組みを提起している。それが「引力」と「斥力」の拮抗である。この二つの相反する力が均衡状態にあるので、物は一定の大きさを維持したまま、大きくもならなければ小さくもならない。この均衡状態では、吹き付ける雨風は、時として均衡状態からわずかながらでも引き離すことはありうるが、ただちに元に戻ってしまう。つまりどのような外圧も、ほとんどの場合測定誤差にみえる。

物がひとまとまりで均衡状態を維持するという発想は、物の典型例が「剛体」に置かれていることを意味する。物の部分が相互にひきつけ合い、相互に斥け合って一定の嵩ばりが維持される。これだけの大雑把な仕組みであれば、ニュートン以前にも、構想としては成立していたはずであり、実際そうなのである。

エンペドクレスは、物の結びつきを「愛」と「憎しみ」の二つの相反的な原理から説明しようとしていた。愛は物と物を引き付ける働きであり、憎しみは反発しあう働きである。この二つの原理を設定しておけば、物の結合や分離を説明できると考えていたのである。ただし、類似したものが結びつき、異質なものが反発し合うとは限らない。異質なものが引き合う場面を愛と呼んでもよく、同質なものが反発しあう場面を愛と呼んでもよいように思える。そのつど考え方により、愛の内実は、少しずつ変わっていく。愛の内実が決まらない以上、どの局面を強調するかで、愛はさまざまな姿を見せるのである。

カントの動力学　ニュートンの物質論の引力と斥力を、カントが『自然科学の形而上学的基礎』で懇切に考察している。カントの主著である『純粋理性批判』の第 1 版と第 2 版の間に書かれた本で、カント特有の「基礎づけ構想」がクリアーに出ている著作である。

たとえば物体において、引力過多になれば、物体はそれぞれの部分が引っ張られて縮小し、斥力過多になれば物質の部分は、離れ離れになり、物質は膨張していく。そのため物体が剛体として安定している場面では、引力と斥力は、均衡していなければならない。これが動力学での結論である。ここで行われている議論は、物体(剛体)の均衡維持の必要条件を取り出すことである。しかも可能な限り、論理的に必要条件を明示することが実行されている。

しかし現実には、引力と斥力のバランスが崩れることはしばしば起こる。小さな小石が、巨石に激

突してもバランスは崩れる。それでも全体が崩壊することはない。するとバランスが崩れても、再度バランスを維持するように復帰したり、バランスのズレたところで新たなバランスが形成されたりするはずである。

こうした働きは、引力と斥力以外の働きが、バランスの維持に関与している可能性を示唆する。実際に、車の車体は、路上の小石が当たりへこんでも、元の状態に復元するように作られているものが多い。ただし中程度の石が当たり、車体がへこむと、へこんだまま傷となり、そこで均衡し安定する。こうした変化のモードは、引力、斥力よりも、むしろ物性に依存している面が大きい。物性とは、物の持つ「弾力性」のようなものである。

カントは、物事の成立に必要条件として関与している要件を、「構成原理」だとし、他方必要条件とは言えないが、なにかが関与していると推測されるような原理を、「統制原理」だとしていた。構成原理は論理的な必要条件であるので、こうした原理は「客観的原理」だとされる。これに対して統制原理は、発見的原理であり、発見のための方法的原理である。たとえばここで「引力と斥力のバランスを回復し、バランスを維持する原理」を設定してみると、この設定された原理は、カントの分類によれば、おそらく統制原理となる。統制原理の典型は、「自然は無駄をしない」というような方針を決めていく原理であり、これじたいはカントの配置だと、主観的な方法となる。

しかし物体の維持原理として物質の必要条件であれば、この原理も本来身分上は「構成原理」となるはずである。だがいまだそれを直接「それとして」明示できないだけである。こうしてみると「構成原理」と「統制原理」の間には、かなり大きな隙間があり、同時代の科学によって明示的に示すことのできない要件は、おしなべて「統制原理」に分類されてしまう。

論理的な必要条件を明らかにするというカントの議論の立て方からすると、たとえ必要条件を明示しても、そこから物そのものが現実に成立するところまでは、相当に隔たりがある。実際、引力と斥力だけでは、物の空間的広がりである「体積」は導くことはできるが、物の重さや密度、物の弾力のような「物性」にはまったく届かない。引力と斥力を設定したとしても、日中に陽の当っている場面と、夜中に気温の下がっている状態での引力、斥力の均衡関係は、同じだとは考えにくい。引力、斥力のバランス維持では、その維持にかかわる原理が固有に想定される。こうして剛体のような物体を動力学的に説明する場合であっても、物体そのものを構成する原理と、物体を維持する原理は、別様に必要とされ、2 様の原理が必要なことがわかる。

シェリングの不均衡動力学　動力学は、カントの直後から展開可能性に開かれ、華々しい応用の局面を迎えた。それは引力、斥力のような力学概念だけではなく、電気の正負、磁気の NS のような相反的対概念が、さまざまな局面で明らかになってきたからである。相反対が原理的に最も重要な原理だというような雰囲気が、広範に広まっていた。力学だけではなく、電磁気や化学反応でも、そうした相反対の事例が見いだされ、新たな現実性の領域が広がっていったのである。

シェリングの「自然哲学」は、この動力学の構想を、これでもかというほど拡張した。まるでアクロバットのような展開の仕方を次々と編み出したのである。シェリング自身は、才気煥発で、新たな

構想を次々と打ち出すことに適した資質だった。議論を一貫させ整合化するような方向に向かうのではなく、ともかくも人間にはまだ見えていない現実を浮かび上がらせるような方向で、議論を進めた。

通常であれば、動力学は、すでに成立している「個物」の成り立ちを説明するための構想である。それが個物の潜在性として設定され、そのまますでに成立している個物の必要条件に置き代えることができたのである。ところがシェリングは、その仕組みを「個物そのもの」の「出現」にまで場面を広げてしまった。何もないところに個物が出現するという場面で、相反的対の構想を持ち込んだのである。話が大きすぎるというのが実情であるが、「相反対の働き」が現実性そのものをもたらすというシェリングの構想からすれば、比較的容易な力点の移動であった。

まず「産出性」(絶対的産出)を設定する。個物を生み出す働きそのものを設定するのである。これだけであれば神学の「創造主」と同じ位置を占めるはずであり、産出者がいて「産物」が作られるという創造神話の仕組みと同じになる。だからシェリングはそんなことは言わない。産出性は、物を生み出す働きである。それだけであれば、個物のかたちを取ることはない。現実の個物に行く着くためには、そこに「阻止」という産出性を限定する仕組みが必要となる。限定がかからなければ、具体的な個物のかたちにはならない。この場面では、産出性と阻止という二つの対となる働きが設定されており、仕組みは動力学の変形である。

しかし産出性という場そのものになんらかの限定がかかり、個物が出現してくるのだとすると、活動の場と局所的限定という仕組みにも読める。場と局所的歪みという設定に無理なく移行できる設定にもなっている。そうした可能性を残しながら、さしあたり構想としては、相反対の働きの設定を、「創造の動力学」としてやっているのである。

このとき産出性と阻止が均衡してしまえば、世界の動きはすべて止まり、作られた世界は作られたままで終わることになる。自然哲学が世界の活動態をそれとして明るみに出していく構想である場合、これでは言った途端に終わってしまうことになる。そこで産出性と阻止は、不均衡のまま働き続ける。ここで明白になるのが、この構想は「不均衡動力学」になることである。かりに産物が出現したとしても、それじたいが不均衡状態で成立している以上、さらに産物そのものが活動を続けることになる。産物はまさに変化を本性とする。

産物の変化にも、相反的な活動原理が働いているはずである。個物は固有に変化の相で活動を続けている。そこで個物に働いている活動の「傾向」を取り出すと、「自己維持する傾向」と、「自己を拡張する傾向」が設定される。この二傾向は、個物が少しずつ変化していく場面で押さえられている。一方では自己維持しながら、他方ではそれが大きくなっていくような場面を押さえようとしているのである。

もう少し立ち入ってみる。眼前のコーヒーカップが不均衡状態にあり、いつ変化してもおかしくないが、かろうじて同じかたちを維持していると考えてみる。個物は不均衡状態のために今にも変化していくかもしれない。しかししばらくの間は、同じかたちに留まっている。ここにも二つの働きが関与している。一つは不均衡そのままでかたちとなっている働きである。もう一つは暫定的にしろ、そ

のかたちを維持している同じ不均衡の反復的産出である。

これは不均衡状態での「振動」と同じ振動が同型に維持されている局面となる。不均衡なままのかたちを連続的に作り出す働きと、その不均衡を同型に維持する産出は、相反的ではなく、むしろ相補的である。シェリングは、こんなふうに二つ一組の働きを見つけ出して、自然の自己形成の仕組みを独力で考案してきたのである。ここには、動的でありながらなお自己維持する仕組みが二つの働きとして、モデル的に設定されている。

この段階になれば、変化する個物に内在する二つの傾向の指定であり、厳密にはもはや「相反的対」だとは言えない。自己を拡張する傾向が強まり、増大を繰り返しても、そうした増大の動きそのものを維持している活動性は、変化の維持であって、変化に対抗する傾向に限定されるわけではないからである。たとえば入道雲が沸き上がり続けるような場面では、増大という変化そのものが自己維持され、この変化をさらに強くするような激動的な動きが、自己を拡張する傾向になると考えられる。実際にシェリングがモデルケースとしていたのは、竜巻や渦巻の出現そのものだった。

つまりこの二つの傾向は、さまざまな場面でモードを変えて現れる活動の傾向であって、多くの事柄が同じ一つの言葉に込められ過ぎなのである。運動や変化や動きにかかわる傾向や述語を指定した途端に、あまりにも多くの内実が込められ過ぎることは避けようがない。運動や変化を捉えるには、人間の言葉、あるいは概念は、いつも粗雑すぎる。

シェリングの構想に見られる特徴は、現実性のなかには、対となる二つの原理や傾向が含まれており、それらが均衡して終わることのできない「拮抗関係」から、多くの事柄が派生的に生じるという仕組みである。そのため現実は、つねに動態性をもち、実はその動態性は二つの原理や傾向の反転にまで進みうるのである。

2　シェリングという謎

ここでは寄り道のようだが、シェリング後年の善悪の扱いにまで立ち戻ってみる。シェリングは、実際に不思議な才気に満ちている。次々と着想が浮かぶ人である。しかし議論は論証的ではなく、多くのアナロジーに満ちている。抜群の着想と隙間だらけの議論という空気が、シェリングの著作にはある。場合によっては連想ゲームに近い場面もある。しかしその場その場で書き込まれる驚くべき着想には、解き明かされない謎として残っているものもある。論理を基調とする哲学の著作のなかで、シェリングはむしろ作家的な資質を備えていた。そのことは一つ一つ事柄を確認するのではなく、膨大な関連する事象を奔放に描き続けるという作風にも表れている。

シェリングによる論理的な仕組みの考案にもそのことが現れており、新たな論理の仕組みを試行錯誤のように作り出そうとしている。ところがその仕組みには、未完成や未熟なものも多く、現在から見て維持できそうもないものも多い。そこで構想として継承できそうなものを可能な限り取り出すような作業が必要となる。つまりシェリングの著作を「展開可能性」という 1 点で読むのである。

シェリングは、時代的配置としては、カント、フィヒテとヘーゲルの間に位置する。信じられないような巨大な才能を持った人たちばかりで、その間にあって、シェリングは論理的整合性以上に、詩的才気のある人だった。「精神」という語を哲学用語として導入したのも、シェリングである。フィヒテをさらに継承する人たちのなかには、ノヴァーリスやシュレーゲル兄弟もいた。格違いの詩的才能を備えたヘルダーリンもいた。そうした人たちのなかで、シェリングは、論理よりも詩的喚起力を活用して議論を展開している。

シェリングにとって、悪は積極的で根源的である。言葉でただこうしたことを言っているだけなら、主張のある人だ、他人向けに何をか言わなければおさまりの悪い人だ、ということになる。しかし哲学が、根拠づけ、理由づけを含むものであるなら、悪の根源性に対しては、相当に覚悟をもって議論するよりない。しかもさらに悪が根源的であるということを明らかにするだけではなく、そのことと同時に、これまで人間には見えないでいた新たな経験の局面が見えてくるのでなければ、それはたんに「悪は根源的である」という立場の主張に留まってしまう。

カントの議論では、人間は自由意志を備えており、自分自身で自分の行為を律することができる。そのときさらに人間には解消しようのない自己愛があるために、克服することのできない「根源悪」が残ってしまう。この根源悪への対処は、いろいろ考案することができるが、根源悪は本当に克服すべきものなのかどうかは相当に怪しい。克服するとは異なる対処の仕方がいくらでもあるからである。

個々の現実では、毎日のように報道される「殺人」「詐欺」「事故」「紛争」「テロ」の事実から、悪は簡単には消滅しないことは誰にでもわかる。そして「この世界から悪はなくならない」ということも、ほとんどの人に薄々感じ取られている。これらは経験的事実である。そうした個々の経験的事実を超えて、哲学は原理的に悪の積極性を取り出して見せなければならない。しかもそのことが同時に、

人間の謎を浮かび上がらせるようなものでなければならない。

シェリングの哲学には、一貫したテーマ設定がある。それは意識が出現することによって、人間は自分自身にとっても解決できない難題を抱え込むことになった、という「原哲学的な課題設定」である。認識でみれば、人間化された認識は主観から客観を捉えるようなものとなり、主観－客観の分裂は意識の局面から見れば避けようがない。いま眼に見えているさまざまな表象が、主観によって構成されているものであるにしても、それは何かについての表象でなければならない。そうでなければたんなる夢想、妄想と表象の区別がつかなくなる。この何かは、それとしてはわかりようがない。人間が知ることができるのは表象であり、この何かはどのようにしても知りようがない。しかしこの何かは、感官に働きかけて、さまざまな触発をもたらしている。そうでなければ、何かについての表象にはならない。そうするとこの何かは、なくて済ますわけにはいかないが、それが何であるかは原理的にわからないことになる。こうして主観－客観で考えれば、「物自体」は避けようがない。こんなことが起きるのは、「意識の立場」からであり、意識が出現してしまうことで否応なく起きてしまうのである。

認識に多くの手掛かりと手段をあたえる意識こそ難題を引き起こしてしまう。たとえば眼前の石は、認識をつうじて「石」だと認定されている。しかしその物は、認識によってはじめて石になったのではない。石はみずから石である。石はそれじたいどのようにして成立するのか。こうした局面で問いを立てると、「それ自体」はどのようにして成立しているのかという問いになる。この問いは、石をどのように認識するかではなく、石はどのように成立しているかという課題へと導く。

そこでシェリングは、意識が出現することによって、この世界は不可逆的な局面変化が起きるほどの変容が起きてしまったと考えていくようになったと思われる。これはライプニッツの言うモナドがそれとしてモナドになるさいに起きることと同じである。そうなると意識が出現するところで終わるような、意識の前史を描いて見せることが必要となる。一般的に言えば、「意識の起源史」の解明が必要であり、意識が出現したときに世界が変貌してしまう様を描くような起源史が必要となる。しかしいったいこうした探求を行うことができるためには、何が必要とされるのだろうか。あるいはこうした探求を行う主体は何なのか。それは意識でも、悟性でも、理性でもないはずである。

意識は、それが出現したとき、自分自身の前史の記憶をまったくなにももっていない。意識は自分のなかを限なく探し出しても、およそ自分の前史の痕跡を探し出すことはできない。おそらく意識の出現は、圧倒的に不連続な変化であり、意識が出現してしまえば、それ以前の前史は、すべて再編され、再組織化されて「前史」と言えるほどのものは消滅してしまう。まるで世界のなかに新たな存在の階層ができるように、すべてはその階層のなかに組み込まれてしまう。こう考えたくなる。

ところが眠っている場面では、意識は消え、覚醒時にも一切の力を抜いて、意識の制御をほとんど解除することもできる。とすると意識は、出現することもできれば消滅することもでき、出現したさいには、自分の前史を消してしまうほどの再編力があることになる。

このことを別建ての問いにしてみる。個物はどのようにして個物となってきたのか。個物そのもの

はそれとして個物となるような生成を経てきたはずである。これは個物の出現と個物の生成を問うような企てとなる。その生成の果てに、やがて意識の出現にまで至ることができれば、当初の課題は達成されたことになる。

自然哲学　こうした意識の前史を生成論として描く試みが、初期の「自然哲学」である。意識は、それが出現したとき、すでに思い起こすことのできない過去がある。これが「先験的過去」と呼ばれる。意識的に思い起こそうとすれば思い起こすことのできる過去が、「経験的過去」である。昨日の晩御飯の風景、一昨日のコンサートの風景、その前の日の美術館の風景のようなものは、思い起こそうとすれば思い起こすことのできる過去である。ところがどのように思い起こそうとしても、思い起こすことのできない過去がある。意識が成立することで、まさに見えなくなってしまう過去がある。

それは意識そのものの地盤であり、基礎である。その基礎は自分自身の前史ではなく、まさに意識の足元にあるような基礎である。つまり意識の起源史は、現にある意識の足元を掘りだすような「意識の考古学」となるはずである。こうした問いとしての構想は、意識の本質を突いているように見える。しかしいったいどのようにして解明を進めるのだろうか。またこうした探求を行うにあたって、同時代で活用することのできる道具立ては、はたして足りているのだろうか。そしてこの問いにまともに答えようとすれば、現時点でも道具立てが足りているとは思えないのである。まったく不足した道具立てで、身の丈を超えた問題をシェリングは解こうとしたのである。

シェリングの生きた時代は、科学史では「第二科学革命期」と呼ばれる時期である。第一科学革命期には、ケプラー、ガリレイ、デカルトのように知の方法の大転換が行われ、力学と天文学で画期的な展開のあった時期である。これに対して第二科学革命期には、化学、電磁気学、熱力学、生物学等々の基本的な法則や規則が明らかになった時期である。いわば激動期だと言ってよい。激動のなかを生きる者は、ともかくも展開見込みのあるキータームや概念やアイディアを同時代の試行錯誤のなかから取り出し、新たな道具立てとして活用しなければならない。どの程度展開見込みがあるかについては、確たる証拠はない。それでも選択しなければならない。そこに各人のセンスがかかわってくる。

シェリングが同時代のなかで選び出したと考えられるもののうち、はっきりと判別できる道具立てがいくつかある。一つは、電磁気のＮ，Ｓや電気の＋、―のように相反する作用が一組となった働きである。ニュートンは、後期物質論で、物質の性質の説明を行うために、引力と斥力を設定していた。引力と斥力も、相反的な二つ一組の働きである。引力の斥力の相互関係をつうじて、この二力が均衡している場面で物質の体積が決まる。斥力が強ければ物体は膨張し、引力が強ければ物質は収縮する。こうした相反する二つの力によって事象を説明するさいには、動力学(ダイナミクス)となる。カントでは、物質が実際に現にある状態であることの根拠として、引力と斥力が設定されている。

シェリングは、こうした動力学のモデルをまったく別の局面まで拡張してしまう。それはおよそ信じられないような拡張の仕方である。自然の第一義的な働きを、「絶対的産出」だとする。最初になにかを作り出す働きとして、絶対的産出を設定(セットアップ)する。設定という語は、定立とか措定とか訳されているが、要するにセットアップである。ちなみにフィヒテの場合、「自分自身をセット

アップする根源的働き」が、「自我」である。絶対的産出は、それじたいは働きであるが、これだけでは現実の個物は出てこない。そこでこの働きが現実のかたちを取るためには、相反する働きが関与する、と考えなければならない。それが「阻止」という働きである。そうすると絶対的産出と阻止という二つ一組の働きが、原初の働きである。しかしこの二つの働きは、ＮとＳ、プラスとマイナスのような相反的な働きではない。むしろ「相補的な働き」だと呼んだ方が良い。

絶対的産出と阻止は、均衡してしまえばそれで自然の形成は停止する。そこでそれらは不均衡でなければならない。不均衡なまま個物ができるとする。この個物には、不均衡なままの二つの働きは、持続的に関与し続けるはずである。そうすると個物は、それじたいも不均衡なまま暫定的に「個物」であり続ける。この場面もかなり微妙な事態が生じている。不均衡なままのかたちを作り出す働きとその不均衡を同型に維持する産出は、相反的ではなく、むしろ相補的である。シェリングは、こんなふうに二つ一組の働きを見つけ出して、自然の自己形成の仕組みを独力で考案してきたのである。

絶対的産出のような働きは、眼に見えるようなものではなく、またそれらがどこにあるのかという問いに対応するような位置指定のできるものでもない。そこに阻止という働きが関与して個物ができるというとき、この場面で活用されているのは、働きとその現実化という仕組みである。もっとも基本となるのは、「働きー現実化」という構想である。このとき潜在的な働きと現実的な個物というように潜在性と現実性が分かれてくる。しかしこれは胚発生のように潜在的なものが現実化するという仕組みではなく、またライプニッツに見られるように、多くの可能性のなかから選択的に一つの現実性が決まっていくという仕組みでもない。というのも胚発生のような場合には、現実化したもののなかで潜在的なものは編成されて、新たに出現したもののなかで再度編成されていく。たとえば遺伝子のひとつが発現して現実形態をとることによって、次の発現が組織化される。こうした生成論、発生論の仕組みとは異なり、シェリングの場合、原初の働きはそれとして残り続ける。

原初の働きは、個物が現実化した後にも同じように働き続けるのである。また潜在的な可能性のなかから特定の個物が出現する場合には、一面の過飽和状態の霧のなかから、一滴のしずくが出現するようなもので、その場合、出現したものは一面の霧とは切り離されていく。ライプニッツが取り組んだのは、この一面の過飽和から、一滴のしずくが出現したとき、当初の場所は一滴の滴にどのように働きかけ続けるのかという問題と、一滴の滴はいずれにしろ最善であるという証明である。

シェリングの場合、潜在的な働きが、制約を受けて一つの個物となるが、この働きはその後も関与し続けるのだから、最も近いのは、流動するエネルギー場のようなところから、一つの粒子が出現し、この粒子には場の働きが関与し続けているというような事例に近いのかもしれない。ただしこの場合粒子は、一般にはそれとして消滅してエネルギー場に戻ってしまうこともあるが、シェリングの場合には特定の方向に形成が進まなければならない。ここに生成論が関与する。こうした構想には適当な名称がないのだが、「不均衡ダイナミクス」とでも呼ぶのがよいのかもしれない。そこでは、一つには「潜在的―現勢的」という枠での現実化の仕組みが含まれている。もう一つは、現実化したもののそれじたいでの生成論がある。これらは根拠－事象という根拠づけの関係とは、およそ接点がない。

ところがシェリングは、こうした現実化や生成論をなおも根拠－事象で考えようとしているように見える。少なくともそうした記述を行っている。

生成論　このダイナミクスは、独特の生成論を含んでいる。なにかが根底から出現したとき、この根底はつねに働き続ける。それは出現が、働きの現実化だからであり、生成がプロセスとしての不連続な自己組織化とはなっていないからである。しかもこの現実化は、引力、斥力のように現象的には相反的な現れでなければならない。事象の基本は相反的な対立するものの一組である。さらに相反的な現れ以前の事象を思い描こうとすると、無差別が採りだされる。これが「無底」と呼ばれるものである。無底はあれでもなければ、これでもないというかたちで特定の現実化以前のものである。無底の特徴は、述語をもたないことであり、それじたいは何物でもないことである。

ここでいくつか確認事項がある。たとえばカントが引力と斥力というとき、すでに成立している個物の体積やかたちを根拠づけるために、こうした相反する力が持ち出されている。すでに個物は成立しており、個物がそれとしてあることの「根拠」が引力－斥力である。この論理関係は、事象－根拠関係である。ところが絶対的産出と阻止のような働きは、そこから個物が出現してくる以上、どのような意味でも根拠ではない。個物はたんなる産物である。しかも個物がいつ変化してもおかしくないが、かろうじて同型を維持している場合には、二つの働きはこの不安定な個物を支えている以上、根拠と同じ位置を占める。そうなると現実に存在する個物の基礎と根拠が混在するような仕組みを考案していることになる。

個物の根底は、個物が成立した後でも継続的に働き続けている。これによって個物がそれとして成立して在ること(産物)と、個物が成立していることの根拠である限りそれとして在ること(産物の持続的な維持機構)の区別が出現している。シェリングは、こうした区別を自然哲学がはじめて実行できたことだと考えた。一般的に言えば、個物の現実化という局面と、特定の個物がそれとして維持されている局面は、異なる考察方法が必要となる。そもそも根拠関係ではないものを、シェリングは根拠関係で考察しようとしている。ここが独特の生成論がもちだされる場所で、＜根拠－事象＞生成論なのである。

物事が現実化するさいには、基本的には対関係で出現する。たとえば善と悪もそれが現実化するさいには、二つ一組で出現し、一方だけが成立するということはない。人間的事象にあっても、たとえば欲求が現実化するのは、欲求が妨げられたときであり、なにかを食べたいという欲求は、それを妨げられているという事情があってはじめて現実化する。際限なく食べ続けている限り、食べたいという欲求さえ現実化しないのである。しかし食べたいという欲求をもたらす働きは、生体の代謝というかたちでつねに働いているはずである。現実化しない働きは、いまだ差別化が起きていない。それが「無差別」(無底)である。

ここでも未分化な先行状態が分化してくるという「分化生成」の仕組みとは異なる。発生的な仕組みであれば、未分化なものが分化すれば、分化したもののなかで未分化なものは再編され、再組織化されるはずである。こうした仕組みは基本的にはシェリングにはない。そのためシェリングの仕組み

は、働きとその現実化であり、現実化では二項対が関与し、現実化しない働きそのものは無差別である。これは時間的経過が関与しない生成論であり、構造的生成論となるよりない。

また根底にある働きとそこから現実化したものの間でも、さらに作用関係が存在する。これは最初の働きからなにかが現実化したとして、最初の働きそのものはそのままのかたちで残るのだから、当然のことのように思えるが、生成のなかで根底がそのまま維持されることは、本当はありえないことである。にもかかわらずそれを認めて、議論は錯綜したものになる。

ここには自然神学(理神論)との整合性を図るという意図もある。自然神学でみれば、創造との関係で、一切が創造時に作られているのであれば、人間の悪も、創造時に作られていることになる。人間は神に似るように作られているはずであるから、人間の悪も神に由来することになる。このタイプの議論は、うんざりするほど際限なく細かな争点にまで及ぶ。

創造は神によって必然的になされているはずである。しかし人間は自由である。この自由はどこからくるのか。それは被造物が、それじたい一つの活動であり、それじたい創造的であることによって成立する。こうして創造の必然性と被造物の自由は、両立する。しかし被造物がそれじたいで創造的で、自己形成するものなら、本来は最初の神による創造の効果は、どんどんと小さなものとなり、実質的に測定誤差程度まで縮小されるはずである。創造の必然性と人間の自由の両立は、結果として創造の必然性の効果を薄めてしまうことになる。こうして議論の力点は、主として「人間的自由の本質」のほうへ向かう。そしてシェリングの場合、自由は善悪の問題に不可分にかかわるのである。

自然神学との整合性の問題は、少々詳細になるが、いくつかの典型的な仕組みで解決されることになった。そこで活用されている仕組みは、三つである。ひとつは、「産出の循環」と呼べるものであり、「一なるもの」が生み出されたとき、その一なるものは、みずから自身を生み出した当の働きそのものを作り出すというある種の循環である。この循環は、神という一なるものの場合でも維持されており、その場合には自分自身のなかに自分を生み出した働きを含むことになる。この一なるものの働きは、最も現実化しやすいもの(ある意味での表層)から最内奥(深層)まで、限りのない深さが備わっていることになる。光は原初の働きの現実化であるが、その底には際限のない闇があることになる。ここから人間の場合の感情や意志に、高さや深さが生じている。ヘルダーリンの言う「人間ほど高く育つものはなく、人間ほど深く滅びるものもない」という直感的事態に対応する仕組みは、ここから来る。

二つ目は、現実化するものは相反的な対となった現実的事柄であり、それらの間の関係からさまざまな事象となる。この現実化は、「形象化」と呼ばれるもので、二つ一組の組み合わせによって、さまざまな形象化が起きる。それと同時に、この場合規則的なもの、秩序あるものは、形象化されたものであり、形象化以前は、無秩序、闇、ランダムな世界である。このあたりのことは無秩序な世界から、秩序や規則が形成されてくるという自己組織化の仕組みに類似した内容が語られている。特異なのは、この闇の根底が何度も働き続けることである。無秩序な流動的働きは、「分開」をつうじて明確な相反的二項対となる。

さらに三つ目は、現示化とでも呼ぶべきもので、精神がある段階で言葉のうちにみずからの働きを示すようになると、神がみずからを現示するというかたちとなる。つまりどこかの段階で、きっかけを得てそれじたいが現れてくる、というそれじたいの自己現出という仕組みがある。

これらは自然神学と自然哲学を整合化させるための仕組みであり、シェリングが加えた自然神学の変更点である。やり方の基本線は、自然哲学のなかに自然神学をうまく配置させることになったと言ってもよいし、自然神学を改変して自然哲学と整合化させたと言ってもよい。

悪は消滅するか　善と悪を語る場合、当然のことだが、シェリングの仕組みでは、両者とも同じだけの深さをもち、また一方が他方を欠くことができないという配置になる。善と悪が現実化するさいには、それぞれが他方に浸透されて、固有化するのだから、両者は等根源的でもある。この場合、悪は善への努力の欠落や、意志の弱さのような事柄にはならない。むしろ悪は、積極的であり、普遍的である。それがかたちをとるさいの根底からの反作用を受けて、すでに呼び覚まされている。すぐに現実化するわけではないが、いつも現実化しようとしているのである。こうした普遍的な悪がある。ここから現実的な悪の出現まではまだ隔たりがある。ことに人間的な悪について語ろうとすれば、人間固有の道具立てが必要となる。それが「我性」である。

起源論からすれば、当初光と闇の相反的な二原理から進んでいく。光はやがて認識や知へと到り、そこから善へと向かう。他方闇は、どこまでも底に留まり何度も「反作用」と呼ばれる働きをあたえる。その途上で、憧憬や愛や普遍的な意志が出現してくるが、こうした記述のほとんどは、アナロジーである。

知的存在者(「叡知的存在者」)は、自由に選択を行うことができる。しかしシェリングは、自由であることは、恣意性とは異なると考えようとした。また自由であることは、外的なものの制約がないことでもない。知的存在者は、それ自身の自然的本性が、それじたいにとっての限定であるようなものでなければならない、と考えている。行為はそれの内面から同一性の法則にしたがってのみ、結果として出現することができる。そしてこの絶対的必然が、絶対的自由なのである。それ自体にとっては自由であることが、形式的に見れば必然であることになる。ここにはみずからを自分でセットアップするものこそ、意識であり、自我である、という大前提がある。この構想は、フィヒテを全面的に継承している。

フィヒテの自我は、みずから自身をセットアップする働きであり、セットアップされたものも自我である。産出する働きと産物とが同じ一つのものになることが「事行」と呼ばれる事態である。これが産出的働きから見た「自我」「意識」「自己」の特質である。この事態は、モナド化の一つの仕組みでもあり、また「それ自体」の成立する仕組みでもある。そして悪が呼び覚まされて後、根本悪となって人間を捉えるのである。このあたりの事情をシェリングは、文学的、あまりに文学的に描いている。

ひとたび創造に於いて、顕示に対する根底の反作用によって、悪が普遍的に激発された後、人間

は永遠よりして我性と我欲のうちに自己を据えた。かくて、生まれくる一切の者は、悪の暗い原理に纏われつつ生まれ来るのであり、ただこの悪がその自意識まで高められるのは、それの対立者の出現を俟って初めて起きるというだけである。

およそこんな調子なのである。まるで宗教書や説話物語のような書き振である。そして悪の普遍化が起きるのは、人間が我性を、みずからの支配者や全意志にまで高めようと努め、精神を手段として活用しようとするからである。人間が、自分自身を創造する根底になろうとし、自分自身を万物の上に高め、万物の上に君臨しようとすると、我欲の飢えが生じてくる。この飢えをつうじて、悪は際限のないものとなる。その結果、悪の内には自分自身を蝕みつくし、どこまでも滅ぼそうとする矛盾があることになる。

しかも人間は、人格性や我性において完全に現実化することはない。まさにそのことによってこの限界や制約を自己の支配のもとに収めようとする。その努力が悪となる。また根源悪もそれじたいは悪ではなく、光や普遍的意志から自分自身を途絶する限りで悪である。つまり善からの絶縁こそ悪であることになる。生命が生き生きとしたものになるためには、どこまでも光と闇、あるいは善と悪の戦いが必要であり、根底の意志は、こうした生命の呼び覚ましであり、それじたいは悪なのではない。

こうした議論のなかで、悪はつねに善とともに、生命の躍動である限り相反しながらともに働いている。その限りでは、生命の躍動に不可欠であり、悪となるのはそれが単独化されたときである。それは我性や我欲のある種の勘違いによって出現するのである。その勘違いの一つが、限定されたものがそれじたいで支配的になろうとすることであり、もう一つが相反的なものであるはずの事態が、単独で出現してしまうことである。

シェリングの悪の教説がおよそこうしたものになることは、仕組みから見て薄々察せられたことでもある。議論の道具立てを括弧に入れると、最も大筋では生命の躍動のためには、善と悪の対立が不可欠であり、その意味では悪は根本的である。この対立関係を何らかの理由でみずから壊して、単独化したものこそ「悪」ということになる。

このとき悪が生き延び続ける理由としては、根源的な生命の躍動という理由しか残らないように見える。そしてやがて比率として、「悪」が減って行ってよいようにも思えるのである。ところが実際にはそうはならない。この仕組みから見て、シェリング自身が誘導したいと望んでいた事態とは異なり、実は善も単独では成立しないはずである。この場合には善が支配的になり、悪が消滅することは、ありえないことである。かりに善がそれとして単独でありうるなら、悪もそれとして単独でありうるはずである。そのことはシェリングが考えた以上に、悪の根深さや強靭さを示しているはずである。しかし解消されない悪の積極的な意義は、いったい何なのだろう。

一つの仮説として述べておきたい。それは経験が拡張するさいに実質的に悪が寄与するのではないかという問題である。シェリングは、膨大な文献を整理しながら、主観性の道具立てとして、悟性や理性や精神を持ち出すが、それらは分析や総合のような機能性を帯びている。

そうした機能性とは別に、経験の拡張という事態がある。それは個々の事実的な経験量が増えるという問題とは異なる。経験が躍動し、みずからを形成し、みずからの境界を広げ、世界への対応可能性の幅を広げていくような「経験の拡張」がある。そのさいには経験そのものも強靭になっていかなければならない。わずかばかりの変化や変異に怯えたりせず、自分を嘆いたりせず、また巨大な不運にも圧倒されず、経験はみずからを維持しなければならない。経験の強靭さ(レジリアンス)や経験の自己形成能力の獲得のような事態では、経験そのものの拡張が起きる。そのさいに悪が関与し、悪をつうじてこうした能力が形成される回路が、おそらくあるのだ。

悪は余分なほど経験を細かくする。描かれた天使の顔は、どれもよく似ている。しかし悪魔の顔は千差万別であり、圧倒的に多様である。恨みや妬みは、愛以上に人間の集中力を高める。そしてなによりも悪はへこたれないのである。そして復讐の企ては、際限ないほどの詳細さへ至る。際限のない分節、不屈不倒、集中と充足、そしてさらには自己超越、これらは経験を拡張するさいの重要な資質でもある。経験の拡張のさいに、悪とその特質が実質的に寄与しているのではないかと予想される。

こうして悪は、善以上に経験の拡張可能性を支えているのではないかと思える。だがシェリングが述べるように、悪は自己破壊し、自滅する宿命も備えている。単独化した悪は、およそ狂気に到るか、犯罪者となるか、みずからの消滅(死)に到るはずである。だがそのことによっても悪そのものが消滅することはないのである。

持続可能性と創造性の整合化を図る場面では、こうしたタイプの課題が、かたちを変えて何度も登場する。悪の問題は、持続可能性だけでは済まない事態の動力学的な表現なのである。

3　プロセスと分岐

力学は、動力学とは異なる仕組みでこのテーマを考えることになる。力学には、運動学と相互作用論が含まれる。雨水のしずくが窓に張り付き落下していくとき、一様に落ちていくのではない。しずくが窓ガラスをずり落ちようとする時、最初ゆっくりと動き出すが、他の細かいしずくと一緒になると、一挙に加速して転がるように落ちていくことがある。また窓ガラスのゴミに引っかかり、しばし停滞し、ゴミを境に大きくなったしずくが、分かれて分離することもある。運動では、物の相互作用が時として強く関与し、時として弱く関与する。これを運動の維持という点から見ると、運動には時として内在的な「分岐点」が含まれていることになる。この分岐点は、運動そのものに含まれていることもあれば、運動に関与する物性が関与している場合もある。運動のさなかに出現する分岐点には、選択が含まれている。ここが「揺らぎ」と呼ばれる。だが揺らぎそのものを単独で取り出すことはできない。揺らぎは物質のように成立しているのではなく、運動というプロセスに含まれる「確率的可能性」のようなものである。物質レベルで考えると、物質には複数の化合のモードがあり、そのどれが出てくるかがあらかじめ決定できないような場面である。

フラーレン　ここ十年程度、人工的な新たな物質素材の形成がつづいた。2000 年前後に公開された「フラーレン」とカーボンナノチューブである。フラーレンは、炭素だけからできた新たな化合物である。炭素だけからできた物質は、チャーコール(たとえば良質の煤)、グラファイト(たとえば鉛筆の芯)、ダイヤモンドの三種が知られていたが、これに新たな物質が加わったのである。フラーレンは、サッカーボールのような形をしている。サッカーボールのほとんどは、六角形の要素単位からなる。ちょうど雪の結晶がつながったようなものである。ところが六角形の結晶だけがつながると、平面状になってしまう。球形になるためには、12 個の五角形が入らなければならない。実際サッカーボールでは、20 個の正六角形と 12 個の正五角形が入っている。

またカーボンナノチューブの先端は、植物の芽が伸びて行くように、半球形になって結晶を増大させていると予想されている。かりに完全な半球だとすると、12 個の半分の 6 個の五角形結晶が存在するはずである。完全な球形でない場合にも頂点に五角形がひとつあれば、円錐形の先端が形成できる。先端が丸くなって延びていくさいには、いずれにしろその位置に五員環構造が出現する。

この五員環の個数で、先端の形態が、丸みを帯びたものから角張ったものまで、さまざまな形状になる。ここから先端に見られる 5 肢構造を推測するのは、一つの科学的ファンタジーである。サクラの花びらもシクラメンの花びらも、5 枚である。ヒトデの足も 5 本である。人の手の指も 5 本である。サクラの花びらも、人間の指も先端に伸びてきた構造体が、末端で形をとったものである。それが全身に現れたのがヒトデである。形態は、形態形成のプロセスの末端の構造とそれが行う形成運動との相関関係の結果である。おそらく先端の 5 肢構造と、ナノ物質の先端の五員環とは、マクロな大きさの構造部材の形成場面で密かにつながっているであろうが、直接的なつながりではない。というのも

ナノ物質の五員環は、反応性に富み、わずかの条件の変化で分解され、また作られるからである。

なぜ五角形は 12 個なのか。ここに出てくるのがオイラーの定理である。立体には多角形が含まれ、頂点では三つの多角形が接しており、また稜線では二つの多角形が接している。これを利用して、(多角形の総数)+(頂点の数)=(稜線の数)+2 を経験則として導くことができる。

実際立方体で計算すると、四角形の総数が 6、頂点の数は 8、稜線の数は 12 でこの定式は成り立っている。すると六角形を a 個、五角形を b 個だとすると、多角形の総数は、a+b で、頂点の数は、6a+5b/3、稜線の数は 6a+5b/2 となり、機械的に(a+b)+(6a+5b/3)=(6a+5b/2)+2 を解くと、a の項が消えて、b=12 になる。五角形の数は、12 個であらかじめ決定しており、六角形の数とは独立になっている。つまり六角形は、小さな六角形を使ってどんなに多くしてもかまわない。また場合によっては七角形を混ぜてもよい。この場合七角形の数より 12 個多い五角形が必要になる。

この球状結晶は、建築家バックミンスター・フラーが作り出した「テンセグリティー構造体」に類似している。テンセグリティーは、構造体の一部に生じたひずみが、構造体すべてにまんべんなく瞬時に伝えられ、外圧を構造体全体に分散させて受け止めるために、複雑な構造体であり、かつ中に広い空間があるにもかかわらず、きわめて安定している。現在では、大型のテントに活用されている。こうしたことから、新たに形成された炭素化合物が、フラ−的なものという意味合いを込めて、「フラーレン」と命名された。

図1 フラーレンの分子モデル
（川合知二監修『図解 ナノテクノロジーのすべて』、工業調査会、2001年より）

フラーレンでは、当初炭素が 60 個入った構造体 C60 が作られた。炭素の塊に、レーザー光を当てて気化させ、熱を断った環境で一挙に体積を増大させるという、断熱膨張をつうじて作られている。ところが結晶化の温度を変えると、炭素 240 個のもの C240、炭素 540 個のもの C540 ができる。12 個の五角形を入れたまま、六角形の数をどんどん増やせばよいのだから、理論上も予測できることであり、ここでは結晶化のさいの温度が、構造体を決める変数となっている。しかも川崎市の国際基盤材料研究所が作り出したものに、入れ子型のフラーレンが生じていた。ロシアのマトリョーシカ人形のように C540 のなかに C240 が入リ、そのなかにさらに C80 が入っていたのである。この生成プロ

セスには、温度だけではなく、さらに新たな変数が出現していると予想される。円形の構造体や半円形の構造体ができるさいには、ごくわずかの生成条件の違いで、異なる構造体ができるようである。

フラーレンの大量合成法は、かつて街燈として使われていたアーク放電を用いる。アークランプの陰極に大量の炭素の塊が出現し、ここにフラーレンが大量に形成される。ところが陰極には、ボール状の塊となったフラーレンだけではなく、チューブ状になった物体も大量に形成されていたのである。これが「カーボンナノチューブ」と呼ばれる結晶である。ナノという単位は、一メートルの一億分の一である。ナノ単位の物質の微細構造は、ミリ単位のものとはまったく別の性質を示すことが知られているので、こうした物質段階を「メゾスコーピック」と呼んでいる。メゾスコーピックな物質段階は、たんなる原子・分子ではなく、またミリ単位の可視的な大きさでもない。中間領域の大きさのことである。この大きさの人工化合物は、たとえば DNA の二重ラセンの二本鎖の間に挿入することができるほどの大きさで、その意味では新たな活用法が次々と見つかりそうである。

この段階の物質では、自然発生的な地球の条件とは異なる条件をあたえると、さまざまな未知の物質が形成される。カーボンナノチューブ程度の物質であれば、自然発生的な条件でも形成されるのではないかというのは、それほど無理のない推測である。実際一時中国の雲南省で採取された炭素の塊のなかから、カーボンナノチューブが見つかったという報告もあった。ところが炭素物質を電子顕微鏡で細かく調査するさいに、レーザー光を使って、物質の起伏や形状や配置を調べているため、その段階でカーボンナノチューブが形成されている可能性もある。そのため自然状態で、この結晶が存在するかどうかは、現在でもペンディングになっている。

フラーレンとカーボンナノチューブは、ほとんど同じ条件で形成されるようである。温度、圧力、電気的条件もほぼ同じである。大量合成の場面で異なるのは、触媒となる金属(たとえば鉄、ニッケル)を介した反応の回路を進むか、この触媒を介さない回路を進むかの違いのようである。つまりプロセスの速度の違いである。だがアーク放電で作った場合は、フラーレンとカーボンナノチューブは、同じ陰極にでき、ともに金属の触媒を介さなくてもできる。

かりにまったく同じ条件で、複数の物質が形成される可能性があり、それらはたんに確率的にわかれるだけであれば、その場合は当初の系に「揺らぎ」が含まれていることになる。揺らぎは、恒常的な規則性から逸脱する確率的可能性であり、系のどこに含まれているかを指定することはできず、それがなんであるかを指定することもできない。その意味で揺らぎは、特定可能な異物である「ノイズ」とは異なる。かりに揺らぎが含まれているとすれば、ここにも分岐可能な変数が含まれている可能性がある。

一般的にイメージすれば、炭素の結晶がつながっていくさい、半径方向（垂直方向）の形成速度と、軸方向(横方向)の形成速度が同じであれば、形成の結果は球形になり、それに対して軸方向の形成速度が著しく大きければ、棒状になる。問題は、この形成速度の違いが何によって生じるのかである。いまのところこの点については、まだよくわかっていない。

だがこうした自己組織化の分岐点に遭遇するたびに、自然の可能性について、選択の現場に立ち会

っていることは間違いない。こうした分岐点にこそ自然の形成可能性があり、そこでの条件を変えれば、新たな創発がさらに生じるかもしれない。このさい自然が何であるかを知ることではなく、自然は何に成りうるかという点から、自然が感じ取られている。こうした感度を習得するために、自己組織化の現象は、またとない材料を提供してくれているのである。

ここに含まれる構想上のアイディアは、かなり素材や部材関係の条件が同じであっても、形成速度を変えてみると、自己組織化のモードが変わってくることである。生成の速度は、分子反応の場合、多くは温度が決定変数になることが多い。だが触媒があれば、一挙に局面を変えることもできる。システムの制御において、「速度」はプロセスの現実を律する有効な仕組みでもある。

鉄の自在　もう一つの事例を「鉄」について取り上げる。鉄を基本とする製品は、圧倒的に多様である。針金も橋脚も包丁も刀も鉄でできている。同じ鉄を主成分にしながら、そこから作り出される物質は、圧倒的に多様である。この多様さは、制作時のごくわずかな条件の違いによって出現している。鉄製品は、多様性に満ちている。しかもかなりの偶然に左右される。そのため製鉄業には、コツのようなものから、どこか秘境がかった名人芸まで、断続的に続き、少数ながら継承者も細々と続いている。草の根のファンは続いている以上、奥行きのあるテーマなのである。これが、鉄が金属の王位の位置を占める理由である。

製鉄の起源は、アジアにある。ヒッタイトのボアズキョイ遺跡からは、製鉄の痕跡が見つかっている。紀元前 2000 年頃のことである。その後インドで技術は高度になり、中国に伝搬したと言われている。秦の始皇帝の頃には、鉄を扱う官・職人の配置が命じられ、表面加工の技術も進んだようである。また加熱用には、薪や炭の代わりに、石炭が使われてもいる。

朝鮮半島では、紀元後 1 世紀頃、青銅器の武器が鉄製の武器に置き換わっていく。3 世紀頃には、朝鮮半島の技術が日本に伝わったとみられるが、日本国内の遺跡からは、6 世紀頃からの製鉄の跡が見つかっている。この時期の鉄製品は、大陸から持ち込まれた製品を分割したり、崩したりした後、再度製品に加工したものだと言われている。日本国内での最初の製鉄は、古墳時代の中期頃に開始されたと言われており、吉備で始まったとされる。実際に山陰では砂鉄を使ったものが多く、山陽では鉄鉱石が原料に使われることが多い。

鉄は、銅、銀、金のような貴金属に対して、「卑金属」と呼ばれることがある。どこにでもあるからである。ところがこれだけ汎用性が高いところをみると、鉄にはそれ固有に何かあるのである。刀や大砲の筒や橋げたは、容易なことでは変形してはいけない。包丁は研いで多くの用途に応えなければならない。針金は容易に形を変え、かつ簡単に切れたりしてはならず、かつ多大な重量に耐えなければならない。これらはすべて鉄製品である。同じ鉄から、多様な製品が作られる。これが鉄の特性である。それはいったい何に由来するのか。

基本的な目安は、炭素含有量である。鉄の製造過程では、炭素含有量を調整することができる。鋼は、炭素量 0.1-1.7%であり、そのなかでも炭素量の多い鋳鋼は、刀、刃物、工具となり、固いが折れたり割れたりする。炭素量が減るにつれて、バネ、車体、船体につかわれる。固いが変形が効くので

ある。さらに炭素量が減り「軟鉄」となると、釘や針金となり、展延性が大きく、割れたりちぎれたりはしない。

炭素量が減り、純粋に鉄の原子の結合体になると、どうして柔らかくなるのか。常識とは、かけ離れているようにみえる。実は炭素量が減ると、鉄の結晶がきれいに並ぶ。するときれいに並んだ面に沿って、伸ばしたり曲げたりが容易になる。だから「軟鉄」と呼ばれる。きれいな結晶構造は、力学的な変形が容易である。簡単には解けたりちぎれたりはせず、融点も高い。だが融点がくれば鉄であっても流体状になり、結晶構造は組変わってしまう。

また鋳鉄は、炭素量 2%以上であり、融点が低くて溶けやすく、加熱しながらの加工が簡単である。鉄鍋や鋳物に使われている。一般には、炭素の含有量が増えれば、融点が低くて過熱による加工が容易で、逆に炭素の含有量が減れば、柔らかく伸びやすい。

鉄の性質は、炭素含有量が決定的だが、物性としては、炭素が減れば固くなるわけではなく、逆に炭素が増えれば固くなるというわけでもない。ここから炭素を含む鉄の結晶構造は、一意的ではなく、さまざまな結晶構造があると考えた方が実情に近いことがわかる。そうなると過熱して加工することで、多くの鉄の性質を引き出すことができる。

その一つが刀であり、鉄の結晶構造を変化させ、焼き入れ、焼き戻しによって、実際鉄にはさまざまな性質をもたせることができた。名刀は、刀の姿、形の問題ではなく、素材の性質そのものに多様性があるために、何度も焼き直すのである。その途次に、刀の表面に模様が出てくる。

安来鋼は、日立金属安来工場が開発したもので、切削用工具、機械の工具用に使われている。また磁力をあたえて鉄に磁性をもたせることができる。ところが熱すると磁性が消えてしまう。これは結晶構造が組み変わったことに由来する。

さらに鉄の有用性は、合金を作るさいに、結晶構造の多様性に対応して、多くの有用な合金を作り上げることができることである。このさいにも物性としては、奇妙な性質が出現する。不純物を多く含む合金は、並んだ結晶の面に沿って移動しにくく伸びはなく、固い。ただし合金がどのような結晶なのか、それぞれの合金で結晶は一通りのかたちなのか、よくわからない。KS 鋼は、鉄にコバルト、タングステン、クロム、炭素を加えて作られている。結晶構造が変化しにくいらしく、永久磁石鋼として利用されている。カンタルは、鉄にクロム、アルミニウム、コバルトを加えて作ったもので、電熱線などに使われている。ステンレス鋼は、さびにくく、野外で使うものや厨房設備や電車の素材に使われている。鉄ークロム系と鉄ーニッケルークロム系とに大別される。

これだけ性質が多様だと、作り方のわずかの違いによって、多くの鉄製品ができてしまう。タタラ製鉄が、ある種の職人芸、名人芸になるのは避けようがない。3 日間もしくは 4 日間の不休、不眠の作業が、どこか常軌を超えた神業のような雰囲気をもつことも、かえって自然な様相を帯びる。わずかの条件で異なる鋤や銑ができてしまうのである。また製鉄の仕方に改良が加え続けられることも、むしろ当然であるように思える。

中世以降のタタラ製鉄には間接製鋼法である「銑押し(ずくおし)」と直接製鋼法である「鋤押し(け

らおし)」とが存在した。銑押は、中世から近代の半ばにかけて全国で広く行われた方法であり、鉧押しは、16 世紀初頭になって登場した播磨国の「千種鋼」を始まりとすると言われている。

銑押しは、たたら炉で炭素濃度の高い銑鉄を作り、それを大鍛冶場（おおかじば）と呼ばれる別の作業場において脱炭精錬して錬鉄や鋼にする方法である。ここで行われているのは、まず不純物を取り除き、鉄のまとまり(銑)を作る。その後別の場所で、炭素量を調整する。炭素量の調節は、温度と酸素に依存する。鞴で酸素を送り、炭素と化合させて、鉄の炭素含有量を減らすのである。タタラ製鉄では、この銑押しが中心となっている。

鉧押しは、直接鋼をつくるために不純物が相当に多く混ざっていると考えられる。全体の日数は短縮できるが、実質的にはある種の合金である。そうなると炭素含有量だけではなく、冷却の速度によって、結晶のかたちがかわってくると考えられる。また混ざっているものの違いにより、わずかずつでも違いがでる。不均質さの度合いが異なるのである。

製鉄の現場で、効いてくる変数としては、化合している酸素を還元し、炭素を化合させていくための木炭の質、加えていく砂鉄の量、温度の維持と送風量のような大雑把な指標を取り出すことができる。それらの指標を微妙な数値に適合させていくためには、やはり頭領である村下による調整力が物を言う。温度の維持のためには、魯に使われている土、風の通り、村下による細かな指示が決定的である。

明治に入っても、しばらくは中国地方産タタラ鉄が鉄製品の大多数を占めていたが、明治 20 年の釜石鉱山製鉄所、およびその十数年後の八幡製鉄所(後の新日鉄)の創業により急速にその比率が低下していく。タタラ製鉄は 19 世紀の初めには成熟期を迎え、幕末から明治中期にかけて国内製鉄の中心だった。しかし明治 30 年代、安価な輸入鋼材の流入、および国内で洋式製鉄が普及して、急速に衰退していった。

ヨーロッパでは、すでに 14－15 世紀に高炉法に転換していた。高炉というのは窯の丈が人間の背丈を超えて、巨大な炉になるということである。ドイツのライン河流域のジーゲルランドでは、川の水を利用した。高炉の利点は、木炭で燃やした火が高くまで立ち上ることであり、窯全体が高温になることである。実際に還元された鉄は、温度が高ければ活発に炭素と化合し、炭素含量が増えれば融点が下がる。これによって大量生産が可能になる。問題は、この高さになったときに、還元のための空気を大量に送ることができるかどうかである。その時利用されたのが、水車で巨大な鞴を動かして、空気を送り続ける仕組みである。水車を動力として活用するという力学がすでに行われていたのである。

また木炭が量的に間に合わず、16 世紀末には、掘り出した石炭が使われるようになっていた。ところが石炭は、一般に硫黄成分を多く含む。そのため硫黄を含む鉄ができてしまうが、このため脆い鉄になる。そして鞴を動かすために、ほどなく蒸気機関が活用されるようになる。18 世紀の半ばには、実用的な蒸気機関がジェームズ・ワットによって作られている。こうして石炭と蒸気機関により、製鉄産業は、森林や河川に恵まれない立地でも行えるようになっていた。18 世紀末には、石炭を燃やし

て熱だけを製鉄に活用する反射炉が開発され、硫黄成分を取り除くことにも成功するようになった。

洋式製鉄は、炭素含有量が大きいために、量は豊富だが粗雑な作りも多かった。固いが脆く弾力が少ないのである。刀のような個性的単品を作るさいには、なお「タタラの技術」は生き続けている。奥出雲町には 1993 年(平成 5 年）に「奥出雲たたらと刀剣館」が開館した。 2016 年(平成 28 年)には、文化庁により日本文化遺産として「出雲國たたら風土記――鉄づくり千年が生んだ物語」が認定され、島根県と奥出雲町、安来市、雲南市が観光客誘致を図っている。こうしてタタラ製鉄は、歴史的遺産と観光地になった。

均質さと多様性の問題は、製鉄の場面でも繰り返し登場する問題であり、課題でもある。現在は大手鉄鋼会社(新日鉄、神戸製鋼その他)が運営する、大容量の「高炉」型の製鉄所と鉄スクラップ(屑鉄)を再加工する「電炉」(東京製綱等)に大きく業態が区分される。高炉の場合、大量生産であるが、工程の手順は同じである。高炉による製鋼は、高炉（溶鉱炉）で銑鉄をつくる段階と、そこで作られた銑鉄を「転炉」で精錬して各種の鋼を作る「製鋼」の二段階になっている。規模を問わなければ、高炉でも銑を作り、大鍛冶場でさらに炭素比率を調整するという手順が使われている。不純物を取り除き、比較的まとまった鉄(銑)を作り、その後化合炭素量を調整して、各種鉄製品を作るのである。

電炉の場合には、屑鉄を原料とするため、少し手順が異なる。電気炉の形は、蓋のついた大きな鍋のようなもので、その蓋には黒鉛でできた太い電極が垂直にさし込まれていて、これに電流を通すと、鍋の中の鉄スクラップと電極との間にアーク放電が発生し、このアーク熱で、鉄スクラップが溶かされる。

この過程でさらに酸素を吹き込み反応熱で温度を上昇させることから、この工程は酸化精錬と呼ばれている。一度酸化させるところが屑鉄のリセットである。さらにそれに続いて酸素や硫黄を除くために還元が行われる。還元精錬では、酸化性のスラグ(屑)を炉の外へかき出してから、コークス、石灰などを加え、還元性のスラグを形成させる。そして、粉コークスと石灰とが高熱によってカーバイトとなって脱酸、脱硫を行う仕組みである。さらにコークスや微小合金を加えながら、鉄の結晶化に違いを創り出す。こうした工程で鋼が出来るまでに 1－2 時間でできてしまう。電気炉の特徴は比較的少量の多品種の生産に適している点である。大量生産型の高炉と多品種用の電炉に分岐しながら、製造のモードが分岐してきているというのが現状である。

鉄が、人間の文明のなかで、金属製品の中心を占め続けた理由も、こうしてはっきりしてくる。地球上に広く分布し、かつ生成法によって多様さをもたせることができる。その工程と工夫の一時期を、タタラ製鉄が占めていたのである。

参考文献

金屋子神話民俗館『鉄人伝説・鍛冶神の身体』(1997 年)

金屋子神話民俗館『絵図に表された製鉄・鍛冶の神像』(1994 年)

シンガー他『技術の歴史　9』(筑摩書房、1979 年)

谷川健一『鍛冶屋の母』(思索社、1979 年)

中沢護人『鋼の時代』(岩波書店、1964 年)

永田和宏『たたら製鉄の技術論』(アグネ技術センター、2021 年)

文化庁『鉄づくり千年物語　TATARA』(2017 年)

ベック『鉄の歴史』(中沢護人訳、たたら書房、1975-1986)

和鋼博物館『和鋼博物館　総合案内』(2001 年)

4　出雲という時間

出雲は、縄文時代、古墳時代の文化的な代表地区の一つである。出雲には 4 つの時間が流れている。一つは地質学的な遺産が、地表に現れる形で出現しているものである。地元の農民が水田の下に杉の巨木が現存していることに、うすうす気づいていたことから、この地質学的な時間が表面化してきた。いくつもの偶然が重なって、杉の巨木が立ったまま維持されていたのである。

2 番目の時間は、古代国家の形成の中心地のひとつだったことである。国の骨格形成の主要な場所となっている。「ヤマタノオロチ」そのもののような分岐した川(斐伊川上流)が広がり、急峻な山を越えると、広大な平地が広がっている。ここを舞台に、天照大御神の弟のスナノウが活躍したことになっている。いわば「神話の舞台」である。

さらに第 3 の時間については、大陸の文化は朝鮮半島を経て断続的に入り、独自の産業を形成していた。その文化の一つが、「たたら製鉄」である。木質の農具から見ると、鉄の文化は一挙に局面を変える。現在は、博物館や記念館になってしまっているが、それらは歴史のランドマークでもある。大和朝廷による全国統一のさいにも、出雲には独特の配慮が見られる。

そして第 4 番目に、歴史的遺産をふんだんに含んだ、ありふれた現在の地方の姿である。日常の日々は、どのように華々しい過去を含もうと、何事もないかのような日々の姿をしている。日常はいつも淡々と生きられる。だがそこにも異なる時間が折り合わされるように流れている。

これらの多くは、歴史の詳細を確定できない時代だが、現在にも残存するいくつかの資料から、出雲のイメージを描いてみることはできる。産業の中心にあるのは、製鉄である。タタラ製鉄という語で示された製鉄業は、砂鉄から作られた独特の工法をもつ。『出雲風土記』に出てくる「片目の赤鬼」のイメージから、高温に触れる作業をやっていたものがいたということは推測できる。しかも製鉄のような多くの人数を要する作業を賄うためには、生産基盤や働くものの生活を支えるほどの農業技術が準備されていなければならない。また製鉄法から見て、広大な森林が必要である。奥出雲には相当に大きな経済圏が出来上がっていたとみるのが適当である。この製鉄は当時の世界水準で見ても水準が高かった。『延喜式』には、税を鉄の塊で納める記述もあり、豊富な生産量があったことがうかがわれる。

文化人類学者によれば、日本の多神教は水田の耕作に由来している、と言われている。稲には微妙な条件が多く絡む。花の咲くころには微風が必要であり、夏には十分な水が必要であり、水を落として実を引き締める頃には、大型の台風は望ましいことではない。多くの願いが、自然神のかたちで象徴化されている。ところが日本の文化のなかに、鉄文化の神の系列があることが明らかにされている。在野の民俗学者、谷川健一が明らかにしたもので、この系列は、まったく質が異なる。鉄文化は日本各地に入り込んでいる。その代表が、出雲のタタラである。鳥取県の県境にある安来市には、鉄の神を祀る「金屋子神社」があり、南に下って奥出雲に行くと、「目刀保タタラ」「菅谷タタラ」等がある。

菅谷タタラは、ごく最近まで運用されており、この仕事の全貌をうかがい知ることができる。こうした異質な時間の重層的な流れを体験できることが出雲の魅力である。

1　出雲の輪郭

出雲に隣接する西側に三瓶山があり、麓には自然博物館や三瓶山の噴火によって埋もれた杉や田畑を掘り出した「埋没林」の公園がある。この小豆原地区には約 4000 年前の噴火活動で埋もれた巨木群が存在し、「三瓶小豆原埋没林」として国の天然記念物に指定されている。森林がそのまま埋積されたもので、大きなものでは高さ 12m、直径 2.5m を超える幹が直立している。火山の噴火によって火山灰が山積みとなり、一挙に酸素と水を断ったために、缶詰状態のまま、数千年前の杉が地底に直立のまま保存された。これは世界でも稀なことで、地中の樹木が発見される場合には、根本で折れ巨木の付け根だけが地中から掘り出されることがほとんどである。

地中で巨木が立ったまま維持されるためには、いくつもの偶然が重ならなければならない。噴火にともなう火山灰が薄っすらと積もり、火山の噴火とともに出現した土石流が下流を堰き止めて、流れてくる土石流を堆積させ、地面そのものが嵩上げされて、スギがそのままの姿で埋もれてしまったというのが土壌調査でわかっていることである。

この地区は大雨が降った後、川岸付近で、地中から大きな杉の先端が突き出ていることがかなり以前から報告されており、何か大きな堆積物が地中にあることは、以前より推測されていた。だが実際に地中を掘ってみるまで、どのような状態なのかはわからなかった。発掘作業は、まさに 4000 年を掘り返すようなものである。地中に掘って作られた公園は、4000 年前の植生を真横から見るようなところがある。歴史が足元から積みあがっているという感触である。

地底巨杉

石見国と出雲国の国境に位置するこの三瓶山は、『出雲国風土記』が伝える「国引き神話」にも登場する。国引き神話では、三瓶山は鳥取県の大山と共に国を引き寄せた綱をつなぎ止めた杭だとされている。『出雲国風土記』は、地名の由来、伝説等を網羅的に調べ上げた「地域記録」である。奈良時代の初頭(713 年)に官命が下され、郡郷名に字をあてること、郡内の物産の品目リストを作ること、土地の肥え具合、名前の由来、古い伝説などをまとめることという通達が出され、それにそって記録が作られた。「風土記」のうち記録が残っているのは 5 つの風土記であり、完本で残っているのはこの『出雲国風土記』だけである。そこでは三瓶山は「佐比売山（さひめやま)」の名で記されている。

さらにその西側に、石見銀山の銀を掘り出した跡が残っている。銀は重金属のために、健康にとってはいくぶん危険な物質である。だが希少な鉱山資源でもある。銀鉱山が活発に開発されたのは、戦国時代から江戸時代にかけてである。利権を争うように争奪戦が行われ最終的には毛利がその地を確保している。豊臣秀吉によって「全国統一」の姿が作られて以降、毛利は大量の銀を献上している。

『古事記』(712 年完成)は、『日本書紀』(720 年完成)と並んで、日本の起源を記したものである。歴史は、そこに時代編年史が含まれる以上、起源を描くことはできない。起源は突如始まる。人間の能力では、生成のプロセスを見ることができず、生成の結果しか知りようがない。生成のプロセスの開始には、いまだ記録がない。この隙間を埋めるのが、「神話」であり、神話はいずれにしろ終わった後になって、出発点を描く試みである。また統一されてきた大和朝廷の由来から見た「正当性の理由付け」でもある。この意味で、神話はそれじたいは物語であるものの、政治の一つの機能を果たしている。『古事記』も『日本書紀』も、開始の混乱と収束を描く物語である。

そこにはスターが登場する。そしてスターたちが活躍する現実の舞台が必要となる。国造りによって国土が作られて後、最初の神が出現する。それが天照大神(女性)であり、光と太陽の神である。また高天原が舞台である。高天原が、どこなのかは諸説があり、決め手がない。特定の場所でなくとも、どこかの場所をイメージしていたはずである。天照大神の弟が、スサノウ(須佐之男命)である。またスサノウの 6 代後の子孫が、オオクニヌシ(大国主神)であり、全国平定の役割を担っている。この二人は、『古事記』の冒頭場面でのスーパースターである。

スサノウはやんちゃで暴れん坊であり、天照大神の水田を壊して高天原を追放され、さまざまな土地を放浪し、それでも多くの戦いを勝ち抜き、歴史のなかにイヴェント(事件)を創り出していく。困った人たちがいれば、スサノウは戦いを挑んで勝ち抜く。その一つの逸話が、奥出雲の斐伊川でのヤマタノオロチ(八岐大蛇)退治である。川は一般に上流では細く険しく、下流では広く緩やかになる。だが奥出雲の斐伊川は、だっだ広く、ゆったりと流れている。現在では川の両側に桜並木が作られ名所でもある。いくつもの支流が入り込み、ゆったりとした流れになっている。たしかにオロチの出そうな雰囲気はある。

斐伊川・ヤマタノオロチ記念碑

『古事記』の記述によれば、スサノウが斐伊川の上流にささかかったとき、川の上流から箸が流れてきた。そのもとを訪ねると、老夫婦が娘を挟んで泣いており、老人は出雲の地の守護神でいわゆる山の神だと言う。自分の八人の娘は、毎年オロチに食べられて、残るは一人になってしまった。オロチの姿は、眼は赤く、頭は八つ、尾が八つ、身にはコケ、ヒノキ、スギが生え、身体の大きさは八つの谷、八つの峠を越えわたり、腹は血が滲んでいると言う。

そこでスサノウは、オロチを退治するための作戦を立て、オロチに強い酒を飲ませて、眠っているところを十拳剣で切りつけると、なにか固いものにあたり、十拳剣の刃が欠けてしまうほどであった。オロチの尾から素晴らしい剣が出てきたのである。これが「草薙剣」であり、スサノウは姉の天照大神にこのことを報告し、剣を献上した。この剣は、後に皇位の印である「鏡」、「勾玉」と並んで、三種の神器となる。

当時すでに、立派な剣を作ることができるほどの製鉄技術があったのであり、オロチを切りつけると斐伊川が赤くなるほど川には鉄分がすでに存在していたと考えることができる。川そのものに鉄分があるのではなく、周囲の山から鉄成分が流れ込み、砂鉄の状態で川底に堆積していたと考えてよい。

技術では、制作的行為をつうじて制作物となった途端に、誰によって作られたものかは基本的に消滅する。制作物はつねに無名であり、その意味で制作物は文化よりも自然に近い。反復と複製可能性を備えたのが技術である。制作物のなかで、絵画や彫刻には固有名が残る。だがその場合でも複製可能性は残る。そのため贋作が成立する。制作者を留め、それを言葉で再現しようとすれば、つねに一つの比喩に留まってしまう。

スサノウは、八人姉妹の残った一人を娶って、雲南市に宮殿を作ったとある。その地を「須賀」という。こうして物事を言葉の世界、とりわけ名詞に落とすと、人間の営みがことごとく覆い隠されて

しまう。その言葉の世界に、さらに特異な言葉の世界が付け足されていく。

スサノウが須賀の宮を作って以降、その地から雲が立ち上がり、そこで日本最初の和歌が作られたと言われている。それが「八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を」である。言葉が音楽的速度とリズム性を獲得し、言葉の組み合わせが別の原理で作動するようになる。言葉を音楽として使うことは、語の接続運動に快をもたらすことであり、祭祀の打楽器とは異なる語の音楽が形成される。これによって言葉の向こう側の世界はますます覆い隠されていく。言葉はどこまでも言葉であるが、つねに言葉の向こう側を余韻として残す。だがそれが何なのか、もうほとんどわからなくなる。これは言葉がそれとして自律していき、言葉に言葉が回付していく場面の成立であり、言葉が現実以上の現実になっていく分岐点でもある。

オオクニヌシは、他の風土記ではオホモノヌシという名で、全国平定の働きを行っている。オオクニヌシはある種の官職名だと考えてよい。出雲のオオクニヌシは、おそらく朝廷と地域の融和の仕事をしていたと思われる。出雲の文化水準、経済水準から見て、争いがあってもおかしくないところに、大規模な争いの跡がないのである。オオクニヌシの元の名は、オオナムジノカミと言い、各地の八十神(ヤソガミ)に何度も襲われ、実際に二度殺され、一度は瀕死の重傷を負っている。その程度のいさかいはあったのだろう。印象として、オオクニヌシは善意の人のようだが、どうにもひ弱で、それでも黙々と働き続ける人という輪郭が浮かび上がる。

オオクニヌシにまつわる話のなかに、因幡の白兎の話が出てくる。隠岐の島から本土(因幡)に渡りたいと思っていた白兎が、ワニ(サメ)を騙して、一列に並ばせ、総数を数えあげると告げて、並んだサメの背中伝いに移動する。ところが最後につかまり、全身の毛を抜かれて、さらに対応を誤り、全身皮膚病になる話である。塩水に濡れたまま身体を乾かすと、塩害の植物が枯れるように皮膚表面が破壊される。こうした物語からも、地域の融合のさいには、いろいろ行き違いがあるのだろうと推測できる。また多くの男を騙してきた隠岐の女が、最後にはさんざんな目に遭うというようなことを、物語的なイメージとして活用しているのかもしれない。

そこに通りかかったオオクニヌシが、ウサギの身体を真水で洗い、ガマの穂綿で白兎を治してやるという話になっている。そしてオオクニヌシは出雲に入り、出雲大社を建立するということになっている。しかもその出雲大社は、現行の物より 2 倍近くあったということなので、巨大な神社だった。おそらく出雲文化圏のなかでの大和朝廷のランドマークだったのである。

出雲大社正殿

2　タタラ

日本での鉄の生産は、縄文時代末期から古墳時代にかけて開始されたと言われている。当初は鉄鉱石から鉄を取り出すやり方であり、大陸経由の技術であった。鉄鉱石と言っても、花崗岩由来の岩石や宇宙から落ちてきた隕石に由来するもの等がある。鉄は、アルミニウムに次いで地中に多く存在する元素である。しかも特定の地域だけに分布する元素ではない。銅、銀、金に比べて精製が時期的に遅れるのは、精製術が大掛かりだからである。

日本に多く存在するのは、土に混ざった小さな鉄粒であり、さらに小さくなると砂鉄となる。ここから鉄の塊を創り出す作業が、製鉄である。「タタラ」という言葉じたいは、製鉄のための家屋全体についての呼び名であったり、道具の一部である鞴(踏鞴)の呼び名であったり、当てられる文字も変化してきたが、現在ではこの「製鉄法」の名称として使われるようになっている。

まず山の中から見つかる細かな鉄成分を、泥や混合物を取り除けるようにして、集めてこなければならない。それが鉄穴流しである。やり方は簡単だが、骨の折れる作業である。山際に水路を引き、山を崩して土砂を水路に導き、下手の洗い場に運び、そこからさらに大池、中池、乙池、桶と順次流しながら、軽い土砂を取り除いていく。要するに、ただ比重を使って分けているのである。重い鉄は沈む。軽いほこりや泥は、順次下流に流す。そうなると膨大な泥が排出される。

一般の河川に流し込めば、稲作にも支障が出るばかりでなく、そもそも生活用の水が濁ってしまう。そのためこの作業は、秋の彼岸から春の彼岸に限定して行われていた。それでも大量に泥は出る。そのため再度土を集めて、新たな田畑の開墾に使われたようである。崩した山に土を運んで田畑に作り替えるのである。山を切り崩して棚田に作り替えているところもある。実質的に起きていることは、土壌で見れば、山を崩し、その土地や別の土地で田畑を開墾することだが、その間に土壌に含まれている鉄成分を濾し取るのである。

また鉄の塊を作るさいには、膨大な木炭が必要となる。そのため当初は、場所移動を繰り返しなが

ら、製鉄場所を移動させている。これが「野だたら」と呼ばれている。輸送方法の改善により、特定の場所に製鉄装置を設定する場合が、「永世たたら」であり、高殿を築きそこに固定して作業を継続するようになった。

こうして砂鉄を大量に集めて乾かし、酸化鉄のかたちになっているものを還元させなければならない。しかしただ還元して放置しておけばただちに酸化が起きる。安定させるためには炭化させておくのがよい。炭素と化合させなければならないが、高濃度の炭素と温度が必要となる。これを効果的に行うために作られているのが、「高殿」である。砂鉄から巨大な鉄の塊までの形成は、膨大な作業である。

製鉄粘土容器・高殿

安来市にある「和鋼博物館」では、砂鉄から鉄の塊(鈩と呼ばれる)までの製鉄過程が再現され、映像化され放映されていた。係員にビデオ撮影をしたいと申し入れてみたが、この博物館はそもそも日立金属所有の博物館であり、現在では安来市教育委員会が管理している形だが、展示物はすべて日立金属から借りている状態なので、一切の撮影はできないと断られてしまった。

博物館の入り口には、巨大な鈩が置かれていた。また入り口の左には、実際に使われていた鞴が置かれていた。相当に大きな装置で、両足を交互に踏ん張り、一人で踏み続けることができるようなものではない。1 日の作業のなかでも、何人もの人が交代しながら、作業していたと思われる。これは歴史的には、17 世紀の終わりに出雲国で作られたもので、「天秤鞴)」と呼ばれ、たたら製鉄の効率を上げることになった。両端に支点のある 2 つの踏み板を真ん中に立つ 1 人ないし 2 人の番子(鞴を踏む作業員)が交互に踏む方式であり、送風量の増加と番子の負担軽減をもたらした。空気を送り込むことは、炭火の燃焼温度を一定にして、鉄分に化合している酸素を取り除くための還元反応を促進す

ることになる。

巨大フイゴを踏む

製鉄のビデオ映像によれば、粘土質の土を大量に用意して、まず窯を作る。これが高殿と呼ばれるものである。地面も粘土質にしておく。薪も大量に用意して、窯を高温にする。煙に取り囲まれることを防ぐために、薪は炭にしておく。そのため大量の炭が必要であり、棟梁の家系では、広大な森林を所有していた。その薪の上に、乾かした砂鉄を注ぐように繰り返し入れる。そして窯の側壁から、連続して空気を吹き込む。砂鉄は高温となり、酸素が分離し燃えた炭素と化合して、流体状となり、窯の底部に沈んでいく。温度を見ながら、さらに砂鉄を足していき、数日夜を徹してこの作業を繰り返す。火の温度を一定に保たなければならず、空気も恒常的に入れ続けなければならないので、かなりの人数が必要な作業であり、しかも村下(むらげ)と呼ばれる棟梁が、注入する砂鉄の量や炭の量を指示し、3 日間もしくは 4 日間徹夜で作業を行う。

炭化された鉄は液状になり、窯の下部で順次積み上がり、鋼の塊となる。その後、火を断ち、冷やして後に、窯を崩していく。窯はそのつど作っては崩し、次の作業でまた作られる。3 日間あるいは 4 日間の作業でも、巨大な鉧ができる。これが鉄の母形であり、刀や金道具の素材となるものである。一定量の鋼や銑ができると、火を断ち、冷やして後に、窯を崩していく。窯はそのつど作っては崩し、次の作業でまた作られる。

巨大な鈩・和鋼博物館入り口

実際には用いる砂鉄の質と作業の長さによって、さまざまなタイプの鉄ができる。一般的には粒の細かい砂鉄を炭火の中に投入することによって短時間で還元吸炭が進み、また比較的低温で加熱するために、リンや硫黄などの有害不純物の鋼への混入が少ない。ところが化合する炭素量と温度によって、いくつかのタイプの鉄ができる。生産された錬鉄、鋼、銑鉄は、近代以降には洋鋼に対して、それぞれ「和鉄」、「和鋼」、「和銑」と呼ばれるようになった。鋼は、叩いたり、伸ばして鍛えることができるので、刀、刃物、工具とし活用され、銑(ずく)は含有炭素が多くもろいので、鍛冶場で炭素を取り除き、包丁や農業工具が作られていた。材料も少し異なり、鋼では真砂砂鉄、銑では赤目砂鉄が使われたようである。工程も、鋼では 3 日、銑では 4 日かかるが、この違いは含まれた炭素量に関連している。

奥出雲の「菅谷タタラ」は、現在もなお使われていた当時の姿が残っている。重要文化財に指定され復元されたのである。作業員たちは、近隣に住み集落をなしていた。山内(さんない)と呼ばれる集落である。かつて持続的に操業が行われていた時期には、山内の人口は 34 戸、160 人近い集落だったようである。

タタラ製鉄所建物再建

またこれだけの作業工程であるので大小の事故は起こったと思われる。そのための祈願の象徴も必要だったに違いない。それが「金屋子神社」である。金屋子神社に伝わる奉加帳によると、その信仰は安芸、備後、美作、播磨、伯耆、出雲、石見などにおよんでいる。各タタラ集落である山内では、祠や高殿に神棚を設け、金屋子神社から分霊して祀り、タタラの操業が安全で収穫が多いこと、さらには、不調のときには呪力によって正常に戻るように念じ、それが現実となったという伝承は多いとのことである。

金屋子神社

こうした分岐する時間は、過去の上に最近の過去が積みあがり、さらに現在が積みあがり、やがて

は未来が積みあがるという仕組みの蓄積型の時間周期にはならない。それぞれは固有の時間経過と時間の再現の仕組みをもつに違いない。現在のなかに複数の時間が流れていること感じさせるための場所があるに違いない。間違いなく、出雲はその一つなのである。

参考文献

荻原千鶴『出雲国風土記』(講談社、1999 年)

『古事記』(池澤夏樹訳、河出書房新社、2014 年)

竹田恒泰『現代語　古事記』(学研、2011 年)

しまね自然と環境財団『森のことづて』(2016 年)

松本直樹『神話で読みとく古代日本』(ちくま新書、2016 年)

山田英雄『日本書紀の世界』(講談社、2014 年)

吉本隆明『初期歌謡論』(河出書房新社、1977 年)

5　活動の継続のプロセスと内在的多様性—ゲーテ自然学

シェリングの自然哲学の場面で、個物の自己維持的な傾向と自己増加する傾向の二つの傾向が取り出されていた。これは個物そのものの自己組織化的な形成プロセスの分析のためのモードの一つである。これじたいは持続可能性と創造性の折れ合うことのできる必要条件の提示という性格を持ち合わせている。個物そのもの分析を超えて、よりマクロなシステムの分析であったり、自然学を実行する経験そのもののシステムの分析に向かうためには、さらに適合性の高いモデルケースとなる事例が必要だと思われる。それをゲーテの自然学から取り出すことができる。

生成という経験　生成するもの、あるいは生成そのものを捉えるための手立ては、感覚・知覚にとってそう多くはない。最も一般的には、生成の結果だけを認識できるとするものである。たとえば平面に書いた図形を立方体として捉えるとき、ゲシュタルト転換を経験する。ある面が前面に出ていた立方体から別の面が前面に出た立方体に変わるとき、数秒間の時間がかかる。ゲシュタルト転換は、瞬時には起こらない。このゲシュタルト転換を起こす隙間のところで、認知は猛烈になにかの活動を行っているはずだが、知ることができるのは、ゲシュタルト転換をした後の図形だけである。生成プロセスのなかにいるものは、それが何であるかを知ることはできず、生成プロセスの結果だけを知ることができる。これが生成するものへの認識の本性であり、認識の限界でもある。結果として出現したものについては、吟味を行うことができ、真/偽の判定を行うこともできる。結果として出現したものの吟味と真/偽判定を活用し、真/偽が次々と入れ替わる経験を「経験の形成」として活用したのが、ヘーゲルの『精神現象学』である。

また生成プロセスの傍らにいるものは、動いているものと静止しているものを間違いなく感じ分けている。止まっているものが突如動き始めれば、そこに異なる事態が起きてしまっている事実は、誰にとっても感じ分けることはできる。これは動物にも広範に見られるもので、突然物音がすれば、動物はそちらに注意を向けてただちに身構えている。これじたいは感覚的反射運動のレベルでの経験であり、ここには身体運動が同時に伴う。このレベルの経験を運動の科学的認識と対比的に論じると、時間空間で指標された運動とは異なり、直接的に感じ取られた運動がはっきりと感じられる。

時間空間で記述された運動の図柄を早回しするとアニメーションにしかならない。生命の動きは、誰であれアニメーションとは異なることを良く知っている。すると時間空間的な記述以前に感じ取られている生命の運動を前景に出すような議論が生じる。ここを活用したのが、ベルクソンである。また動きが出現したとき、この動きの出現には、変化率の大小がある。変化率が大きければ、なにやら緊急の事態が起きていると感じられ、小さな変化率であれば、場合によっては無視可能な範囲に留まることもある。この変化率の大小も、運動性の反射反応で捉えられており、変化率の大小の感じ取りを、ドルゥーズは「強度」の一つだと考えている。感じ取られた変化率の度合いは、「強さ」としてしか捉えられない。しかもそれが何であるかが分かる以前に、変化率の度合いに対してはすでに身体運

動で反応してしまっている。この身体運動は、変化率の度合いと一対一には対応しない。ここが不確定で偶然がからむ場面である。

個体性　さらに生成するものを捉えようとすれば、生成のなかでそれじたいでなにかが維持されていなければならない。この維持されているものが個体である。個体は生成プロセスをつうじて個体化する。ここが生成を経ることによって、あるいは生成をつうじて同時に個体がそれとして個体であるような場面である。この個体がさまざまな細かな変化をもたらし、場合によっては別の個体の姿にかわっていくのであれば、この個体はさまざまに変化していく基本形となる。この基本形は、それとして別のものに成りゆく運動を内在するので、「動きのかたち」である。しかもそれじたい「具体的な形」である。個物である場合には、そこに基本形の直観とそれが変化しながらいずれ変わって行くという予期が含まれていく。この両者がまるで一つのことであるかのような含まれる場合が、「原型」である。ゲーテの場合、原型は理念形ではなく、なにかの具体的個体である。植物では、「双葉」の状態である。当初植物が、土のなかから姿を現すとき、最初に「双葉」のかたちで出現してくる。この双葉は、後にさまざまな姿を取るが、当初の「双葉」という基本形が、原型となる。

「原型」にはプロセスのなかでみずから個体化する運動と別の個体のかたちへと変貌していく運動の予期が含まれていることになる。このモードの異なる二重の運動が、「原型」に感じ取られている働きである。こうした働きをうまく表現するような概念やキータームは、ギリシャからゲーテの時代までをつぶさに探しても見当たらない。どこか違うがなんとなくわかるような語や概念であればいくつか見つかる。その一つがシラーの持ち出した「理念」である。

カント主義者であったシラーは、理念が一番近い語だと考えたのだろう。しかし理念では、原型の内実をほとんど覆うことができない。[1]というのも原型という事態は、およそ純粋認識の対象ではないからである。むしろ原型は、運動性の直観で捉えるしかない。そのとき認識が一つの行為であるような事態を現すようなタームが必要となる。それが「認知行為」「行為知」「実践知」と呼ぶことのできるようなものである。[2]カントの用語では「純粋」という語が繰り返し活用されるが、それはそれ単独で成立するという事象を表している。経験的事実を介することなく直接認識される事象のことである。だが原型は、そのタイプの事象ではない。またカント以降、「絶対」という語が頻繁に使われるようになるが、それは事象そのものが「無限性」を含んでいるという意味である。原型はそのタイプの概念でもない。とすると原型は、認識論や各種存在論の概念では語れないことになる。少なくとも原型は、認知行為の事象である。

最も単純化した局面で捉えてみる。眼前にある個物が、いつ変化してもおかしくないが、かろうじて同一性を維持している場合を想定する。いつ変化してもおかしくないという局面に不均衡な拮抗状態があり、他方同じかたちを維持している局面に不均衡状態の反復的な継起がある。この二つは相補的に働き、眼前の個物の事象を支えている。こうした個物において、一方では不均衡状態の働きが取り出され、他方ではそれの継起的反復の働きが取り出される。これの典型事例の一つをシェリングが提示していた。これらが原型という現象の内面であり、こうした内面の必要条件を取り出しているこ

とになる。こうした異なる二つ一組の働きが、基本的な事象の「内的原理」となる。

1　ゲーテ自然学には、自然の運動に関して、二つの原理がある

こうした二つの原理のうちの一つは、相反するものの「不均衡対関係」(双極性、不均衡動力学)であり、もう一つはそれを繰り返し生み出し続ける円環的で「再起的な反復」である。この二つは、ある事象をそれとして出現させるために、さらには生成する個体をそれとして出現させるために欠くことができない。だが、これらの二つの原理を一つの働きに統合することもできず、また一方だけで済む、ということもありそうにない。ところがこれらの二つの原理の関係は、さまざまなモードで組み合わせられる。そこに領域としての固有性が出現する。[3]こうした多様性への展開の見込みを拓いているのが、「原型」という発想であった。

気象学も、マクロ現象でありながら、ゲーテの注目を引いた。気象の変動に関与している変数を取り出す作業を行っており、そこには二つの指標がある。一つは気圧であり、もう一つは湿度である。これらの数値の変動は、気象の変化を象徴的に示している。大気を満たす物質には、圧力、重量、弾性等の性質がある。大気には水が出現したり、水が含み込まれて青空になったりする。またゲーテは赤道での雲の時系列的な変化を取り出している。朝は晴れており、朝 10 時頃には絹雲状となり、やがて雲の層の変化がある。正午頃には、雷雨となる。その後夕方には薄い雲が出現するが、夜には雲散する。

ここで対立する 2 原理(動力学的 2 原理)だと考えられるのは、「地球の引き付ける力」と「空気の加熱力」に由来する膨張であり、「圧縮と膨張」が不均衡対関係に相当する。それらの間の変動が繰り返されるが、この変動の反復は、地球内部の回転運動(自転)に由来するとしている。

この場合、不均衡動力学の支えとなる二つの相反する原理(圧縮と膨張=気象そのものの出現)と、反復的な気象の変化(時系列的再起性=自転の周期性)は、異なった仕組みによって支えられている。つまり相互に外的でそれぞれが独自に並行的に成り立っている。気象は、マクロすぎる事象であり、あまりに多くの変数が関与するが、それでもこうした複数の原理を取り出すことに成功している。圧縮と膨張は、気象という事象そのものの現実化に相当し、カント的な言い方では、「気象の可能性の条件」となる。そこにさらに周期性が外的に関与するのである。

動植物の原型は、有機構成(オーガニゼーション)の具体的なかたちであり、それじたいは普遍的であり、また同時に多様化する。そのとき有機構成には、内に向かって進む完全に純粋な使命と、外に向かっていく純粋な関係もある。この相反する運動の傾向が、ダイナミクスとなる。

有機構成は、当時の大流行語の一つであり、体制、有機性、有機体制とさまざまな訳語があたえられてきたが、部分間の関係そのものを指標していたり、部分の変化が大幅に起きたとしてもなお維持されている当のものを指標していたり、部分とは異なる水準の自己維持するネットワークを指標したりしている。

時代によって突然のようにある語がつかわれることがあり、当初はさまざまな意味が盛り込まれ、

やがて別の語に置き換えられていくことがある。こうした語をフーコは、「エノンセ」と呼んだ。こうした語は、当初それぞれの人が思い思いの内実を盛り込むために圧倒的に多様な意味を含んでいるように見える。最も有効な意味を持ち込めれば、先駆的な概念の創出者となり、新たな発見の道筋を見出した人になる。ゲーテの眼には、この「有機構成」(体制)は、さらに内的な働きを見出すための材料に見えている。「生体の完全な体制には、内に向かってゆく極度に純粋な使命と制約がある一方、外に向かっていく純粋な関係もまた同時に存在していなければならない」というのである。

内的な中核をなす決定的形態があって、これが決められた外的エレメントによってさまざまな姿に形成されていく。この内的形態と外的姿を形作る傾向が、不均衡になっているために、極めて特殊なすがたも出現することができる。原型的直観は、ダイナミズムの直観であり、原型の継起的反復がかたちの形成となる。たとえば竹の節は同型の原型的単位を繰り返し接続するようにして、成長する。

この場面では、不均衡な二つの傾向(働き)が持続的に作動している(膨張と収縮)場合でも、一定期間は同じすがたを維持しているのだから「不均衡状態の自己維持」という継起的、再起的反復の働き(有機構成)があるに違いない。ここでも不均衡ダイナミクスと持続的、円環的な有機構成の働きが、いわば「相補的」になっている。動植物学では、純粋な内的形態の維持ではこうした相補的働きがかならず作動している。この相補性は、部分的には「相互制約」的で、円環的有機構成の働きは、変化への抑制となっており、メタモルフォーゼのタイミングを計るような働きを示している。

色彩論では、不均衡ダイナミクスは赤－緑、黄－青のような補色関係に出現する。ところが色彩円は、隣接性から成り、円環的固有領域を形成する。この不均衡ダイナミクス(補色関係)と隣接性による円環的活動は、色彩の二つの面という「相互内属関係」となる。

この色相環が閉じることによって、まさにその環境に「光」と「闇」が位置付き、光の近傍には黄が出現し、闇の近傍に青が出現する。色相互の隣接性と異なり、光と黄、闇と青は色彩そのものの出現にかかわり、「色彩という事象の境界」にかかわる事象である。隣接というとき、光と黄は「次元的な浸透」という隣接である。光と黄の隣接は、黄と橙の隣接とはまったく性質が異なる。[4]

ゲーテ自然学の内部でも、「不均衡動力学」と「円環的活動」は、いくつかの典型的なかたちで捉えられており、相互外在(気象学)、相補的(植物学)、相互内属(色彩論)のような異なるモードで捉えられている。この二つの働きは、統一することはできず、一方にとって他方を欠くこともできない。そうなるとシェリングではっきりとしたかたちを取った「不均衡動力学」の二つの要素である、ダイナミクス(不均衡性)と、それらの連続的維持とは、さまざまなモードで連動する仕組みへと発展していたことがわかる。気象学にはまだはっきりとしたかたちで残っている「動力学的な仕組み」は、色彩論ではほとんど消え去っている。わずかに残るのは、光と闇の双極性である。そのことは動力学とは異なる仕組みで、同じ事象にも対応できることを示唆している。そこに出現するのが、「自己組織化の仕組み」である。

ゲーテの自然学のうち、気象学、植物学、色彩論をここで取り上げていることには、相応の理由がある。実は、これらの事象には、本来「循環性」が含まれている。この循環性は、気象学では一日、

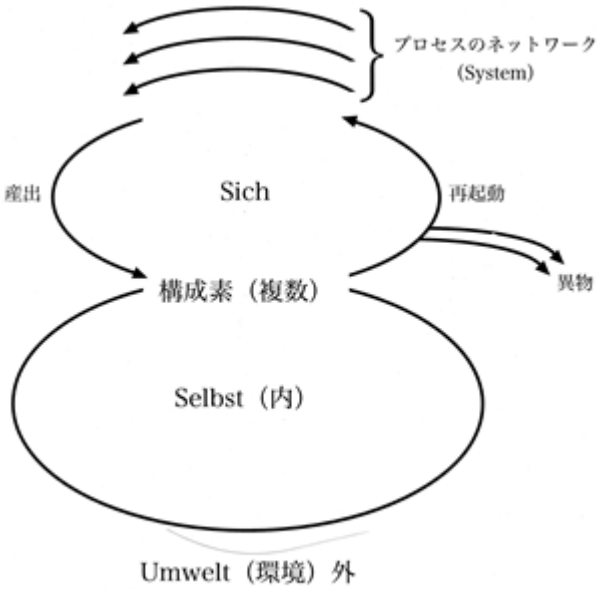
季節、一年のような単位で変動の循環性が成立している。また植物学は、1 年生植物では発芽して双葉を出し、その後全身を組み換えて成長し、種を作って終わるまでの一年の周期がある。多年生のものも多くは年周期でプロセスを進んでいる。色彩論は、色彩円に循環性が出現している。こうした循環性が含まれる事象に、変動要因として不均衡性や双極性が内的に組み込まれていたというのが実情に近い。

ゲーテが手掛けた事象領域のなかで、こうした仕組みにならないものもある。典型的には、「鉱物学」である。鉱物は圧倒的に多様だが、循環的な生成プロセスを経て、こうした多様性が出現したのではない。かりに地層の変化や地質の変化にマクロな変動があるにしろ、おそらく循環性は成立していない。そうすると鉱物の多様性はどのようにして出現したのか。この問題は、鉱物の由来を詳細に調べても回答に行きつきそうにない。かりに起源に、水や火を置いたとしても、そこからの派生的生成で、鉱物の多様性が出現したのではない。本来多様な原子・分子の化合や組み合わせによって、鉱物の多様性は成り立っている。要素の多数性から生じる多様性は、基本的にはデジタル的である。こうしたデジタル的な多様性を内的に組み込んでいくためには、もう一段階新たな構想が必要になる。そのとき動力学的な仕組みは、跡形もなく消えてしまうのである。

2　オートポイエーシスは何を語ろうとしているのか

いまたとえば動物のメタモルフォーゼを考えてみる。オタマジャクシは、自分の身体を解体しながらそこからでる部材を使ってカエルに組み替えていく。もはやオタマジャクシでもなくいまだカエルでもない局面を通過する。そのとき組み替えの活動そのものと、組み替えながら作られていくものの活動は別の物となる。何かが作り変えられるとき、作り変えのさなかで継続して働いている活動と、作り変えられて新たに活動していくものは、事象上区別される。この事態を含むように定式化してみる。

オートポイエーシスの模式図



オートポイエーシス・システムの概略図

これは以下の当初の定義を概略的に図式化したものである。

> オートポイエーシス・システムとは、構成素が構成素を産出するという産出(変形および破壊)過程のネットワークとして、有機的に構成(単位体として規定)されたシステムである。このとき構成素は次のような特徴をもつ。(1)変換と相互作用をつうじて、自己を産出するプロセス(関係)のネットワーク、絶えず再生産し実現する。(2)ネットワーク(システム)を空間内に具体的単位体として構成し、またその空間内において構成素は、ネットワークが実現する位相領域を特定することによってみずからが存在する。(マトゥラーナ、ヴァレラ、河本英夫訳、1980)[5]

原型やオートポイエーシスのように、それじたいで「生きていること」と地続きになっているような構想は、人間の言語で定式化しようとすると必ず無理が来てしまう。言葉が事象に対して不足している状態であるため、言葉の意味を読み解き、言葉から事象を解読しようとしてもほとんど届かないのである。言葉をそこでなされている経験の影だと考えていくよりない。言葉がそれの影であるようなある種の仕組みを感じ取り、その経験の内実を可能な限り、科学的に捉えていくよりない。

ここでのシステム構想の箇条書き風に取り出してみる。

1)システムの本体を、プロセスのネットワークだとしている。見えないものを見るような特質として設定されている。人間に眼では、働きは直接見ることができない。免疫の働きは見えず、バランス調

整の働きも見えない。また当然のことだが、「心」も見えない。しかし免疫グロブリンや、調整ホルモンや脳神経系は見ることができる。この見えない部分が働きに相当し、それを最も単純化した事態で取り出せば、プロセスのネットワークとなる。

2)このプロセスは特定の空間内にはない。どこかの空間内に描けばこの活動の影のようになってしまうような設定である。空間内にないものを見る、という直観が必要である。

3)こうしたプロセスのネットワークから特定の事物が形成される。この場面は、過飽和状態の一面の霧から水滴が一滴析出してくるような場面と同じである。何故、いつ、どこでそうした水滴が出現したのかについては答えようがない。しかし現に起きることである。一般的には、この部分は「産出的因果」と呼ばれる。これじたいは産出関係を因果関係になぞらえて命名した誤った名称であるが、産出的因果はどのような解明に対しても、限界を含む。というにも産出は因果的関係ではなく、そこには「質変化」や「起滅」が含まれているからである。

4)産出された要素が、自分自身を生み出したプロセスのネットワーク(システム)を再起動させなければならない。事物的要素が自分自身を生み出したネットワークを再起動させるかどうかが、要素がシステムの構成素になることができるかどうかの分岐点になっている。ここに「円環的、再起的作動」が組み込まれている。

5)円環的、再起的作動には、多くのモードがあり、そのモード全般が「有機構成」と呼ばれる。それぞれのモードは、種に対応する。つまり有機構成のモードがアリストテレスの言う「形相」に相当し、形相は時として新たに出現する。

6)そのことをつうじて自動的にシステムの要素の範囲が決まる。それによって産出的プロセスと、その後の再起動のプロセスのさなかで、おのずと要素の集合が決まる。そこがこのシステムでの「個体化=モナド化」の要である。

7)認識の場面での空間の問題がある。人間の知は、空間内に事象を描くという視覚と空間に圧倒的に制約されて成立している。システム(プロセスのネットワーク)は、いまだ空間内にはない。それの産出する事物をつうじて空間が形成されてくる。事物の張り出す広がりによって、空間の内実が決まる。これは位相空間の設定に似てくる。事物の関係が固有空間を張り出すのであって、あらかじめ設定された空間のなかに事物が出現してくるのではない。こうして張り出された領域が、図の下の自己(Selbst)に相当する。ところがカエルのような両生類は、この自己さえも組み替えてオタマジャクシからカエルに成っていく。ということは生の途上で、みずからの住まう空間そのものを変えてしまうシステムもある。この部分が、オートポイエーシスが圧倒的に多様な応用領域をもつ理由になっている。かたちが変わるだけではなく、空間そのものを変えてしまうのである。

社会学者のルーマンは、膨大な記述的システム論を展開した。その場合、基本的に、Selbst の多様性(展開可能性)を活用している。しかしこのシステムの機構が、記述と経験の拡張という点で威力を発揮するのは、システムそのものの出現と再編(=メタモルフォーゼ)の局面(Sich と Selbst の連動)である。

8)哲学の伝統で言えば、形相そのもの出現を、主として運動の継起的反復の側から主題とする構想となっており、現象学で言えば、「事象の出現」「事象の出来」を主題化するものとなる。生成プロセスのさなかでの意識の出現さえ主題とするのだから、主体形成の行為論となる。この点ではゲーテの精神を全面的に継承するものとなっていると考えられる。

ゲーテとオートポイエーシス

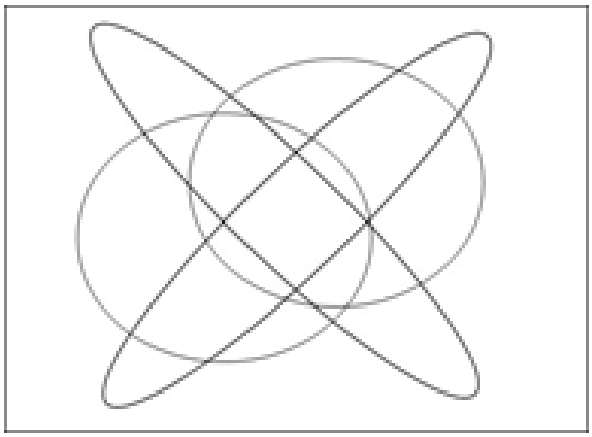
1)ゲーテの構想との違いは、オートポイエーシスは動力学的な拮抗する対関係を使わないことである。それをプロセスのさなかでの構成素の自動選択性に置き換えていく。つまりある意味でオートポイエーシスはデジタル的である。プロセスのさなかの選択性をささえるところに接続・切断の不均衡選択性が出現する。ゲーテの直観を、プロセスの側から組み直しており、動力学的ダイナミクスをプロセスのさなかでのダイナミクスに置き換える。

2)かたちを「動きのかたち」とみる点は、両者は共通している。高速で動き続けているコマが回転しながら静止していることがある。この回転する静止がかたちである。かたちとは激しく動く静止の直観である。

3)ゲーテを古典派だと呼ぶとき、古典派の意味は、人間の歴史の総体を引き受けていくという点に力点がある。歴史の総体を引き受けるためには、それなりの道具立てが必要となる。そうした道具立ての最有力候補の一つが、オートポイエーシスである。オートポイエーシスは、21 世紀型の「原型」の仕組みなのである。

4)複数個のシステムの連動を扱う仕組みが、オートポイエーシスでは細分化される。ここにカップリングの機構がある。カップリングとは、複数のシステムが相互に決定関係のない媒介変数を提供し合っている連動関係のことで、極めて緩やかな関係である。

5)行為者と観察者の関係　オートポイエーシスは、個体化のプロセスの定式化であるが、個体化を完了した後の局面では世界内の一個の不連続点になる。そうすると観察者から見たとき、世界内に多くの不連続点が散在しているような外観となる。しかしこれはシステムの外から、複数個のシステムを観望した眺望的な見え姿である。人間の意識が、つねに観察者にもなりうるという能力を備えている以上、オートポイエーシスの存在論は観察された個体の併存のようになる。そしてこうした視点こそ、観察者の視点だとして繰り返し括弧に入れなければならないものであった。こうしてかりにオートポイエーシスにとって「体系」(システム)ということがあるにしても、知にとっての全体図というようなものではなくなる。しかも各システムは、それぞれのシステムの作動によって固有の空間を形作り、それらは時として交叉していたり、内部の一部を共有したまま連動しているような図柄となる。喩えてみれば以下の図のようになる。



そしてこうした図柄さえ括弧に入れて、プロセスのさなかに繰り返し戻っていくことが必要となる。こうした事態を、「システム的還元」と呼んできた。最低限、それぞれの円環の動きのなかで、他の円環がどのように見えているかを考えてみてほしい。そしてさらにみずからの円環がそれとして出現してくる局面を想起してみてほしい。それがオートポイエーシスの経験なのである。認知と行為には、部分的に相反的な関係がある。認知が前景に出てしまえば、行為は本来そこに含まれている場合であっても隠蔽されてしまう。そのため認知を括弧に入れるようにして、行為へと回帰していくのである。「学んでも何もわからない、行為することが必要」な場面である。

3　芸術的制作

こうした経験が形術的制作にとって何を意味するかを確認しておきたい。一つには、制作プロセスは、このプロセスの継続と、プロセスの産物としてのその都度の制作物に分岐していくことである。作品は、プロセスが目指しているものではなく、また一切の主観的条件から由来するものではない。プロセスを歩むものは、次のプロセスへと継続するための試行錯誤を繰り返している。その途上に、制作物がプロセスの副産物として出現してくる。ここでは開始条件からも、作られた作品からも、制作を特徴づけることはなくなる。あるいはそれはある種、人間固有の誤解だと考えていくのである。

溶液のなかで結晶化が進行する場面を考えてみる。結晶の開始は、外からあたえられる振動でも外気温の上昇でも内発的な偶然でもよい。結晶化はしばらく続く。このときプロセスから考えていくのである。結晶化の一つのプロセスを想定する。このプロセスは、次のプロセスに接続する。それと同時に、プロセスの外に「結晶」を排出する。プロセスから排出されたものは、生命体で言えば「糞」である。ここではプロセスの内容が、二重に分岐している。一つはプロセスの継続であり、もう一つが結晶化というプロセスの外に排出する進行である。起きていることは、およそこうした事態である。ところが化学的な定式化を行うと、出発点に反応物質を置き、そこから反応が進行して、反応産物が出てくるように描かれる。これは化学反応式で描かれているような仕組みである。人間にとって最も

分かりやすく、かつ誤解を含んでしまっている場所である。その誤解の特質は、(1)反応産物は、本来プロセスの進行の副産物であるにもかかわらず、反応の到達点であるかのように捉えられてしまう。ここには目的や目標という意識の事実が根深く入り込んでしまっている。化学反応式は、どこまでもアリストテレス的な目的論の枠内にある。反応は産物に向かって進行するというわけである。また人間の言語では、二重の分岐を描くことは容易ではない。そもそも言語こそ「線型」の表現形式である。この言語で二重に進行する事態をうまく表現することはできない。(2)開始条件から産物に到るような線型の関係は、粗い要約であり、プロセスは一貫してプロセスに回帰して、円環的な作動を繰り返し、他方プロセスに回帰しない物は、プロセスの外に出ていく。ここに結晶化することもあればしないこともあるという選択的分岐が含まれている。ここが不均衡の出現する局面である。こうして化学反応式のようなありふれたものでも、本来はゲーテ自然学のなかに含まれるような「不均衡状態での局面の変化」と「反復的な継起」が含まれているのである。そのことの粗い要約が近代科学であることになる。

こうして産物を到達点ではなく、副産物として捉えることが必要となり、プロセスのさなかにある者にとっては、産物はみずからのプロセスから外にでたものになる。そのため主観性の原理をどのように整備しようとも、それは制作の仕組みに届くようなものではなく、また制作者の意図をどのように推測しようとも、そこから作品までは到達することはありえないことである。物事の制作というさいに、説明のために人間の活用できる材料が不足し続けている、というのが実情に近い。それは建築物を考えるさいにも同じことが当てはまっている。

> 家を建てる場合を想定する。13 人ずつの職人からなる二組の集団をつくる。一方の集団には、見取り図、設計図、レイアウトその他の必要なものはすべて揃え、棟梁を指定して、棟梁の指示通りに作業を進める。・・・もう一方の 13 人の集団には見取り図も設計図もレイアウトもなく、ただ職人相互が相互の配置だけでどう行動するかが決まっている。職人たちは当初偶然特定の配置につく。配置についた途端、動きが開始される。こうしたやり方でも家はできる。[6]

これは制作の二つのプログラムを指定しており、第一の集団のプログラムが近代科学的な設定である。第二のプログラムが、多くの動物が活用しているプログラムである。事実アリやハチが、巣を作るさいに、あらかじめ談合して設計図を見て作っているとは考えられない。またそうした証拠があるとも思えない。第一のプログラムは、結果から見て結果に到達するように組み立てられたプログラムである。これに対して第二のプログラムは、典型的な「自己組織化」のプログラムである。ただし第二のプログラムを人間が実行するさいには、闇雲な試行錯誤にはならないはずである。このプログラムには、プロセスのさなかにある人間の意識の関与する度合いによって、さまざまなヴァリエーションが出現する。その一つが、プロセスが次のプロセスに接続するように試行錯誤的な選択がなされる場面であり、それが継起的な反復のかたちとなる。またそのつどプロセスの外にでるように何かが造

られてしまうので、それを巻き込むようにプロセスが進行するはずである。結晶化のプロセスでは、個々の結晶はただ排出され、蓄積されるだけであった。その意味で産物としての結晶は、糞であった。ところが人間的な事象の場合、自分の作り出した糞をさらにプロセスに巻き込み、糞を活用していくことになる。この糞の活用の場面で、選択的な不均衡が生じることになる。ここでも別の変化へと促す不均衡とそれの反復的進行という二つの局面が断続的に現われていくことがわかる。

こうした構想の位置価を検討しておきたい。制作行為の主観的条件については、シラーが検討を行っている。そこではカント的な認識論を前提にして、作品の質料性にかかわる「質料衝動」と作品の姿や形にかかわる「形式衝動」が、認識のための条件に代えて、制作のための条件として取り出される。そしてそれらを媒介して接続する位置に「遊戯衝動」が設定される。ただの認識論であれば、カント的な「統覚」もしくは「構想力」を置くところに、遊戯衝動を置くのである。カントの場合、芸術的制作は、新たな素材を見出し、それと形式をうまく適合させるところが、芸術家の才能となる。この場合、基本的には新たな形式の形成は認められない。というのも新たな形式が次々と産みだされると、次々と世界には無秩序が出現してくることになり、また多くの場合それらは「認識不可能なもの」となるであろう。そうなると素材をうまく取り出し、それに適合的な形式を探し出して、新たな作品として作り出す能力が、制作にとってはもっとも重要なものとなる。シラーはそこに「遊戯衝動」を置いている。ただしこの概念がカント的な心の働きだとすると、どのようにしてこれが起動し、機能していくのかが容易には語れなくなる。

総体としてシラーは主観性(心)の働きを、認識論を手本にして語っているように見える。[7]そしてそれはもっぱら芸術の鑑賞に力点を置く分析となる。というのも制作行為は、作り出してしまった物(個々の特定可能な物)を手掛かりにして、あるいはそれに制約されながら、さらにプロセスを進めていくところに特質があり、主観性の働きをどのように詳細に語ろうと制作行為とは別のことを語ってしまうことになるからである。プロセスの特質は、「自動」的な進行であり、すでに作り出された物によっておのずと動かされている場合(被動)や、制約されながらも自発的な進行を経るような場面が分岐してくる、認識論で見られるような能動、受動だけではなく、自然に動かされているような被動的作動、おのずと進行してしまっている自動的作動、制約されながらもみずから進むような自発的作動のような行為のモードの違いが出てくるはずである。それぞれでプロセスのさなかにある行為の調整能力や気づきに変化が生じてくる。

さらに制作物と制作行為は、つねに二重に進行する事案となる。この点では、産出する働きと産物は、つねに二重に作動していることになる。そのことによって産出する働きと産物が同一だとして定義されるフィヒテの事行は、基礎づけ基礎を急ぐ余りの勇み足である。基礎づけ構想から進む場合、どこかに拠点となる出発点を設定しなければならない。フィヒテの場合、それが「みずから自身をセットアップする働き」である。それが「自我」と呼ばれる。自我とはみずから自身をセットアップする働きのことである。セットアップという語は、伝統的に「定立」とか「措定」とか訳されてきた。内実は、設定する働きのことである。そのときセットアップする働きとセットアップされたものとの

関係が問われる。セットアップする働きとセットアップされたものが実は同一であるというようにフィヒテは設定している。これが「事行」であった。

しかし芸術的制作の場合、作り出す行為と作り出された作品が、同一になるような場面は、稀な例外を除いてありそうにない。作り出された作品はつねに作り出す行為を超え出てしまっており(自己超越)、作り出す行為は作り出された作品にすべて現実化することなく、むしろそのため制作行為は制作行為そのものに回付する(自己回帰)。

こうしてみると事行とは産出する働きと産出された物が、二重に分岐しながら作動を繰り返す作動体であってもよかったのである。このとき産出する行為をプロセスのネットワークとし、産物を産出された構造体とすれば、ちょうどオートポイエーシスの定式化したものに類似してくる。ところが産出のネットワークと産物は、同一になることはありえず、構造体の出現生成をつうじて無数に個体が出現してくるので、フィヒテの想定とは異なり、唯一の基礎づけ基礎が決まるかたちにはならない。基礎づけの拠点形成を試みたフィヒテの事行は、その仕組みの延長上に無数の開始点、無数の個体が出現してしまう。この場合、哲学にとってはあまりにも多くの任意性が出現してしまうが、芸術的制作にとっては、むしろ望ましいことであり、積極的に活用できる事態でもある。

同時代の初期ロマン主義者は、とりわけ「反省」という語の意味合いを変更し、「自己関係づけ」という程度の意味合いで、反省という語を拡張することになった。こうした自己関係づけの働きが反省の起動する出発点の拠点化を解除し、反省がたとえ自己に回帰することになった場合でも、みずから自身と合致することはなく、際限なく二重化が起こり続けることを主張したのである。[8]この時期の芸術論が自分自身の踏み台にしたのは、フィヒテの知識学であり、シュレーゲルは主として「反省機能」の拡張を行い、ノヴァーリスは制作行為での産物の自己超越に力点を置いている。[9]

オートポイエーシスの場合、さらに制作プロセスに力点が置かれる。フィヒテの延長上に、主体の働きをどこまで拡張できるかではなく、むしろプロセスのさなかで「主体」そのものがどのように形成されるかを問うのである。プロセスのさなかには予期があり、行為の進行を促すイメージがある。それでも想定外の物が出来てしまうこともある。思うように物が出来ない場合には、プロセスの手前に戻り、新たな選択肢を採用してさらに前に進むことも必要となり、それによって多くの場合新たな手掛かりを手にする。プロセスの進行のさなかで、制作行為を継続するさいには、カント、シラーが行うような主観性の能力の分析だけでは間に合っておらず、制作する行為と産物とがつねに二重に分岐し続け、作品とはこうしたプロセスの副産物だとする分析が必要となってくるのである。

注

1.大槻裕子『ゲーテとスピノザ主義』(同学社、2007 年)第三章参照

2.認知行為とは、認知と行為が分離しないまま作動している働きである。河本英夫『システム現象学』(新曜社、2006 年)参照

3.この仕組みが明確に語られるのは、シェリングの自然哲学においてである。たとえば河本英夫「方法としてのオートポイエーシス」(村上勝三編『越境する哲学――体系と方法を求めて』春風社、2015 年)所収)参照

4.ゲーテ自然学については、ゲーテ全集第 14 巻(木村直司他訳、治潮出版、1980 年)を使用した。

5.マトゥラーナ、ヴァレラ『オートポイエーシス』(河本英夫訳、国文社、1991 年)70-71 頁

6.同上、236 頁

7.シラー『人間の美的教育について』(小栗孝則訳、2003 年、法政大学出版局)

8.こうした点については、メニングハウス『無限の二重化』(伊藤秀一訳、法政大学出版局、1992 年)を参照

9.シュレーゲル「哲学の発展」(『ドイツ・ロマン派全集　第 12 巻』松田隆之訳、国書刊行会、1990 年)所収、ノヴァーリス「一般草稿」「断章と研究」(『ノヴァーリス作品集　第三巻』今泉文子訳、ちくま文庫、2007 年)所収

6　意識というシステム

ここではシステムの最難関と思われる「意識」をテーマにしてみる。意識はながらく一切の探求の前提のように見なされてきたが、その意識そのものを探求対象にしてみる。認知科学的な意識研究(1980-2005)は一つの壁に当たっている。現状では展開力がないのである。

意識を単独で取り出し、それに対応する脳神経系部位を特定することはできない。意識はひとまとまりとして経験されているが、おそらく意識は単独の働きではない。単独の働きに見合うような実体的な物や特定の部位を見出そうとする企ては、おそらく最初から失敗する見通しのなかで進行したのである。意識の作動のモードからも、自己維持と多様性へと向かうシステム的な仕組みを取り出すことができる。

意識に特徴的な機能性として、たとえば未来への予知能力、能力の全体的整合性(デネット)、意識の自己感知性(クオリア)(チャーマーズ)、反応を遅らせる働き・保持(クリストフ・コッホ)として特徴づけられている。

これらは、多くの心的機能(短期記憶へのアクセスの促進、知覚したものの分類、意思決定、行動の計画、動機づけ、複雑な課題の学習、問題の検出、時の指標づけ、トップダウン型注意、創造性、推測、推理等々)にかかわる付帯機能として、意識を設定できることを意味する。

しかしいずれも意識がつねに伴っていなければ働かないわけではない。すると意識とは、随伴調整機能であることになる。意識とは、躊躇(遅延)の別名である。これは荒川修作の名言の一つである。心の活動態を「それとして感じながら制御」する場面では、確かに意識の関与を感じ取ることはできる。だが現実にどのような関与の仕方なのかは、それ以上には明らかにはならない。ここには内観的な解明の限界も含まれている。心の特定の機能の実行にさいして、同時に「意識の制御」が働いているように見える場合でも、意識がその機能を起動させたのか、速度調整を行ったのか、プロセスのさなかの選択的な調整を行ったのか、詳細に調べていく手立てがないのが実情である。

現象学的な意識分析(時間論)は、意識の働きを現れの出現の仕組みの解明に向けて、過度に「焦点的な注意」を向けた考察である。つまり多くの意識の行為(働き)を見落としている。焦点化された意識の関与は、すでに集中した活動状態を捉えており、これが意識にとっての標準的なモードであるかどうかは、はっきりしない。

意識を健常者、患者、老人それぞれで同じ機能群だと考えることには困難がある。年齢や健康状態での意識のモードは、相当に大きな振れ幅があると考えたほうが良い。実際に意識に疲れが来る年齢があり、そうした年齢を通過すると、何をおいても休むことが必要となる。また意識の起源をどこまで進化的に遡ることができるかは、明確にできない。論じる人によって、植物にも意識を感じる人、細胞レベルから意識を感じる人、高等哺乳類から意識を感じる人、類人猿から意識を感じる人というように、意識の特徴をどこにとるかによって、意識の起源について、さまざまな指定がなされる。垂

直に真向かいに立てた二枚のブリキ板がなにか共振的な動きをしただけでも、そこに「意識の原型」を見る人もいる。意識の特性を何にするのという大問題は、それが単一の問題であるのかどうかは、相当に怪しい。意識は、それが広く活用されるに応じて、主要な機能的特性を変化させてきたと考えた方が、実情に近いのかもしれない。そこで「意識の本質」という問いを正面から考察するのではなく、むしろ意識の固有性を感じさせるようないくつかの局面の取り出しを行っておきたいと思う。

(意識の間接性仮説) 意識は、意識になろうとして出現してきたのではない。出現の仕組みのモデルは、たとえば鳥の羽は、当初体温調節機能器官として出現する。それが当初想定されていない飛翔するという機能へと展開する。意識の場合、さらに多くの機能転換を経て、現状に近い状態にまで変転してきたと考えるのが実情に近い、と考えられる。意識は知ることに適合的に形成されてきたのではなく、むしろ調整機能の一つとして、あるいは調整機能に随伴的に出現してきた可能性が高い。そのことを直接証明できないほど、意識は機能系として見ればそれじたい完結している。この仮説は、意識そのものが機能的な力点を変えながら形成されてきたという仮説と、並行的に設定されるものである。

意識の前機能を知ろうと思えば、意識のなかを隈なく探し出す必要があるが、この探し出しにはすでに意識の知る能力の活用が前景化してしまっている。知る能力の出現を知る能力を活用して、その前史に遡って調べることは、相当に無理がかかっている。自分の身体を持ち上げるさいに、自分の靴紐を引っ張り上げるような動作に似ている。

意識は、いずれにしろ自分の起源を自分で問うことができないような仕組みにまで組織化されている。意識が出現したとき、自分の前史を断ち切るほどの再編を通過して、意識はそれとして意識になったという解答が残り続ける構造を備えている。

その意味では、意識は進化的には過形成(たとえば大鹿のツノ)であり、余分な負荷を自分にあたえてしまうシステムとして出現してきた可能性が高い。**(過形成仮説)** そのことを別の視点で言えば、意識はつねに誤用の可能性に付きまとわれていることになる。

たとえば発達障害児の意識を、定常発達の人の意識と同じだと考えることはできないだろうと思える。意識的な誘導を介して、実行可能になることの範囲は、多くの変動幅があると考えておくべきだろうと思える。最小限、意識には何ができるのか。この問いでは、意識の「最小特性」という難題が出てくる。意識がいくつかの「機能群」として進化的に出現してきたとき、より前に出現するものはより後に出現するもののなかで再編され、再組織化される。**(再編の仮説)** 意識の機能群は、もっとも新しい機能の前景化によってつねに自己誤解に直面することになる。

意識は多くの働きをしている。それを箇条書き風に書き出してみる。

1)意識は注意の分散を行う場であり、注意の場として多くの働きを並行させている。触覚性の働きを活性化させるさいには、注意の分散を並行して行わせることが必要となる。自転車に乗る場合には、進行する前方への方向感覚と左右のバランス制御に同時に注意を向けて行為しなければならない。少しでも複雑な行為に踏みこむためには、注意の分散が必要であり、こうした分散を可能にする場所と

して、意識が機能する。発達障害の幼児への治療を手掛けていた人見眞理は、幼児の療育で、幼児には注意の分散ができないことに気づいていた。そこで「デュアル・タスク」という行為の課題を設定した。足を動かす訓練を行うさいには、手摺を触る手の側に注意を向けて、足の訓練を行う。眼で見ている位置を変えながら、足の訓練を行う。特定機能とは、すでに一つの働きの集約のことであり、機能化したものに対して、意識は分散化する働きをもつ。

経験が機能化する場合には、すでに注意は過度に集中し、制約を受けている。そうした場面ではなんども注意を分散する場所での行為が必要となる。意識の集中化は、意識が特定のものへと向かうところに由来がある。集中することが、学習の基本条件のようにもなっている。いわゆる意識の志向性を活用して、特定の焦点へとみずからを仕向けるのである。この場合、あらかじめ教わり、見ようとしているものしか見えなくなる。あらたに何かが見え、予期にないものが見えるようになるためには、どうしても注意に分散傾向のバイアスをもたせる必要がある。そのさいには意識の集中を解除しながら、それじたいのテンションを落とさないようにすることが肝要である。またそうした場所に身を置くことで、おのずと注意の分散を図ることができる。注意を分散させたとき、意識そのものは分散の遂行される場所となっている。

2)意識は、みずからの範囲をみずから決める。余分な感覚を境界の外に区分し、また身体動作の場合のように、関与するものと関与しないものの区分をみずからで行う。意識の中には、それとして感知されたものと、感知されないものの区分は、おのずと進行している。音でも聞こえる音と聞こえないことの区分は、そのつど実行されている。騒々しい騒音の中でも、ほとんど何も聞こえない人もいる。20 キロヘルツ超の振動音は、音にならないまま受容されている。音にならない領域で、心に快をもたらす広大な領域があることは実は判明している。感覚的な現実となるものと感覚的な現実にならないまま受容されている領域は明確に区分される。

2-1)慢性化した半側無視は、この働きにかかわっている。視野を限定するような働きをつうじて、意識は自己維持の可能性を高めている。意識の自己維持の代償が、半側無視である。右脳に障害があれば、時として左側の視野半分を欠落させるこの症状は、良く知られたものである。ここには脳卒中のような重度の障害から回復してくるさいに、回復途上で通過するような半側無視のような事例もある。また脳梗塞のように、構造的に安定化してしまう半側無視もある。このとき意識そのものの維持に、視野の制限が裏合わせに関与していると考えることができる。意識の自己維持の代償的な仕組みが、視野を恒常的に半分だけ消しておくことだと考えるのである。そしてこそ推論には、多くの仕組みが関与するが、マクロには大きく外れていないと考えていくことができる。

私の住んでいる住宅街の斜め向かいの家の次男が、脳梗塞で左半側無視となった。日常生活では、直進歩行にも多大な負荷がかかり、大変そうである。ときどき路上で立ち話をするさいに、機会を見て、見えなくなっている左視野に注意を向けて、覗き見るよう試みるように何度か促したことがある。その時本人は、腫れ物に触られたかのように、慌て、狼狽し話題を変えようとした。周到な防衛の仕組みが備わっており、視野の半分が消えていることにかかわりをもたないことが、健康維持のための

緊急条項に近いという印象だった。意識は、自分自身の維持を遂行するためには、相当に大きな代償を払うことをまるで義務であるかのように自分に課しているという印象だった。症状としては、半側無視の慢性化である。

2－2)意識には、時として他の心的要素との関連付けのできない感覚・知覚要素が混入する。多くは意識の範囲外に排除されている。ところが反復的に出現する要素によって、意識の境界そのものが揺らぐことがある。この場合、幻覚・幻聴の出現と意識そのものの境界の不安定化が進行する。

意識の境界は、相当に多くの幅があり、たとえばドイツ語の低音部は、多くの日本人には言語音としては、当初は聞こえない。母語の修得時に、聞こえるもの/聞こえないものの区分はかなり形成されており、母語以外の言語に触れるときに、おのずと聞こえない領域が出現してしまう。私がドイツに滞在していた時、かなり多くの音が聞き取れなくて、往生したことを憶えている。しかし半年も滞在していると、耳が開いてきて、やっかいなことに音に対しての空間配置の感覚が混乱を起こしてしまった。私の後ろに、誰かの近づいて来る足音が聞こえる。ドイツ人らしい体重の乗った足音である。つかつかと接近の速度が速く、怪訝に思い、後ろを振り向くと誰もいない。足音では後ろからの接近音である。この足音の本人は、実は私の右側を追い抜くように足早に歩く女性の足音だということが分かった。右側の足音が、背後に聞こえていたのである。駐車場に止めておいた車のエンジンをかけると、右隣で停止している車のエンジンがかかったような位置に、エンジンの開始音が聞こえてしまう。隣の車の座席を見ると、誰も乗ってはいない。耳が開くという事態には、音を手掛かりにした空間配置の変化が否応なく起きることを思い知らされた。

意識を要素の統一的なまとまりを保証する機能だとすると(エーデルマン)、意識には多くのまとまりや統一性のモードがあることになる。位相学的なまとまりとしては、まとまりの仕組みが大幅に異なる。カフカの『審判』の冒頭は、ある朝、自宅を出ようとすると、すでに見張られていたことに気づく場面から始まる。カフカの『変身』では、ある朝目覚めると身体が思うように動かないことに気づく。突発的な変化では、意識の統一性のモードが変わってしまっており、意識はその変化に気づくことができず、世界や世界の一部の変化に感じ取られてしまう。意識のまとまりにはさまざまなモードがあるが、モード間の移行は、世界の変化として感じ取られてしまう。意識のまとまりのモードへの移行は、エーデルマンのモデルでは解明できない。つまりこのエーデルマンのモデルは、統合失調症をおそらく明らかに出来ない。

3)意識は、集中-解除の度合い、あるいは緊張の度合いを調整できる。この度合いの調整が出来なければ、多くの場合「意識障害」がともなっている。自分でも解除できない意識緊張はしばしば起きる。緊張とは、運動性を含む働きに本来的なもので、もっとも身近に言えば、力の入ってしまっている状態で、それを解除できないのである。身体には、時に応じて起きる。運動性の本性をもつ意識にも緊張は起きるようである。緊張が一定状態で続くのであれば、制御変数が一つ欠けている状態なので、意識は独特の動きを見せることがある。多くの場合には、力を抜くようにしてリラックスをするのだがそれがまったく効かない場合もある。むしろ運動性の動きの幅を大きくし、緊張-解除のラインの

振幅を大きくして、その連動のさなかに制御変数を回復させるような作業になるのかもしれない。

意識緊張では、心的システムは、リズム性や反復だけで作動することがある。「５つの夜は、１つの夜より５倍暑い。」「食事について言葉で語ることと、言葉を食べることは等しい。」「マッチを１本擦ると手が２倍になり、マッチを２本擦ると足が４倍になり、マッチを３本擦ると体幹が８倍になり・・こうして僕たちは世界の救済に出かける。」こうした数的比例のような反復性の運動が出てくる。意識緊張が、身体緊張に連動することがあり、この連動性に働きかけることを治療とする方法は成立する。その一つが成瀬悟策の動作療法に見られる。意識緊張を解除するさいに、身体の緊張から介入する。身体そのものの緊張に働きかければ、自動的に意識緊張に連動して働きかけることができる。緊張の度合いのような事象は、意識にも身体にも、同期的動きが出やすい。システム的に考えれば、意識のシステムは、身体システムとは作動領域も作動のモードも異なっている。だがそれぞれのシステムの変化率には、連動性が出やすい。この変化率が「強度性」と呼ばれ、そこから「強度の共振」というような事態が語られるようになったと考えられる。

4)意識はみずから自身を組織化し、みずからをそれとして一つの状態として維持しようとする。この点も半側無視につながる。急性期の過渡的状態としての半側無視である。この組織化の働きを回復するためには、意識の作動速度を遅くすることが寄与する。そのとき呼吸を活用する。1 分間に 2 度程度の呼吸数にする。そうすると意識そのものの輪郭がくっきりと浮かび上がり、また世界の輪郭がくっきりと浮かび上がる。大野一雄の身体表現や舞台『小町風伝』(太田省吾)で試みたのが、意識の速度を遅くすることである。

意識がそれとしてあることには、相応しい速度があると考えられる。その相応しい速度を回復するために緊張が昂じた場面では、深呼吸をして速度を遅らせることができる。人為的に意識の作動速度を遅らせる手続きは、多くはない。生命活動を維持し、集中度を落とすことなく、意識の作動速度を落としてみる。

おそらく禅宗が活用したのは、呼吸法によって呼吸の速度を落とすことで、意識の作動速度を落とし、意識そのものの境界がくっきりと浮かび始めるまでに作動の速度を落とすのである。意識による注意の執着を避けるために、さまざまな言語的技法も考案されている。「私は私であるのではなく、私でないのでもない。」こうした両面の否定は、意識的な判断を宙吊りにする。宙吊りにした状態で、意識の動きの幅を作り出すと同時に、速度の幅を作り出していると考えられる。

5)意識は、みずからの働きを感じ取る。オートレファレンスから、セルフレファレンスまで幅広いスパンをもつ。(チャーマーズのクオリアのその一つである。)

自己意識(意識の意識、意識についての意識)とは、本来意識の働きを感じ取ることであり、その大半が「気づき」である。つまり調整能力である。意識を一つの活動だと考えると、活動のさなかにおいて活動を感じ取ることであり、そのことをつうじておのずと意識の働きに調整を加えている。自己意識は、自己認識とはまったく別のものである。自己認識は、自分で自分のことを反省的に認識することであり、この反省は自分を外から捉えるように知ることである。それに対して、自己意識の大半

は、働きのさなかにあって働きを感じ取り、働きの調整を行うことで、実践的な行為のカテゴリーに属している。自覚とは、自分のことを知ることではなく、働きを感じ取ることをつうじて、調整能力を高めることである。

認知運動療法の認知の大半は、行為の起動のための選択的手掛かりを獲得することであり、動作の内感として調整能力を細分化することである。制御変数を内的、もしくは提示された選択肢と共に獲得することである。

6)意識はそれじたいが出現することが、世界へと地続きになることだとする疑いようのなさをもつ。ことに世界の現れと地続きである。この点をフッサールが活用して、現象学を打ち立てた。現われは、意識の活動性の事であり、物の現われはすでに意識の活動性の本性を表している。いま物の現われがあるとする。その現われの中で、どこまでが意識で、どこから先が物の現れなのだろうか。そうした区別あるわけではない。現われは、一方では意識極と対象極に分岐しながらひとつながりになっている。このことをノエシス―ノエマのように表記することもできる。現われのレベルでは、主観から客観を認識するような構成的認識が行われているわけではなく、端的に体験的直接性として、手前から向こうへと現われは広がっている。

ところが現れは、にじり寄るような感触(強迫性)や疎遠・疎隔の感触(離人性)が生じることがある。こうした事象を現象学の内部で扱うことは難しい。現われはすでに情態性を帯びており、外に見える感情である情態性は、現われに沁みついている。現われという場所に感情価を帯びた情態性が染み出していると言うべきかもしれない。

また意識はみずから変化するさいに同時にそれじたいで再編されるが、再編の結果しか知りようがない。意識は自分自身の変化に鈍感であり、働きの一部しか知りようがない。意識の変化は、世界の感じ取られる変化としてしか捉えられない。たとえば図形を見てゲシュタルト転換が起きるとき、注意の向け方や意識のそのものの在り方が更新され、新たなモードに変貌しているはずだが、意識にそれとして知られるのは、ゲシュタルト転換した後の図形だけである。プロセスのさなかにあるものは、プロセスのさなかで何が起きているかを知りようがなく、プロセスのさなかの調整(気づき)を行うことができるだけである。

リハビリの治療において、考慮しておいた方が良い意識の活用の仕方について、いくつか触れておきたい。

1)改善したい個所に、意識の焦点的機能化を行うことは多くの場合得策ではない。意識を焦点的に活用すれば、焦点化したことしか改善しない。この改善も見かけ上のものである。意識を向けて必死でなんらかの行為を行うことは、意識的に誘導した場合にしか、その行為の発動がおきないことになる。治療的な介入箇所に、直接意識経験を向けてはいけない。身体行為は、おのずと形成されており、意識は行為のさなかでの調整要因である。だが行為を意識から誘導することは、別の行為を構成しているだけになる。

2)たとえば物に触るさいに、触っている身体に意識を向けることは、身体の緊張を高め、身体の動き

の形成を変容させる。触っている身体に生じる身体感覚は、内感であるが、意識的に内感を誘導すると、内感は調整能力としての機能を失い、むしろ対象認知に振り向けられてしまう。意識が身を引く限りで、最も良く形成される領域がある。それが行為である。

3)意識はつねに過度に「前に向き過ぎており」、何かを誘導するように感じられる。そのため意識から行為を誘導することは、つねに筋違いである。過度に前に向き過ぎている意識を中和するには、両眼の注意を鼻の周辺に集めて、頭の後ろから他人の視線がやってくるようにイメージする。

意識を有効に活用するためには、意識の知る働きではなく、本来の「行為としての意識」の働きを活用する。反省や自覚は、すでにして敗北である。以下のような活用法が考えられる。(1)意識の分散の場所としての意識の働き、分散のさなかでの連動の働きがある。(2)意識の速度を遅くする。それによって自分自身との隙間を開く。あるいは速度に変化を付ける。それによって脳神経系の選択性を開く。(3)緊張－弛緩のラインに多くの段階を作り、緊張を一つの制御変数として活用する。

こうして意識は、発生時よりさまざまな機能を獲得し、機能性を再編しながら進んで来ている。人間の歴史のなかだけで見ても、意識の志向性の限界の向こうという機能性も、文化的に獲得されたものである。意識が何かに向かうものである以上、向かうさきのその向こうという意識の限界点とその向こうという活用の仕方が、開発された。これは、ユダヤ教が開発した意識の活用法である。近代に入ると、意識についての意識という自己意識が前景に出てきた。デカルトが開発したものである。こうした意識の自己反省能力が、多くの人にとって自明化した形になるにはいまだ時間が必要だったように思える。さらに意識は何かを知るが、この知るということの余白を同時に感じ取るという働きを持ち合わせている。何かを知ると同時にまさにそのことをつうじて知ることの余白に気づく。この余白の活用の仕方の一つを、ヘーゲルが「弁証法」で活用したと考えることができる。そして意識の知るという働きの内部で、働きそのものを内的に捉える内視という意識の活用法を、フッサールが開発して、現象学という仕方で組み立てた。こうしてみると意識の活用法は、おそらくまだまだこれからも見つかるのである。

7　文明創発の舞踏

ここでは身体システムを含む複合系のシステムを取り挙げる。身体を自己療育し、身体を形成し続けることを、身体のそのものの表現へと接続し続ける表現活動から事例を取る。

笠井叡(1943-)は、大学進学を躊躇し延期している時期に、当時まだ無名だった舞踏家の大野一雄に出会い、舞踏の訓練を開始した。笠井叡にとって大野一雄は、異次元の存在だった。笠井叡は、多くの書物を読み、多くの事柄を書き表す著作家としての傾向をもちあわせていた。その点では、舞踏を作り上げたもう一人の巨匠である土方巽によく似た位置にいる。6 年間(1979-85)のドイツ留学を経て、シュタイナーを内面化し帰国するが、日本文化のあまりの変化に驚き、また帰国後 6 年間は日本語で物を考え創作することができず、長期にわたり沈黙したままになる。当初は、「身体神秘学」とでも呼ぶべき、宇宙論と身体論を結合させた議論を展開していたが、帰国後の活動をつうじて「身体生理現象学」と呼んでもよいような独自の身体論を形成している。舞踏のなかでは数少ない哲学的な舞踏家でもある。

はじめに

身体は不思議な領域である。身体はみずから動く。身体についてどのようなイメージを抱き、どのような意図を籠めようと、身体はそれとして作動する。たとえ静止しているように見える場合であっても、身体は速度ゼロの運動を行っている。それに対して言語は、それを起動させなければ動かない。言語を自動運動させるためには、意識的制御を減らし、意識の関与を可能な限り取り除くような、ある種の作為が必要となる。それが自動言語というダダイズムに標榜された言語表現となる。だがそこにも作為の痕跡は残り続ける。身体は、逆にどのように意図と作為を籠めようと、意図や作為から動くことはなく、またそれに相応しい動きを行ってくれるわけではない。意図や作為や思いは、身体の作動にとって「きっかけ」に留まる。

身体は、それじたい動くが、動きのさなかでみずからの動きを感じ取ることができる。運動の感触はある。身体は動くだけではなく、みずからを感じ取る。そのため外から身体運動を観察する人にとって見えている姿と、身体動作は一対一には対応せず、また動きを内的に感じることと、それを外から見ることとは別の事態である。そこに「身体表現」が出現する。見るものにとっての身体の表現と、運動する身体がそれとして表そうとしているもの、あるいはそれとして表現してしまっているものはつねにずれていく。この隙間の間に「意味不明」「不自然」「健常」「常識を超える」「奇跡的出現」等々の度合いを表す言語表現が生まれる。あるいは別様に言い換えれば、言語を用いて埋めなければならないほどの構造的な隙間が、身体動作の外見と内的感触の間にはある。

この二つの事態の間を埋めていくには、宇宙や世界の流動やリズム性が、身体そのものの動きやリズム性に連動したり、共振したりする場面で、「運動での連動」という次元から考えていくか、ある

いは声の出現のような内発性が宇宙や世界の動きに呼応すると考えていくか、複数の回路が考えられる。

舞踏家が、言語表現をみずからの課題として課す場合には、独特の色合いを帯びる。舞踏家は表現を身体で行う。しかし言葉による表現に代えて、身体を表現として活用するのではない。さらにやっかいなことは、身体行為と言語は、通常は内的に連動しているとは考えられない。だが言語が交わされ、言語の飛び交う環境内で、身体も身体動作も形成される。だから身体動作と言語の間には密接な関連はあるはずなのだが、それを関連付ける回路は、一つに決まるのか、それとも複数個の回路があるのかは、はっきりしない。この点は、全身が緊張の漲る患者に言葉がどのように届くのか考えてみることで、少し明確になる。

言語と身体行為の出現の場所にかかわるような大きな仮説を置いたとしても、その仮説からどの程度の事柄が展開可能性をもって明るみに出るのかははっきりしない。言語にみられるリズム性と身体動作のリズム性を比較しても、リズム性という対比項を持ち出して、無理やりに議論する形にならざるをえない、というような予想はただちに生じる。というのも身体動作のリズム性と言語のリズム性は、まったく別の事態だからである。両者の関係をなんらかの動きから導く以外にないことははっきりしている。この点で笠井叡は、一つの道筋を示している。それが講演のテーマとなった「声の出現」である。声は人間が身体とともに作り出す振動である。この振動に、環境にみられる振動との連動や、身体動作との連動が含まれており、さらに言語への道筋が出てくる。声の出現は、言語の起源と身体動作の起源をともに考察していくものである。あるいは言語がそれとして言語となり、身体動作がそれとして身体動作になるような分岐の場面へと繰り替えし回帰していくことである。

笠井叡にとって、身体はみずからに成り行くものであり、その生成プロセスには宇宙史的、文明史的な履歴が関与している。そこにはいくつかの基本的な枠組みといえるほどの建て付けがあると考えられる。

1　基本的な建て付け

笠井叡には、基本的な欲求とでも呼ぶべきものがある。「超越欲求」とでも呼ぶべきものである。物事を認識するさいに、個体の固有性に迫るのではなく、個体について「つねに身の丈を超えたところから語りだしてしまう」という欲求である。ところがこれは神学の方向へは進まない。あるいは神秘主義の方向へとは進まない。笠井叡にとっては、神は最大の犯罪者であり、最大の「自己嫌悪するもの」である。神はみずからを自己嫌悪するというのである。神はかりに世界を創造したとして、創造をやめて休養を取ることができるのかという。超越欲求とは、身の丈をこえたものへと進んでしまうという動きがおのずと起きることである。超越したものとして設定された当のものに視点を移動させたり、みずからをそこに仮託することではない。超越者への信仰は、笠井叡にとってまったく筋違いである。

超越するものを感じ取るさいには、感覚的確信をともなった敏感感応性が働く。敏感感応性は、多

くの精神病理学的モードをもつが、いずれの場合にも感覚的確信であるために、経験のなかでみずからを距離化できない。敏感感応性は、訂正不可能という幼児性向を残している。そのモードの一つがドアの向こうや厚手のカーテンの背後や自分自身の後ろに人の気配を感じる「実体的意識性」である。大人でこうした性向が繰り返し出現すれば病的である。また敏感感応性は、そこに自足すれば固着となる。笠井叡はこうした超越者への固着を内在した神秘主義へとは進まない。感覚的確信が問題になるのではなく、どこまでもみずからを超えたものへと触れ出ていく運動が基本となり、初期には運動から宇宙生成を論じ、後期には運動が認識につながっていく回路の一つが「声」であるとして、そこを進んでいく。この超越欲求には、本人からすれば、相応の理由があり、敗戦や戦後に自分なりの決着を付けるというある種の同時代的な課題をみずからに課しているということであった。おそらく時代的な制約に本人の資質が重なったのだと思われる。

また笠井叡には、運動が物を作るという確信的な大前提がある。心臓が血流を生み出すのではなく、血流の運動こそ心臓を形成する、という仕組みを多用する。この事態は、実は現在の「自己組織化」だけではなく、オートポイエーシスの基本にも組み込まれている。宇宙にはそれに相応しいエネルギーの流動や振動がある。それが物を作り出す。作り出された物が運動の外に排出される場合が、結晶形成のような場面である。ところが外に排出された物質が、さらに運動を維持させ、運動の継続に資するようになるとオートポイエーシスとなる。ここでは運動と物の相互循環が形成されている。その自動的な循環とともに同時に形成されていくのが、「個体」であり「個体の自己」である。この物を介して運動が起動する場面は、物でなくても運動の特定のモードでも良い。この部分を入れておかないと、「個体化」「個物化」をうまく語れないままになる。

笠井叡の場合には、この個体化は仕組みとしては導入されておらず、むしろ宇宙生成史からの配置として語られることになる。個体化が語られない理由はよく分からないが、おそらく身体そのものの自己超越の感触を前景に出すためだと思われる。たとえば言語であれば、発声は、エネルギーを作り出す仕組みである。現実の音になる場合には、そこに純粋に動きがある。この事態を体感する仕組みが、あの音を発しながら音を消し、空気の動きだけにしていく場面である。いま「あ」の音を発しながら、音を消し空気の動きだけにしてみる。それが「音」を生み出す活動である。この活動の感触の場面にまで回帰する作業が、現象学では「還元」に相当し、意図せず笠井叡によって「身体生理現象学」が実行されたのである。

そして言語の獲得以前の身体を「地球身体」、母語獲得によって形成される身体を「民族身体」と呼び、さらに記憶の固有性によって形成される身体が「個人身体」と呼ばれる。そうなると「宇宙身体」も想定することができ、これは受胎以前の身体の可能性の状態である。こんなふうに外側に生成史を設定しておくことで、個体には、宇宙身体、地球身体、民族身体、記憶による個体身体が層のように折り重なっていることになる。こうした議論の立て方は、初期の「身体神秘学」から一貫して維持されており、身体運動が生み出される背景的な設計となっている。

さらに笠井叡の場合、宇宙の振動やエネルギーの流れと身体運動のリズムには、連動や共振が起き

る。これは個体間であれば、カップリングと呼ぶべきことである。ただし、連動や共振というのは、実はそう簡単に起きることではない。大掛かりな前提も必要である。シュタイナーにも類似した議論が出てくる。

シュタイナーの構想の骨子は、自然界を、物質、エーテル、アストラル体の交叉として捉えることである。エーテルは、希薄化する気体であり、アストラル体は「世界霊」とでも呼ぶべきもので、動物と人間にしかなく、いっさいの意識的働きがなくても、おのずと足が前に出てくれるような場面で働いている。ある意味で、感覚-情動連動態である。

シュタイナーの場合、物質的な作用では、双極性がある。つまり一つの物質は、他のなにかと「一つになるわけではないが、不可欠の対関係」を形成する。電気や磁力のように二つの相反的な極が拮抗する仕組みを到る所に見出すのである。このあたりはゲーテ自然学やシェリング自然哲学の後継者である。これに付帯して、さらに外惑星と内惑星という対概念が組み込まれる。内惑星は植物の生殖過程に作用し、植物の成長と世代の継続にかかわる働きは、月、水星、金星からくる。外惑星は動物や人間に適した栄養の備給にかかわっており、食べ物に含まれる火星、木星、土星から来た力を活用する。

また生命プロセスは、対立する二つの流れの合流点で生じるが、それらの流れにはそれぞれの担い手がある。シリカは宇宙からの栄養の流れがそれに乗って下りてくる乗り物であり、石灰岩は地上の流れが宇宙からの流れに出会うためにそれに乗って運ばれてくるエスカレーターである。色と光はシリカと関係があり、運動と音はカルシウムと関係がある。シリカは宇宙がそれを通して地中に注ぎ込み、また吐き出していく、夏と冬の流れの触媒となる。他方、石灰は春・秋の作用の触媒となり、それを保持し、適切なときに本流に戻す。シュタイナーは農業論でもこんなところまで行ってしまう。こうした直観がどこから生じるのかはよく分からないが、ドイツ各地の農民に実際講義して伝達していた。

これらは流体的働きの不均衡動力学とでも呼ぶべき性格を備えている。物質循環よりも、流動性の要素的なバランスを優先する。要素的なバランスのなかで最も生産性の高い状態を作りだすことに力点が置かれている。

こうした議論を背景としながら、身体の運動は、宇宙の流動や振動と共振する。そこに身体表現が出現するが、身体表現はそれとして固有化しなければならない。この固有化のところに、発声が関与し、その延長上に言語表現が出現すると考えられる。もちろん声の出現から言語の成立した後の言語表現まで、一貫して筋道が付くわけではない。そこに言語表現の固有化の幅も含まれている。ここに名人芸とも呼べる、さまざまな語りが出現してくるのである。

2　身体表現の言語

舞踏家には、独特の言語表現が出現する。どうしてこんな言語が出現してくるのかが不明なまま、出現してしまう。言語表現としても、特異なモードを作り出した 3 名の舞踏家を取り出してみる。経

験と言語の隙間をどのように活用しているのかに焦点を絞りながら考察する。それぞれに固有の身体動作の位相を映し出している。

当然の事だが、舞台は先ず個体の死の検証から始まる、あやとりは同時にそこにある謎のくらがりでおこなわれるだろう。今宵、謹製 8 番にも及ぶタフタのドレスは殆ど打ちとめられると云う。そこに軟骨のフォルムを包んで見ようと云う。この日本で捕れた唯一の光の剥製の後頭部をすげ、頭に籾の死の箸をつけ、足にキッドの靴はいて。

（笠井叡「剥製の後頭部を持つ舞踏家に寄せる」『銀河革命』現代思潮新社、2004 年）

屋根から転げ落ちたとき、口に碍子をくわえていた。これだけの理由で故郷を追放された男の、あの風呂敷を握った掌の事を考えると、途端に真黒こげになってしまう。

（土方巽「犬の静脈に嫉妬することから」『全集』1 、168 頁）

どこから取り出しても、たとえ署名がなくても、土方巽の文章は、それとして彼のものだということはわかる。比類がなく、真似をしようとすれば、二番煎じ以下に落ち込んでしまう。これが空前絶後の文章だと呼ばれる理由である。語と語の隔たりと繋がりが、文のリズム性で接続され、世界はくっきりとした動作の連鎖でなっている。世界や人間を名詞から語るのではなく、動作から語る。その動作の連なりはリズム性と速度から成る。だから土方巽の言葉や文章は、「動作音楽」なのだ。動作を基調とする動作の情景をつないでいく。それをリズム感と速度に適合的になるように語の音イメージを基調として整形していく。意味とはたんなる副産物である。

こうした文章に直面すると、人間はいまだ言語の活用について多くのことを学べていないという思いが付きまとう。土方巽の文章は、その意味で実験であり、またそのための手引きなのである。こうした言語は、場面の強さと音楽性だけで接続しているのだから、広義の「強度性」だけでつながっている。たとえば経験が作動の範囲を狭め、必死で自分自身を追い求め、みずからの経験の弾力のなさに住みつき、みずから弾力を失っていく時に、こうした文章は、当人にとって別様の回路に触れていく可能性に満ちている。そのとき分かろうとするのではなく、音楽のように言葉に体験を連動させることになる。

大野一雄から別の文章を取り出してみる。

魚が一匹入ってきた。魚が一匹入ってきたことによって、ぐらりと変わってきた。それだけの違いです。魚が入ってきたおかげで、関係が、死が生を照らしているように、生が死を照らしているように、生がいきいきと。さあ、そういうなかで自由にやってごらんなさい、内的に。

（大野一雄『稽古の言葉』フィルムアート社、1996 年、17 頁）

こうした体験は、配置すれば相対的な位置は比較的はっきりしている。物とのかかわりで、眼は通常見る器官であり、観るというようにしか活用されていない。おのずと見る、意識の能作を減らして可能な限り受動的に見る、見えるがままに観る、というように意識の側の志向性を減らしても、やはり観るという行為は続いている。そうすると観るということとは異なる仕方で物にかかわるのでわることが必要とされる。「眼は光によって光へと形成される」(ゲーテ)や、「眼は光を食べる」(ピアジェ)は、観るということの成立場面を描き、観るという行為の出現場面を描いている。そうした場面を残しながら、なお観ることが成立して後も、観ることとは異なる行為で物とかかわることが、大野一雄の文章によって示唆されている。

比喩的に言えば、眼で触覚的に物とかかわることだと言っても良い。それは視覚を身体とともにある触覚として活用することである。バラの棘を見ても眼が痛いわけではない。だが目が痛いという次元でバラを観るのである。また体験の次元では、観ることがひとつの行為であり、生きることだと言っても良い。観て分かるのではなく、観ることがそれとともに生きることだという次元で、観るのである。

この経験のレベルは、配置としては分かるものの、簡単に実行出来はしない。その次元は誰にとってもすでに実行されてしまっているのであるが、同時に志向的に観ることによって、もはや回復できなくなっている次元である。そうした次元を認識のなかの配置によって捉えるのではなく、そうした次元を体験として実行する回路を探し出す。これが舞踏としての観ることである。こうした次元は、物や世界や他者を理解して配置するのではなく、また他者の自己理解を誘導するのではなく、たとえば患者とのかかわりが別の体験の次元に届くようにかかわることの内実を示している、と考えてもよい。臨床上のかかわりのなかで、こうした体験の次元にふとした瞬間に触れることは、多くの人が経験していることだと思う。

入ってきた魚とともにリズム的に行為することが、同時に一つの治療効果であるように行為することができれば、花村誠一の言う「強度の共振」となる。ただしこの場合には、強度の変動に対しての「敏感感応」が必要であり、強度性を運動のリズム性へと変換するだけの芸術的な訓練が必要となる。

土方巽が、文章を動作の情景を基調とした一つの音楽として作り出したときには、文章そのものは、身体表現とも意識的な主体とも並行する独立の領域を形成していた。この領域を形成するさいに多用されたのが、「強度性」である。ところが大野一雄が描き、それによって指示している体験的次元を、実行しようとすると半ば必然的に強度性の経験が現前してしまうというのが実情である。「強度」は、比喩的にはカレーライスの味を「三角形」というように、論理規則や言語規則や意味とは別個に固有の連動性を作り出す「感覚-運動領域」であり、そこには緊張度や運動性の速度感等々が含まれている。「理解する」とは別の仕方で体験領域に接続することが、ここで試みられることである。

さらに笠井叡からも取り出してみる。

魚にとっての水圧、水温の違い、また海流は、一種の触覚的な音楽体験のようなもので、この感

覚の働きで、魚は海の生命的な動きと一つになって生きています。そこでは「魚が海を感じている」のではなく、「海が魚を通して、海自身を感じている」と言うべきでしょう。まるで魚が「海という生命」の感覚器官であるかのように。

（笠井叡『カラダという書物』書肆山田、2011 年、34 頁）

この文章には、笠井叡固有の「超越欲求」がごく自然な形で現れている。体験を世界もしくは環境へと開くと、意識の自己制御を解除して、身体とともに世界や環境へとつながっていく回路が前景にでる。そのとき世界や環境をみずからで組織化するものだと考えると、意識的主体は、その組織化をともに担うものとなる。その場面をパラフレーズすると、みずからが組織化の一部を担うように世界や環境は、みずからを組織化するということになる。このことは意識的主体にとっても、リセットの場所とリセットの仕組みを示している。感覚することは、運動ともにある一つの行為なので、まさにそれによって自己のリセットを行う。こうした体験の場所は、心のリセットにとって、感覚や感情の外在化へと進み、制御変数をさらに増やしていくことにつながる。それは行為主体から見れば一つのイメージなのだが、みずからの形成とともに環境や宇宙そのものが形成されていくイメージなのである。そして母音の出現のように、身体行為とともにある場所を指定することで、心のリセットにとっての局面を示しているのである。

舞踏家の言葉は、つねに身体とともにある行為と結びついている。それは多くの場合身体行為そのものを形成する場所でもあるので、舞踏にとって不可欠の場所である。そしてそれは言語ならびに言語的意味が出現する場所でもある。このことは精神医学的な再生にとってつねに付帯的に示唆をあたえ続ける場所でもある。というのも声の出現から語りを誘導し、声という運動のモードの形成を促すことで、「自己」そのものを作り替えていく可能性が開かれるからである。声には、心の歪みが身体の緊張として現れてしまうような場面もあれば、心の拘束が経験の速度の変換を制約してしまっている場面もある。またただ反復的に同じ語を語り続ける場面もある。そうした場面にあって、笠井叡の試みは、声の出現からリセットを開始するという豊かな可能性の場所を提示しているのである。

参考文献

大野一雄『稽古の言葉』(フィルムアート社、1996 年)

笠井叡『天使論』(現代思潮社、1976 年)

笠井叡『精霊舞踏』(現代思潮社、1977 年)

笠井叡『神々の黄昏』(現代思潮社、1979 年)

笠井叡『銀河革命』(写真集、2004 年、現代思潮新社)

笠井叡『カラダという書物』(書肆山田、2011 年)

笠井叡『カラダと生命』(書肆山田、2016 年)

笠井叡『透明迷宮』(写真集、平凡社、2016 年)

土方巽『全集 I,II』(河出書房新社、2005 年)

8　芸術はどのような運動か

身体運動は、多くの場合経験に変化をもたらす。他方、経験そのものが運動を行うこともある。経験のなかには認識も含まれており、意識をつうじた認識では、多くの場合経験は主体と世界とのかかわりという設定で捉えられ、主体はどのように世界を捉えているかが問われる。この問いの総体が、「認識論」と呼ばれる。カント哲学の大半は、ここにかかわっている。

だが認識の手前で経験そのものが作動している基本的な場面がある。経験とは一つの運動であり、認識の出現の手前で、それとして作動していることである。ヘーゲルは、それを『精神現象学』で「途行き」と呼び、ジェームズは「純粋経験」だと呼んだ。経験そのものの作動のモードを作り替え、経験の弾力と可動域を変え再形成していく作業が、哲学や芸術や精神医学の共通の課題となる。この点で、運動とは、まさに経験そのものの本性なのである。

1　経験の作動と情態性

スイスのベルンの精神科医故ルック・チョンピは、ゾテリア治療(無医薬－環境治療)の設定のなかで、「柔らかい部屋」を導入していた。壁も床もスポンジを張って弾力をもたせ、部屋には刺激の少ない柔らない色彩の絵を掛け、花を飾って、緊張を緩和させるような環境設定を行った。緊張の緩和を治療条件だとしていたのである。スポンジの活用は、触覚性の感覚に働きかけ、通常は使わないままになっている触覚性の部位に働きかける。運動にかかわる感覚の大半は、触覚性のものであり、触覚に変化をもたらして経験をリセットさせる条件を作り出すのである。人間の場合、視覚の優位と言語的な理解を経験の特徴だと考えがちだが、いっさいの感覚の形成の基礎に触覚がある。五感のうち、触覚は五感の一つというより、他の四感覚に対してより根本的だと考えていたのが、「霊魂論」(デ・アニマ)でのアリストテレスである。そして触覚こそ、運動性を内在させている。何かに触れるとき、前方への圧がかからなければ、触覚そのものが成立しない。

チョンピ自身は、精神病理を当時さまざまなかたちで応用されていた「複雑系科学」を活用して、再定式化を試みていた。複雑系は、カオス理論や自己組織化、オートポイエーシスのようなシステム論の総称であり、経験は新たな局面へと自分自身を形成できるという点で、組み立てられた構想である。

複雑系の構想の大きな主張点の一つが、人間は運動のモードについていまだ多くの知識を手にし損ねているというものである。人間になじみの運動は、直線運動と円運動であり、重複的な円運動を組み合わせると「ラセン運動」となり、円運動の起点を複数化すれば、楕円運動となる。アリストテレス以来 2500 年間、運動の多様性については、人間は思考停止を起こしていたというのが実情である。ここには運動の生成論が、いまだないままだった。

また人間は、運動の分岐が詳細になるシステム的な仕組みをもたないできた。統合失調症も広範性

発達障害も、病態としては圧倒的に多様であり、同じ疾病分類枠に配置できるのかどうか不明な場合がよくある。たとえば運動で考えればＡ４の紙一枚を胸の高さから床に落としてみる。落下の仕方は、そのつど異なっている。落下位置もいくぶんかずれている。ただし落下までの時間は、ほぼ同じである。近代科学は、結果が合うようにあらかじめ「規則性」を定めた議論なので、規則性のもとでの圧倒的な多様性を扱うことができないできた。その多様性を扱うことができるようにしとうというのが、「複雑系」の構想だった。病態が変化していく症例に対して、有効に対応するための道具立てにしようと考えたのである。

チョンピの主著である『感情論理』は、フラクタルな感情生成論であり、その場合の感情とは、根源的な不安や恐れのようなものから、自分自身への違和感のようなものまで広範囲にわたる事象である。この著作の基本的な建付けは、病態のさまざまなレベルで、感情因子は姿を変えて現れてくる、というものである。生成運動のさなかで異なる感情が出現しているように見えながら、実は同じ感情因子がかたちを変えて現れている点を基本にして組み立てられている。感情のモードの変化を追跡することで、病態の多様性を追跡しようとしている。

ここで言われる感情は、アフェクトであり、情動性の強い感情であって、生存意欲や基本的欲求にかかわる感情である。感情は、進化史的な発生による配置から見れば、世界にかかわる認識と身体運動との間にあって、それじたいが運動性を帯びた認識機能でもある。それが明確なかたちで出ているのが、「情態性」である。

たとえば不安は、世界を彩っている場合、世界に感じ取られている。たんに個々人の内面的な感情の動きではない。情態性とは世界に感じ取られる感情である。山道を車で移動しているとき、眼前の道路に、大小の少なくない石が転がっていたとする。前を行く砂利を積んだダンプが落としたものか、それとも山側からの地崩れで転がった石かは、ただちには判別はできなくても、「尋常でなさの度合いは」ははっきりと感じ分けられる。ゆっくり通り過ぎれば大丈夫だと感じられることもあれば、車を止めて少し様子を見たほうがよいと感じられることもある。それはそのときに感じ取られている「尋常でなさの度合い」によっている。この「度合い」が、「強度性」と呼ばれるものである。強度性は、運動性の感覚－感情連動系であって、ときとして極端な身体運動を引き起こすことがある。ちなみにこの「情態性」は、脳神経学者ダマシオによって、新たな認知科学の用語として再導入されることになった。それが「ソマティック・マーカー」である。

情態性には、さまざまなモードがある。最も身近に感じられる世界の感情が、「安心」であり、緊急には何もしなくてもかまわないという慣性的な運動状態である。ところが何かのきっかけで「身の丈を超えたもの」や「超越」や「崇高」に触れたりすることで、身体運動が喚起されるような事態に触れてしまうことがある。さらに「緊急性」「駆り立てられていること」「尋常でなさ」のようなものも情態性に含めてよい。背後からのトラックの音が急に加速するように感じられるとき、おのずと道路の端の方に身を寄せる。それと類比的に、世界が自分自身を駆り立てているように感じられれば、もはや身を寄せるところはないが、それでも動かざるをえない。カフカの『審判』(原題は「プロセス」)

のヨーゼフ・Kに起きたことである。一般に情態性には、強さの度合いがあり、たとえば強く駆り立てられる場面から、緩やかに駆り立てられるような場面まである。この度合いは、傍にいるものにとっては、緊張の度合いや緊張の度合いの変化として、ただちに感じ取ることができる。

またたとえば「謎に満ちた不思議な面白さ」や「わけがわからないがいくらでも何かはやれそう」という感触を感じさせる環境はある。これらは身体運動に対して、通常以上に多くの選択肢を開いている状態であり、このとき世界は「ワクワクし」「理由のわからない楽しさ」に満ちていることになる。こうした情態性に向けて、多くの場合、芸術は新たな現実性の制作に進むのである。芸術とは、情態性をつうじて、運動への踏み出しを誘導し、経験の局面を変えていく作業である。

2　出現という運動

物事や意味の出現(創発＝エマージェンス)には、運動が含まれている。運動があれば、何かが出現するとは限らないが、出現という事態は、一つのイベントであり、当人にとっても事件である。本人にとっては何が起きているのかわからないが、それでも現実に何かが起きてしまっている。そのときしばしば身体を巻き込んで由来の不明な現実が出現する。

ドルゥーズが『意味の論理学』を描いたとき、意味の出現を主要な場面として捉えようとしていた。出現した意味は、繰り返され伝達され共有されれば、公共的な「意味」となる。そのため逆に意味の公共化の手前に、多くの剰余に満ちた「言表」が存在することになる。公共的な意味にならないまま、しかしなにか不可思議な言表だと感じさせ、なにか通常の経験の枠には落ちてこない含みをもっていると感じさせる言表である。それらは出現の痕跡を残しながら、意味の手前に留まり続けるのである。

たとえば「純粋な生成変化」のモードには、次のような事例が配置されている。

「５つの夜は、ひとつの夜よりも５倍も暑い。」

「猫はコウモリを食べるかは、コウモリは猫を食べるかに等しい。」

これらは、文法的には間違いではない。構文論的には成立している。また主語－述語関係の論理としても成立している。何か別の事柄をこうした言語的表現で「比喩として」語ろうとしたのであれば、比喩に必要な含みが少なすぎる。あるいは物事が直接的に語られすぎており、端的にそれだけで成立しすぎている。

これらは表現しにくいものの輪郭を結ぶように、語を当てた文ではない。比喩の典型は、「愛は陽ざしを受けて微笑む小石」のように、距離を開きながら異なるものを結びつけることをつうじて、新たな物事の輪郭を制作する場面で成立する。この比喩は、ヨーロッパでも「比喩の典型」としてすでに教科書的な事例となっている。あるいは「菜の花畑で、赤ん坊が泣いている」という文も、現実性を総体として直接的な映像にもたらす比喩である。春先の一面の菜の花が、微風に揺られて黄色い色をチカチカと弾ませている。それは収まりのない小さな胸騒ぎ引き起こすような平面としての運動である。

そうした情景を、形容詞を重ねるのではなく、「赤ん坊が泣いている」と動作で置き換えているので

ある。作者の中原中也の才能が良く出た比喩である。比喩は、異なるものを一挙に接続させることで、経験を別の局面へと跳躍させる運動である。

私は、文学部の哲学科に属していることから、軽度発達障害の学生から、さまざまな相談を受けることがある。ときとして哲学に適応できない学生もやってくる。そうした学生は、研究室に入ると、哲学そのものや哲学教員に対して猛烈な反論、異論を繰り出すことがある。その議論のあまりの激しさに研究室の外側の窓が振動しているほどであった。こんなときには発言の意味を理解し、それに相槌を打ったり、思いに共感してはダメである。もちろん反論には何の意味もない。というのも本人は議論しようとしているのではないのである。本人は、潜在的には何とか自分自身の状態を変えたいと感じている。その表層の姿が大演説である。そして大演説してしまう自分自身を変えたいと願っている。

経験の局面を変え、別の局面が出現するような言葉を発しなければならない。30 分ほどの学生の大演説の後、一区切りが付いたと思えるタイミングがあった。そのとき本人の名前を挙げて、「セイント・ナオコ(仮)だよね」と呟いてみた。この学生は 5 分ほどのまるで時間が停止するような沈黙の後、大粒の涙を流し、涙と鼻水が止まらなくなり、打って変わってゆっくりと静かに自分自身の幼少期からのことを語り始めた。本人の思いの籠った大演説に対して、比喩的に「セイント・ナオコ」という語を当てて、別局面を出現させようとしたのである。ここでは比喩を、経験の運動局面を転換するための手法として活用している。

ところで先に挙げた二つの文は、このタイプの比喩とはまったく性質が異なる。意味の局面を変えるのではなく、むしろ意味そのものが出現する場面にかかわっているからである。暑さという語に対応するある体感をもっていたとする。それは寝苦しいほどの暑さの度合い(強度)である。強度の場合、度合いの変動が数的な比例関係になじみやすく、自動的に数的な比例で表記されていく。度合いの変動は、一つの運動であるが、そのもっとも連動しやすい経験が、数的な比例である。そうなるとこの文は意味を表現しているのではなく、意味が出現する一つのモードを指定している。つまり言葉を意味から組み立てるのではなく、意味とは別の経験の動きが、ときとして意味に類似したかたちをとることを示唆している。

「猫はコウモリを食べるかは、コウモリが猫をたべるかに等しい」は、この「等しさ」がどのような等しさなのかに依存する。少し極端にリライトしてみる。「食事について言葉で語ることと、言葉を食べることは等しい」という文にしてみる。なにやら奇妙な文であり、場合によっては「言葉のサラダ」と読んでみたくなる。だがこの文も、文法上の破綻はなく、主語－述語関係もしっかりしている。支離滅裂な語の並びではない。つまり言語能力はまったく損傷されていない。ただ何が言われているかが、直接はわからないのである。

食べることも、話すことも、身体部位で言えば、口腔の運動である。口腔の関与する運動には呼吸の補助運動もあるが、食べることと話すことは、特段に重要な口腔の働きである。いま話をしながら食事を続ける。物を食べながら話すのであり、話しながら物を食べるのである。そのとき物を食べる

ことと同時に言葉も食べており、言葉も食べながら言葉を発している。器官が複数の機能にそのつど分岐しながら、それぞれの機能性に応じて、意味が分岐する。「このサラダは美味しい」と言いながら、そのサラダとサラダについての言葉を食べる。この分岐線では、話すことと食べることが運動として重なりながら、動作は機能分岐の手前を移動している。いま経験がこの「分岐線」そのものの上を作動しているときには、食事について語ることと、言葉を食べることは、まさに「等しい」のである。意味とは、すでに分岐した機能性のもたらす副産物である。そしてときとしてその機能性を理由なく突破してしまう者たちが出現する。芸術は、既存の境界線を突破し、新たな意味の可能性を生み出す作業でもある。

3　身体運動とともにある環境

芸術作品は、それを通過し、くぐることをつうじて、経験が新たな局面に進むことを願っている。たんに鑑賞するのであれば、美しさとそこに感じられる快を重ね合わせるように作品が作られていく。美しさだけでは、比率を中心としたテクニカルな技術となる。快だけであれば、扇情的になる。美と快が合致するところに最高の芸術が出現すると考えたのは、カントの『判断力批判』である。ところがカントのこの言い分も、いまだ芸術作品を鑑賞する位置から論じられている。芸術が、新たな現実を形成し、新たな経験に踏み出すことに寄与するのであれば、むしろ身体運動を巻き込み、それによって通常の経験の臨界を超え出ていく方がよい。

身体運動を行いながら芸術作品の鑑賞を行うように設計されたものが、各種「庭園」である。庭園によっては、はじめて見るはずなのに「懐かしさ」という情態性が感じられたり、事前に調査もし、以前にも何度か来たにもかかわらず、はじめてのような新奇さ、劇的さが感じられたりする。

移動のさなかで感じ取られるものは、静止した位置からの鑑賞とはまったく別のものである。ただ移動し、前を通過し、通りすぎるだけのありふれた経験であっても、接近までの時間、同期する時間、遠ざかる時間というように、時間感覚がおのずと活用されてしまう。歩行はターゲットとの残り時間を常に知覚し続ける時間経験でもある。運動し続けるのだから外側に設定された空間軸で距離を捉えているはずがない。運動のさなかの時間を見出したのが、生態心理学者ギブソンの高弟のデヴィット・リーであった。生態心理学は運動のさなかでの知覚を解明しており、アフォーダンスとは基本的に関係はない。

この時間を、計量された時刻の積み上げに解消することはできない。時を刻む時計には、それじたい時間感覚はない。精密に時を刻む AI も、時間的ゾンビである。時間経験をもつものには、ときとして潜在化してしまっている記憶が呼び戻され、記憶そのものが再組織化されたり、別様に形成されたりもする。AI に欠けているのは、選択的に忘れる能力であり、記憶を再編する能力である。そしてこうしたことは時間経験のなかで起きてくる。移動しながらの知覚や経験は、記憶そのものを再組織化するまたとない機会なのである。

大崎晴地という芸大出身のアーティストがいる。故荒川修作や私や、多くの人たちとアイディアを

協議しながら、大崎晴地は作品を体験する人たちが、おのずと運動を引き起こし、運動とともにある経験を全面的に更新しようとする作品を作ってきた。初期の傑作の一つが、「エアートンネル」である。日本全国の多くの会場で展示された。

これは 4 層か 5 層の布から成る大きな布団のような装置で、一辺が 4 メートルほどある。そこの内部に空気を送り、ふっくらとさせておく。巨大なコタツ布団のようなものである。最下層の布から入り、その層に開けてある穴を移動しながら探し出す。赤ん坊のハイハイのように下の層と上の層の布の間を動き回り、穴を見つけては、そこから上の層に出ていく。これを一番上の層まで繰り返すのである。布の層ごとに穴の位置は異なっているために、試行錯誤しながら探すしかない。布のなかでは真っ暗なので、運動覚と触覚だけが頼りである。穴が見つかれば、一時的に圧が緩和されるので、上層に出ていくことができる。作品を経験することは、一つのエクササイズなのである。

まずこの作品は、触覚の働きにかかわっている。触覚は、知る働き以上に運動の調整にかかわっている。そして可能な限り無駄な知覚はしない。たとえば足の裏の触覚地図は、歩行に相応しく、無駄な知覚をしないように作り上げられている。足の裏全域で細かく地面を捉えたのでは、もはや歩行という動作もできなくなる。触覚の本性は、積極的で能動的な無視である。無視こそ安定した現実を支えている。これは抑圧的な無視とは異なる。するとこの「エアートンエル」という作品は、触覚性の無視の在り方を変え、組み直し、布の面を移動するごとに圧の感じ方を変えて、経験をリセットすることにかかわっている。精神分析医の十川幸司が述べるように、「トラウマの再編」にも寄与する。何と言っても 4 度も圧のかかった穴をすり抜けるのである。

また北千十駅の近くの古民家を改修して、「障害の家」と呼ばれる一連の構想の一つが作り上げられた。住む人のいなくなった空き家は、日本全国に夥しくある。将来にわたって誰かが住む予定はなく、いまだ更地にはなっていない家屋である。その家屋を、別様に暮らし、別様に生きるために、改修したのである。柱はあるがほとんど壁はなく、床は飛び飛びにしかない。次の部屋に移動するには、斜面となった畳を昇るか、細い柱を伝っていくしかない。この作品が公開された当時、ただちに評判となり、近所の子供たちのアジトになった。この家屋では、自分の身体の運動で家の活用の仕方を開発していかなければならない。一般の家屋は多くの場合、休む場所であり、休むための装置である。だが幾何学的に設計された家屋は、身体にとって実は座りのよいものではない。身体は、カオス幾何学が示すように、3 次元で形成されているのではなく、3 次元と 4 次元の間にあって、たとえば 3,14 次元のような少数次元で成立している。そして活動や運動の仕方によって、この次元が変化する。こうした家屋のなかで身体そのものの次元の変化を感じとることも、経験の可能性を別様に組織化するための貴重な手掛かりである。実際には、この家屋で無邪気に遊ぶことができるだけである。それだけで良いのである。これまでとは異なる別様の記憶を確保できれば、新たな可能性を確保したことになる。芸術とは、良い思い出を作るだけではなく、記憶を巻き込んで、経験の可能性を拡張する作業なのである。

参考文献

大崎晴地「障害を組みなおす―修復とは別の仕方で」河本英夫、稲垣諭編著『哲学のメタモルフォーゼ』(晃洋書房、2018 年)所収

ダマシオ『無意識の脳　自己意識の脳』(田中三彦訳、講談社、2003 年)

ドゥルーズ『意味の論理学』(岡田弘・宇波彰訳、法政大学出版局、1987 年)

デヴィット・リー「視覚情報による行為のタイミング制御」佐々木正人・三嶋博之編訳『アフォーダンスの構想』(東大出版会、2001 年)所収

ルック・チョンピ『感情論理』(松本雅彦他訳、学樹書院、1994 年)

9　孤島――文化生態学

浮遊する島

島は疑似閉鎖系であり、天然の閉鎖系である。歩けばただちに果てに当たる。果ての先は海である。果てを歩き続ければ、出発点に戻る。あてどなく歩き続けても、出発点に戻る。どこかに向かっていくわけではない。どこかに向かいながらも気が付けば、到達目標の周囲をぐるぐる回っていることはしばしば起きる。それはカフカの『城』である。閉鎖系は、むしろ自動的な動きの成果であり、結果である。これを環境のモデルとしたい。

環境は、個体を取り巻く周囲の世界である。地平線や水平線、さらには山並みを含んで円形に周囲を取り巻くものが、環境である。環境は個体ごとに異なる。そのため個体は、生態的地位をもつ。どのような個体であれ、気づいたときにはすでに環境に住まう以上、環境は作為的に取り換えの効くようなものではない。生きていることにともなう世界、それが環境世界である。環境は認識主観に対置された対象の総体のようなものではない。認識主観そのものが環境のなかで形成される以上、認識主観に対置されるのは、それが形成された後になって、当初の場面に設定されたある種の認識論的倒錯である。

環境は、自然と文化と歴史の混合体である。人間の力量程度ではどうにもならないものは自然に分類され、人間の営みの刻印が残るものは文化であり、さらに自然の履歴と人間の営みの蓄積が歴史と呼ばれる。人間の行為の延長上に自然を代替する営みが「技術」であり、自然の延長上にはなく、また文化的な蓄積がないものは、「仮想現実」である。仮想現実のうち現実性の起源を記すものが「神話」と呼ばれる。起源そのものを年代記として知ることはできない。現実性には起源の痕跡は残るが、起源そのものは表れることはない。起源は歴史の中にはない。そのためここに神話が必要とされる。イザナギ・イザナミが国造りのさいに 3 番目に産んだ島、それが隠岐の島である。

1　隠岐の輪郭

隠岐の島は、浮遊する。日本海には、潮の満ち引きはほとんどない。海底まで 90 メートルから 70 メートルと浅い海である。隠岐の島が浮き沈みしているのではない。氷河期には両極の氷が増大し、海面が下がる。そのため一時的にユーラシア大陸と日本列島は地続きになる。そして温暖化とともに海面は上昇し、隠岐の島は孤島になる。さまざまな推定値はあるが、海面の高さは氷河期と温暖期では、120 メートルも変動すると言われている。およそ 10 数万年単位の周期で、隠岐の島は浮遊を繰り返している。直近の氷河期が終わったのは、1 万 2000 年前だと言われている。

島は、火山の噴火で盛り上がったものではない。島には起伏はあるが、火山にともなう高い山はない。八丈島のように火山で盛り上がった島ではない。最高度の山(大峰山)でも、600 メートルほどの高さである。水も十分にあり、ダムもあり、いたるところで水田が作られている。日本海の暖流と寒

流が入り込んでいる場所であり、海産物は豊富である。冬の寒さは一時的に厳しい。だが生活全般は、どちらかと言えばおおらかである。

隠岐の島には大陸からも日本列島からも、多くの流入があり、多くの流出がある。だが交易の拠点というわけではない。拠点として広がっていくための面積も人口もない。むしろ「中継地」なのである。九州から荷物を京都に運ぶさいに、西回り航路の風向きの待ち受けのための港である。港に立ち寄り、水と食料を補給し、風を待ったのである。荷物を運ぶ者たちは、日本全国の文化を伝えていく。隠岐の港は、スクランブル交差点のようなものである。

もう一つ隠岐の文化には由来がある。聖武天皇の時代(720 年代)に「遠流の地」と定められて、文化人、行政マン、政治家が流されてきた。約 3000 人と言われている。島人にとってみれば、彼らは一般に教養人であり、多くの文化が持ち込まれてきた。若狭地方(福井県)との交易は盛んだったので、京都の朝廷から見れば、隠岐の島流しとは、「簡単には帰れないところに行って、しばらくおとなしくしていろ」という程度の内容であったと考えられる。放置できないものを風待ちのように一時的に係留する場所というのが、島流しのモードである。

これに対して、佐渡島には犯罪者、思想犯が流された。日蓮も世阿弥も流されているので、現代的に言えば、騒乱罪も含めた思想犯が多かった。犯罪者も含まれているが、金鉱堀のような組織的な作業に従事できるほどの社会性がなければならない。思想犯とは、自分の表現や思想に性急な社会性をもたせようとするものである。個々人の信念に留まる限り、どのように過激な思想であろうと、思想犯ではなく、変わった人に留まる。

八丈島には、強盗、殺人、放火のような凶悪犯が流された。宇喜多秀家のような戦争犯罪者も流されている。そもそも生き抜くことが難しい環境である。凶悪犯罪者は容易なことでは「人が変わる」ことはない。しかしいずれの場合でも、島の女たちにとっては、都会のイケメンの供給である。

隠岐は、島後と呼ばれる最大の島と、島前と呼ばれる相対的に小さな 3 つの島(海士町、西ノ島町、知夫里町)からなる。いずれも幾重にも入り江が入り組み、砂浜は見当たらなかった。何度か氷河期を経ているせいか、少しでも高い場所は氷によって削り取られ、やがて波に洗われて絶壁のようになり、入り江となったところは良港となっている。

地域として見れば、1963 年には隠岐諸島が大山隠岐国立公園に指定され、2009 年には隠岐諸島が日本ジオパークに認定されている。さらに 2013 年は世界ジオパーク（「隠岐世界ジオパーク」）に認定され、2015 年 11 月にはユネスコ世界ジオパーク（隠岐ユネスコ世界ジオパーク）に認定された。

島の周辺には、突き出た岩のようなものが残り、観光名所ともなる。削られて、削られて棒のようになった岩が、いくつかある。海面より 20 メートルの高さまで残り、その先端に夕暮れの太陽がちょうど乗っかかるように落ちかかると、巨大なローソクのように見える。この風景は、一日のなかで、時間帯としては 20 分程度の長さであり、この風景が実現するためには、夕方に雲がかかってはならず、太陽が海に沈む季節でなければならない。

訪れたときには秋雨前線が中国地方にかかった季節だったが、まぐれ当たりのようにこの岩の先端

に太陽が下りてきた。70 名の遊覧船の満員の乗客に、悲鳴に近い歓声があがる。息をのんで待ち構えているものが、ちょうどいまという感じで出現したのである。

稀な瞬間があり、長期間の自然の履歴が、たまたまというかたちでごく特殊な装いをもつことがある。このローソク島も 5 万年も経てば、どこかに消えてしまうのであろう。この岩の近くにも、第二、第三のローソク島を予感させるものがある。数万年後には、ここに再度奇跡的な瞬間が出現するかもしれない。この時間の長さは、人間の生活感覚の身の丈を軽々と超えてしまう。その身の丈を超えた「たまたま」が、いま眼前にある。この落差が人間にとって、「置き換えの効かない体験」となる。

ローソク島

島後の山は一面杉に覆われており、杉のことだから数百年は維持される。正確な計算値はないが、1200 年程度は生き続けるのかもしれない。そのなかには人間の想定を超えたような杉も出現する。稀に見る事態が、自然の偶然のなかに出現する。この場合には、これは「いったいなんなのだ」という理由を超えた驚きであり、起こりようのないことが起きるという人間理解を軽々と超えた事態である。

樹齢 800 年の杉の樹ということであれば、珍しいことではない。根元から何本にも分岐した灌木のような杉も珍しいことではない。それでもなお何か特殊なことが起きるのである。杉の木の下に設置された説明のためのパネルでは「乳杉」(ちちすぎ)と呼ばれている。枝分かれした枝の一部が、地面の方に伸びて、宙吊りとなり、「たれ乳」に近い姿となっている。この杉のある一帯は、崩落地のため一面は固い岩盤となっており、岩盤から水を吸収することは難しい。そのため枝の一部を下方に伸ばし、大気中の水分を吸収しているようなのである。確かに杉の生え際は、湿気に包まれている。岩の間から冷やされた空気が立ち上り、峠を超えた暖かい空気が混ざると霧となり、大気中を漂っている。

このあたりは杉のなかでも雪が積もっても枝が折れないウラスギであり、日本海側に残る杉の多くは、ウラスギである。冬場の雪のために、杉はすがたを変える。枝が下向きに伸びることはしばしばある。その一つが「たれ乳」である。道路そばから立ち入り禁止になっているため、それに触ることはできない。

乳杉

隠岐の島の各町には、一つ以上の神社があった。言い伝えも多く残されている。小さな祠のようなものから、押し出しの良い立派な山門をもち、細かく手の入ったものまで神社も多くあり多様である。

人間の営みは、ほとんどが思うようにはいかず、すっと進まないのが実情である。漁に出れば急に海が荒れる。大雨が降れば、崖は崩れる。実りの秋になれば、台風がやってきて水田の稲は絨毯のように倒れてしまう。思うようにいかないときには、ひと時、間をとり、粘り強くやるしかない。農業も漁業も各種職人も、ほとんど難しい仕事をしている。だからうまく行ったときには感謝し祝い、うまく行かないときには祈り、願う。自分の力ではどうにもならないもの、身の丈を超えたものには、祈らざるをえない。

そして身の丈をこえたものへの対応の仕方は、身の丈を超えたものへと向かって、自分の行為とともに「なんらかの委託」を行うことである。人間が意識をもつ存在である以上、そして意識を用いることだけでは現実に変化をもたらすことが容易ではない以上、この委託は、最後は「信じるしかない」。この委託のかたちはさまざまであるが、多くは自然神や各家族、各地域の「守り神」のかたちを取る。「苦しいときには神頼み」である。これが第一の神のモードである。

これは生活上の心のモードと呼ぶべきもので、多くの物語が語られ、そのまま教訓となる。荒波が祈りによって静まったとか、雷鳴が祈りによって過ぎていったとかである。身の丈を超えたものには、

身の丈を超えたもので対応する。これが対応になっているかどうかは、誰にとってもわからない。そのため物語りとなる。私の鳥取の実家にも、隅っこの方に小さな祠があった。誰がいつ建てたものかはわからなかったが、小さい頃はその陰に隠れてよく小便をしていた。

こうした身の丈を超えたものへの対応のモードとは異なり、地域の支配や行政の正当性を意義付けるように、大掛かりな物語が作られることがある。各地域には、一の宮が置かれ、地域の安定と繁栄を願い、それとともに行政の「正当性の由来」を示すものになっている。これが第二の神のモードである。隠岐の島では島後の「水若酢神社」がそれに相当する。黒松が周囲を囲み、近くには多くの古墳がある。通り道は蜘蛛の巣が張っているほどだから、ほとんど誰も近寄らないのだが、「前方後円墳」のようである。

伝承によれば、景行天皇の第 5 子、大酢別皇子は、朝廷から派遣され、隠岐の別の酢の神になったとする説があり、また島後の僧侶一閑が室町時代に記した『伊未自由来記』によれば、次々と中央から隠岐にやってきて、土地の巫女神を娶ることで祭司権をもち、司祭者として隠岐の支配者となったとある。中言神は、おそらく中央からの指示を伝える司祭者であり、農業技術の導入を行ったとされる。このとき神社は、地域行政のための由来を説くものであり、日常眼の見える形の行政権の象徴なのである。土地の巫女神を娶るところが、地域との融合を示唆する。

こうした物語は、いまだ世界観レベルの「説明」にいたることはない。現実社会の移り行きと、現に行われている行政の由来を系列立てて伝えてはいるが、一切の人事を超えたところから「人間一般」に関与するほどの超越神は、どこにも登場しない。そこで語られていることは、哲学ではなくむしろ歴史である。世界観レベルの世界の成り立ちを解き明かすような「絶対超越」は、おそらく人間であることの「限界」と対になったものであり、超越神は人間であってはいけない。そこへと向かうほどの物語は、少なくとも隠岐にはない。

第三に理神論に見られるような「万物の起源と万物への超越」を基本とする神がある。このとき神は現実性のきっかけをあたえるだけになる。それを大袈裟な言葉で言えば、「創造」となる。創造は不連続な転換である。そのため自然史を断ち切り、歴史を断ち切る。歴史の最小要件は、事象の間には因果関係があるという事態である。因果関係は際限なく続く。それが因果である。だが因果関係の「開始」だけは、カテゴリーが異なる。因果関係の延長上に、因果連鎖の開始を語ることはできない。しかも同時に現実性の認識の延長上には、因果の開始を知ることはできない。

一切の万物に超越するものは、仮にそれがあったとしても、現実の総体にとっては構造的に「測定誤差」である。あってもなくても「現実の総体」に変化が及んでいるのか、及んでいないのか判定することはできない。万人にとって、この判定不可能性は当てはまっている。否定もできなければ肯定もできない。それが理神論の神である。ライプニッツの抱いていた戦略的世界像である。

第四に分類されるのは、「絶対超越」である。日本文化からすれば、「絶対超越」(ユダヤに代表される一神教)は、不思議な仕組みをもっている。人間の経験の延長上ではどのようにしても絶対超越には届かない。だからこそそれを欠くことはできない。それを捨てれば、人間であることを止めること

になるからである。こんな位置に超越神を設定してしまえば、国家も領土も測定誤差のなかに入ってしまう。一切の国家も領土もなくても、この民族は生き延びる。これは人間の限界とそれの向こう側という仕組みに支えられている。そのさいの人間の経験の仕組みが、私にはよくわからない。仕組みは理解可能である。だがそのさなかでの経験の動きをとることは容易ではない。

旅行ではしばしば起きることだが、隠岐の飛行場で降り、レンタカーで手続きを行っていると、次の客として順番を待つ一人の男がいた。私たちは、レンタカーを借りて、遅い昼食に隠岐名物の一つである「サザエカレー」を食べ、繁華街をひとしきり様子見しながら、島後の南西端に位置するホテル「海音里」(うねり)に向かい、ホテルで手続きを行った。そのときもこの男が次の順番を待つように同じホテルにいた。ただの偶然である。挨拶したり話しかけたりするような雰囲気ではない。夕方になると数少ないホテル客のなかで、この男はただ一人、灯りを半分以上消したホテルのレストランで、黙々と夕食を食べていた。

取材のために隠岐の島を訪れたという雰囲気ではない。というのもこの男は外の景色はまるで見ていないのである。またレジャーや休養のためにやってきたという風情ではない。この男にはどうにも持って行き場のない「緊迫感」のようなものがあり、ときとして 2、3 度出くわしてしまうと、その緊迫感が残ってしまうような雰囲気であった。

翌日は早朝早起きして、海士町へ向かう遊覧船に乗った。2 等客船で、すでに乗船した乗客たちは、思い思いに寝転がっていた。その隙間を見つけて、場所取りをするつもりであった。そのときあの男が前方にすでに座っていた。これもただの偶然である。それ以来私たちは、この男を「あいつ」と呼ぶことにした。同行したエコ・フィロソフィーの研究助手による命名である。「あいつ」は、座禅を組むように 2 等客室に座り続け、異様な雰囲気をまとっていた。それ以来、新たな訪問地に着くたびに、「あいつ」がいないかどうか周囲を探すことになった。「気がかりな存在」は一定頻度で出現する。本人は可能な限り目立たないように暮らし、移動している。ただそのことが「気がかり」なのである。

2　流刑地

隠岐は、中央行政機構からみたとき、ある種の「流刑地」である。だがカフカの「流刑地」に見られるような「処刑場」ではない。牢獄は、社会である限り、どのような社会にも存在する。犯罪者を社会から隔離するための装置だからである。だが流刑になったものが、牢獄に閉じ込められていた記録は、ほとんどない。里人と暮らしていたというのが実情である。ところで京都に比べて、隠岐が暮らしが厳しいとか、暮らしにくいということは考えにくい。コメもあり海産物に恵まれているから、現在では観光地となっている。「観光地への遠流」とはいったい何なのだろう。中央政府からすれば、場所的な左遷である。職位を剥奪し、名誉を棄損しているのである。しかしそこに暮らす里人にとって、そんなことはどうでも良いことである。

そうなると本人の気持ちの持ち方次第のところが生じる。そしてこれがなかなか難しいのである。不当な扱いを受け、隠岐に流されてきたと思い続けるものは、やがて来るはずの帰還を願いながら、

地元への貢献を糧に、ご赦免を願い続ける。その間井戸を掘り、灌漑を行い、多くの和歌を残し、多くの仏像を彫る。里人の女との間には、何人もの子供が生まれる。しかし帰還が許されると、その子たちのほとんどは島に置いていくしかない。稀に娘を都に連れていくこともある。これは小野篁(たかむら)の事例である。

小野篁は、唐に向かう自分の船が差し替えられたことを不服として、遣唐使の職を辞してしまう。何度かの遣唐使派遣には乗船したが、いずれも暴風雨に遭い、そのまま引き返している。そして三度目の機会に病気を理由にして乗船を拒否し、当時の嵯峨上皇の逆鱗に触れ、島流しにされた。篁は、不当な扱いを受けたと感じていたのだろう。当時の身分は参議であり、現代の役職に当てはめれば、外務省中国局の副局長という役職である。

役人が流されたのであれば、それだけでは記録にも歴史にも残らない。篁は、多くの和歌を詠み、仏像を彫った。また池や井戸を掘った。金光寺権現堂にあるご本尊の仏像は、篁の彫ったものだとされている。篁の作だとされる「世の塵に染まぬ色こそ貴けれ　しづが伏屋の軒の白梅」という短歌は、とてもうまいとは思えないが、手すさびの歌にはなっている。隠岐の暮らしに溶け込み、最大限の貢献をしながら、なお帰還を待ち続けている。篁は、おそらく誰にとっても危険な人物ではなく、実務的な「上級流人」だと言ってよい。都に返しても、それによって波風が立ち、大きな影響がでるとは考えにくい。

ところが上皇や天皇が流された場合には、事情が異なる。ことに政変の首謀者は、それに味方するものも本土に残存しているのだから、原則帰還はないと考えたほうが良い。天皇家による朝廷と武家たちの政府である「幕府」は、はっきりとした二重行政システムである。日本国憲法では、天皇は国の象徴になっているが、行政府の力が弱まると、天皇が前景に出るような仕組みにもなっている。天照の神話時代から、天皇が直接行政を取り仕切った仕組みはない。歴史上何度か例外はあるが、天皇はつねに行政と連動するカップリングの一方である。その意味で行政当局から見れば、天皇とはシステム的には「触媒」のことである。

この朝廷と幕府の二重権力の仕組みは、征夷大将軍の任命をつうじて徐々に形成され、源実朝は朝廷内の「右大臣」にも任ぜられ、幕府は幕府で実朝の後継将軍に、後鳥羽上皇の皇子を迎えて「宮将軍」とするような構想を出していた。朝廷と幕府は、相互に他を支えあうことで、二重権力システムはしばらく安定していた。だが幕府側では、源実朝は甥の公暁に殺害され、朝廷内裏守護にあたっていた源頼茂は、西面武士に襲われて討ち死にし、そのさいにも火災によって多くの建物が失われた。この建物の改修には、莫大な費用を要するが、東国からの支援はまったく得られなかった。

政変が起きる 3 年前には、朝廷と幕府は、安定を取り戻す仕組みもなく、こじれ切っていた。承久 3 年(1221 年)、後鳥羽上皇は、執権・北条義時の討伐を宣言し、山田重忠をはじめとする有力御家人を動員して、畿内の兵を招集して乱を起こした。いわゆる「承久の乱」である。後鳥羽上皇は、刀にもこだわりがあり、当時の刀工のなかから 24 人の名人クラスの職人を集め、刀を作らせている。そのなかには歴史に残る名刀もある。朝廷の大改革も進めていた。天皇・上皇のなかでは剛腕であり、

藤原定家の『明月記』にはしばしば剛腕ぶりが言及されている。

しかしこの乱は二月ともたず、幕府 19 万人の大軍に圧倒され、後鳥羽上皇は隠岐に島流しとなった。島流しの直前に出家して法王となっている。後鳥羽上皇 41 歳の時である。後鳥羽上皇だけが流されたのではない。協力した順徳上皇は佐渡に流され、他に土佐に流されたもの、但馬、備前に流されたものもいる。そして夥しい数の朝廷側の公家や公家武士は、六条の河原で首を切られ、処刑された。

承久の乱は、後鳥羽上皇にとってただの惨敗だったのである。戦に敗れて逃亡したものは、どこまでもどこまでも追跡され、捕まると処刑された。逃亡の途中に自害したものもいる。ひとたび戦いで勝利したものは、どのようなかたちであれ、後の反乱の芽を摘むために一切の容赦はしない。

そして後鳥羽上皇は、隠岐の西ノ島(海士町)で 19 年の歳月を過ごし、そこで没している。取り返しのつかないほどの敗北である。やり場のない思いが消えることはなかったとも思える。すでに選択肢はほとんどない。なにかをやろうにも手段がない。隠岐の 19 年は、途方もなく長い。時々好きな牛相撲を見て気晴らしになることはあっても、我が身に及ぶ激変に対応するようなものはなかった。隠岐には、後鳥羽院の書き置きがいくつか残されている。

> たとえ魔縁になりたりとも、なにとなき小事などは、ゆめゆめすまじき也。返々まれまれ身にとどまりたる善根功徳をうしないて、手をむなしくてあらん事のかなしきは、なににもすぎたらんずる也。たとえば、ひんくなるものの、おのずからもちたるたからをうしないて、大事をいとなむがごとし。
>
> （田村二枝『隠岐の後鳥羽院』15 頁）

この事態は、終生変わらなかった。いっさいの財産を失ってしかも大事をなしたいという思いは変わることはない。自分の思いと現実性の条件の隔たりが大きすぎて、どうにもならないのである。ただし隠岐の生活が、困窮していたとも思えない。この地域の豪族村上家がなにくれとなく生活を支え、他の近接する島には移動することができた。後鳥羽上皇の居住跡地の近くに船着き場がある。この船着き場は、現在では島の中ほどにあるが、当時はそこが海岸線だった。船を係留するための杉が残っている。

後白河上皇住居跡

後に居住地跡の近くに建てられたのが、「隠岐神社」である。春秋に例祭が行われ、上皇の短歌「我こそは新島守よ　隠岐の海の　荒き波風心して吹け」が、曲と振りを付けた承久楽として奉納されている。5 年ごとの式年大祭では、隠岐神社から御火葬塚までの神幸祭が行われている。

後鳥羽上皇の事件から、110 年ほど経った頃、もう一つの事件が京で起きる。鎌倉時代の末期であり、朝廷と幕府の二重権力構造にも、ほころびとねじれが来ていた。朝廷側の天皇の継承は、兄弟の多い分だけ、簡単には決まらなくなる。そこで暫定的な取り決めとして、後伏見天皇の系統の「持明院統」と亀山天皇の系列の「大覚寺統」の二系列で、交互に 10 年単位で天皇を出し合うというような取り決めが行われていた。

後に隠岐に流されることになる後醍醐天皇は、自分の子供を天皇につかせることができなかった。天皇に即位するときから、自分の次の天皇は決められており、この皇位継承プランを鎌倉幕府も承認していた。鎌倉幕府も、「持明院統」系列の将軍が職についていた。そこで武士の間でも、幕府側につくか、反幕府側につくかで、入り乱れていた。情勢はさまざまな思惑が飛び交うようなスクランブルだった。

正中元年(1324 年)に後醍醐天皇の倒幕計画が発覚し、六波羅探題は、天皇の側近を処分する。後醍醐天皇、36 歳のときである。その後も後醍醐天皇は、倒幕計画を何度も立て、寺院勢力を味方につけながら画策するが、これも六波羅探題が知るところとなり、後醍醐天皇は、三種の神器をもって女装して京都を脱出し、笠置山で挙兵する。武士は武士で、楠木正成は倒幕に加担するが、足利尊氏や新田義貞の当時の鎌倉幕府軍は、後醍醐天皇を捕縛する。先例にならって後醍醐天皇は謀反人とされ、

正慶元年(1332 年)に隠岐の島に流されることになった。後醍醐天皇の隠岐での居住地が、「隠岐国分寺」であり、強固な警護が付いていた。

隠岐国分寺

約 1 年後、後醍醐天皇は、隠岐を抜け出して、伯耆の船上山で挙兵する。そのさい後醍醐天皇の島抜けと挙兵を支えたのが伯耆の豪族名和長利である。武士でも反幕府の勢力が全国に残り、後醍醐天皇を担ぎ出す機会を狙っているものたちがいた。

これを平定するために鎌倉幕府から派遣された足利尊氏は、逆に後醍醐天皇に味方して丹波で反旗を翻し、幕府直轄の六波羅探題を攻略した。同じころ東国で挙兵した新田義貞は、分倍河原の戦いで勝利し、鎌倉を陥落させてしまう。時の執権、北条高時ら 800 人余りは自刃し、鎌倉幕府は消滅する。

天皇家の権力争いに、武士も入り乱れて離合集散を繰り返すようなスクランブルが実現した。後醍醐天皇にとってそうした激動の時代のなかで起きた、寄り道のような隠岐の島流しであった。その後、後醍醐天皇は自分で権力を掌握し、自分で行政を行うという「親政」を行った。歴史上極めて稀なことである。さらに南北朝という朝廷が二つに分かれて維持されるという前代未聞の例外的な時代が続く。その中心にいたのが後醍醐天皇だった。

3　無いものはない

地方創成を語るさいに、島前の海士町は、一つのモデルケースとなっている。そのとき掲げたスローガンが「無いものはない」という語であった。海士町には、大都市で期待されるようなものは何もない。洋服の種類もない。コンビニもない。シャレたカフェもない。ディスコもない。こう並べてくると「無いものはない」は、ある種の居直りに聞こえる。ただしこうした便利で快適で必要と思われるものが何でも揃うような大都市には、逆に何かが欠けている。

いったい何が欠けているのだろう。たとえば「経験の広さ」という語を設定してみる。大都市の生

活のなかでは、たとえば庭先で、芋の栽培を行った経験のある人は、おそらくほとんどいない。田植えをし、稲を刈った経験のある人もほとんどいない。日の登る前に、「刺し網漁」に出たことのある人もほとんどいない。雲の流れをみながら、大雨になるのか、ただ通り過ぎているのかを感じ取る機会に立ち会ったことのある人もほとんどいない。

高度に機能化した社会では、あらゆるものが取り揃えられているようにみえながら、多くのものを捨ててきたから機能化しているという面には気づきにくい。快適で多くの選択肢に開かれているように見えながら、経験はとても狭いものになっていると感じている人は、潜在的にはかなり多いのではないかとも思える。知的選択肢は多いのに、経験が狭いのである。

個々人の経験の多様性という面で言えば、さまざまな経験をもつひとたちのそれぞれの多様性を持続可能なかたちで形成していくことは、言葉では美しく聞こえるが、実はこれも容易ではなくなっている。またそのためには、どうしたらよいのかも正直わからない。仕事をつづけながら、時としてリセットしていくことが必要となる。私個人で見れば、哲学研究者として長年やってきた。だが年齢的に、能力、体力の限界があり、いつまでも同じことはできない。研究者が同じレベルの研究能力を長期間維持することは、ほとんど無理難題である。個人的には、理論哲学ではなく、歴史研究に軸足を置かなければ、体力的には間に合わなくなっている。能力ではなく、経験の蓄積に力点を移す。

そうすると一般にリセットの場所が必要となるが、どこかでそれを用意しておかなければ取り掛かることさえ難しい。またリセットの場所が多く用意されているとも思えない。こうして「ただ生きているだけ」ということが起きる。「ただ生きているだけ」でも悪くはないが、どこか工夫が足りない。「生きる力」が存分に活用されているとは思えないのである。こうした課題は、実は潜在的には多くの人が抱えている問題ではないかとも思える。アイディアだけではなく、現実に実行するための場所が必要なのである。

地方創成とは大都市圏とは異なるかたちの地域ごとの選択肢をもち、それらを持続的に展開可能なかたちにすることである。だがこれが容易なことではない。後白河上皇が晩年をすごした海士町は、人口減少が続いた。平成の大合併のさいに抱えていた借金は、100 億円近くある。財政再建団体に指定される直前まで来ていた。そこから多くの工夫がなされた。海士町唯一の港である菱浦港には、町民が気軽に集まれる場所をつくり、そこから情報を発信していく試みがなされた。

ごく少数でも良い。人が入り、起業し、なにかを行い続ける。当初は、信じられないほどのささやかな試みである。それがしばらく持続可能になれば、同時に選択肢を広げる。現在はっきりと判別できるいくつかの企画が進行している。そして海士町は、人口増加に転じたのである。

「巡の環」(株、代表阿部裕志)は、「海士五感塾」を開き、大手企業の労働組合を中心に、人材研修プログラムとして活用されている。地元漁師の話を直接聞く機会を入れたり、観光業の工夫を入れたりと、体験的な経験に触れ、それに響応するような場面が導入されている。情報を知ることと、体験することの間には、極端に大きな隔たりがある。この隔たりを埋めていく作業なのである。

また「めぐりカレッジ」は、地域コーディネータを要請するプログラムである。グローバル化して

いく世界のなかで、可能性としてはグローバル化していく方向と、地域の固有性を追求していく方向は、いずれも欠くことができない。そしてこの両方向は論理的に折り合わせることは難しい。一般性・普遍性から降ろしてくれば、個々の地方は特殊な問題となり、個々の現場から立ち上げるだけでは、あくまで特殊事例に留まる。普遍と特殊の間に「個別」があるはずなのだが、この個別がどのようなかたちになるのか、論理的、数学的には決めることができない。

実はこの問題は、上から降ろす(トップ・ダウン)のか、下から持ち上げる(ボトム・アップ)なのかを競うような仕組みでは、うまくとらえられないことを意味する。トップ・ダウンもボトム・アップも、観察者から眺めたやりかたであり、外から物事を見ているのである。この外から見た位置から、個体に到達する事態を描こうとしたのが、ヘーゲルの論理学であり、壮大でほとんど無駄な記述を作り上げたのである。つまり普遍と特殊の間に「個体」が出現する仕組みを、特殊が自己規定を獲得して自己個体化する仕組みとして考えようとした。いわば特殊の自覚が高まるように描いたのである。こんな仕組みが当てはまる事象は、ほとんどない。

あらゆることに適応可能な一般的な規則は、基本的には存在しない。ことに人間を含む事態には、機械的な規則の適応はできない。そこで一般的な規則をとりあえず、目安として頭に入れておく。そこから個々の問題解決に取り組んでみる。個々の問題が複数のやり方で解けるようにプロセスが見えてきたところが、分岐点である。この分岐点のところで、さらに前に進むことのできる選択をする。そこでは展開可能性だけが、指針となる。

このとき持続可能な展開可能性だと見えているものが、「普遍」であり、その本体は、行為のさなかで行為を誘導する「イメージ」である。個々の手続き的経験のなさかで、普遍はそのつどイメージとして獲得され、かりにこれが数学的な定式化を受けるのであれば、原型的なイメージとなる。数学的な定式化は、とても有効な比喩なのである。またプロセス総体に対して数学的定式化が説明をあたえるとすれば、数学的、論理的定式化はプロセス総体の影になっている。

このふたつの方向をつなぐ仕事が、「地域コーディネータ」である。こうしたプログラムをつうじて、個々の地域課題にどのようの取り組むかを実践的に習得するのである。当然ながら地域の声を聴きとらなければならない。インタヴューを行いながら、それを冊子に編集する仕事もこなしている。これらは地方創成に携わる人に向けた人材養成プログラムである。

他方、実際に海士町でも仕事を創り出さなければならない。たとえば特売品の開発であり、サザエカレーも良く売れたアイディア商品である。乾燥ナマコ工場建設と乾燥ナマコの生産は、2007 年に島の後継者の仕事場として、町長が議会を説得して開始している。農業のつらいところは実質的に季節労働になることである。忙しいときには信じられない忙しさだが、仕事がないときには毎日暇である。そこで「マルチワーカー」という仕組みを導入している。特定人材派遣法をうまく活用して、春には岩牡蛎の出荷、夏は宿泊業、秋には海産物の冷凍処理、冬にはナマコの出荷と継続的に仕事があるような仕組みでできるだけ多くの人を雇用できるようにしたのである。

また教育でも、新たな試みを行っている。隠岐の島には高校がひとつしかない。正式名称は、「島根

県立隠岐島前高等学校」である。生徒総数 160 名であり、島外の生徒が 79 名で全員が寮で生活している。そのうち県外から来ている生徒が 66 名で、出身地は北海道から宮崎までと幅広い。授業科目も個性的で、「夢探求」(通称夢ゼミ)という授業では、地域の課題を取り上げ、問題解決型のアイディアと討論を積み上げる仕組みを導入している。

隠岐國学習センター

高台にある高校に向かう坂の入り口に「隠岐國学習センター」が置かれている。高校の補習授業と個々人の学習目標を明確にした指導を行っている。たとえば一般的に日本全国にある島の人口は減少していて、後継者不足になる。ところが人口減少は島だけの問題ではなく、日本全体の問題でもある。それぞれの理由はかなり異なるが、身近なところから課題設定を行い、そこから順次次元をあげて、より複雑な問題を考察する仕組みを導入している。

ここには地域再生の一つのモデルがある。一般的なモデルを適応しないこと、現在の地域社会の課題を取り出して、そこから問題解決のためのプロセスの設定を行うこと、さらにはその途上に分岐点のように選択肢を増やしていくことである。ひとつひとつはささやかなものだが、気が付いたときには局面が変わっているほどの変化をもたらすことがある。システム全体を外から観望するようにして、総体を組み換えることは、人間に特有な「革命的倒錯」である。外から変化させるものは、もう一度元に戻しても良く、その転換がなかったということにもできる。システムという点で見れば、経済合理性に貫かれたシステム総体を覆すように変えることは、どこか筋違いである。むしろそれに対しては選択肢を増やすようにサブシステムを断続的に立ち上げることが必要となる。それはシステム総体にとって弾力を増す方向で機能するはずである。

参考文献

今川文雄編訳『明月記抄』(河出書房新社、1986 年)

小河原和世『日本の神社　水若酢神社』(DeAGOSTINI, 2015 年)

カフカ『雑種』(酒寄進一訳、理論社、2018 年)

野津龍『隠岐島の伝説』(日本写真出版、1998 年)

田邑二枝『隠岐の後鳥羽院』(後鳥羽院顕彰事業実行委員会、2014 年)

田邑二枝『隠岐の後鳥羽院抄』(海士町役場、2005 年)

巡の環『あまのききがき』(Vol.1,2009, Vol.2. 2009, Vol.3.2010, Vol.4　2011)

藻谷浩介『里山資本主義』(角川新書、2013 年)

藻谷浩介『デフレの正体』(角川書店、2011 年)

10　トワイライト・アイランド

佐渡は東京 23 区の 1,6 倍の面積があり、人口も 10 万人程度である。かりに島流しになってもそこで生きていくことができるだけではなく、この地で新たな活動を繰り広げることができる。日本最古の歴史書でもある『古事記』の国生み神話には、大八島の 7 番目として登場し、『日本書紀』の同じ神話には「億岐州」(隠岐)と「佐度州」(佐渡)が双子として、5 番目に登場している。奈良時代にはすでに佐渡は一国と認定され、「流刑地」の一つに定められていた。行政的には、鎌倉時代以降、本間氏が守護代として佐渡を支配していたが、1589 年（天正 17 年）に上杉景勝の侵攻を受けて滅亡し、上杉の支配地となった。その後徳川幕府の直轄地となる。現代的に言えば、「経済特区」の指定であり、長崎や大阪とともに指定されている。

島流しは否応のない新天地への強制赴任に近い。畑作も水田も漁場も佐渡の人口を支えるには十分である。そこにはすでに生き延びてきたものの知恵があり、新たに流入してくるものの対応の心得も備わっていたに違いない。だがそれでも島に特有の「陰り」はある。金鉱山で浮かれるほど栄えた往時があり、栄華がある。そして過行くものの姿を残響のように残しながら、新たな社会生活の模索は続く。これは裏合わせになった「憂鬱と努力した明るさ」でもある。人の移動は当初より島という地形条件で限定されている。新たな流入も流出も限られたものである。それでもなお限られた選択のなかで模索は続く。

1　歴史的陰影の再編

いくつか典型的なポイントがある。歴史の遺跡をそのまま現代的な視野に組み替えるものである。一般的に言えば、過去の遺物を「観光」に活用するのである。だがそれでも稀に見る景観になることもあれば、陰るままに維持される生活もあり、歴史の証言者になることもある。

北沢浮遊選鉱場

鉱山跡地の近くの開けた場所に岩石の選別所が残っている。遠景で見ると、まるで階段状の要塞だが、そこに蔦が絡まり、緑の窓を具えた地を飛ぶ軍艦のように見える。前景の芝の上に浮き上がっているほどの緑の要塞である。1989 年に正規の鉱山からの金銀の取り出し作業は終わっている。かつて鉱山を運び込み、上から順々に鉱物を粉砕し、金銀の含有の多そうな岩とそうでないものを判別し、さらに選別していく。それが階段状に設置された分別機である。

工程の一部には、水の流れを利用して、水に浮くゴミや水流ではまったく動かない石を取り除く。そのため水流を使いながら上流から下流に流していく仕組みが必要となり、もともと斜面であったところに階段状の建物を設計したようである。作業が歴史的に完結したとき、階段状の建物の天井を外し、なかの器機を取り外して外部に運び出した。そして外枠の外壁だけが残った。そこを蔦が夥しく覆ったのである。

遺跡の光景であるためには、蔦が前面を覆い、廃墟そのものが覆い隠され、変容していかなければならない。そしてそれを「軍艦」様のまとまりとして知覚できるための「距離」が必要となる。

距離は、比喩を生み出す装置である。人の顔を「かたち」として見るためには、それに相応しい距離が必要である。また視野の形成のためには、隔たりが必要となる。遺跡を軍艦として見るためには、それに相応しい隔たりがいる。この隔たりのなかに空間的距離と時間的距離が含まれており、そこに歴史の知覚と事物の視野が入り込む。この隙間は、解釈の母体であり、構造物に堆積する地層だと言っても、構造物の由来を語る伝承だと言っても、ほとんどのことが当てはまっている。隙間そのものの歴史さえ成立し、それこそすでに構造物全域に浸透したイメージである。この構造物は、圧倒的な巨大さを直示するために、訪問者にとっては偶然に出会う異物でさえある。それじたいで端的に面白いのである。そしてこの構造物の由来への思いが、沈めても収まることのない喚起力を醸し出している。正直、不思議な感動である。

佐渡の南端付近に「佐渡国小木民族博物館」があり、保存するように指定された古びた集落がある。かりに保存指定しなければ、歯が抜けるように更地となり、空き地になっていく。保存とは、時間の流れを緩やかにすることであり、場合によっては停止させることである。この古民家群は、中央を流れる小さな川沿いのびっしりとひしめき合った古民家の集落であり、隙間の空き地では、猫の額のような、家庭菜園が作られている。小さな川には生活排水も流されているようだが、流れが速いためか、臭いが漂うことはない。集落のなかにはすでに空き家もあれば、老人がひっそりと暮らしている家もある。小さな川と小さな路地に囲まれて、間に家が建っている。路地は、道路というより、長年かけて形成された生活の通路である。

路地と路地の間には、三角のかたちをした家がある。まるで前方から船を見るような姿になっている。そこには初老の人懐っこいおばあさんが住んでいて、何度も外に出て来ては、小木村の成り立ちを説明してくれた。この人には、ほとんど方言がない。おそらくひと時本州のにぎやかな都市部で暮らし、老後にこの小木村に帰ってきているようである。この村でひっそり暮らしたのでは、手持ち無

沙汰になるという賑わいの老婆である。この三角の家の右側の角に吉永小百合が立って紹介写真が作られており、有名になっている。今回の視察チームでは、研究支援者の岩崎大君が、ポーズを決めた。塩の専売所の看板は、戦後しばらく続いた昭和の痕跡である。当時、塩は特定の場所でしか手に入らなかった。いまではどこのスーパーにも置いてある。

船様式の古民家

この集落を抜けた高台に博物館があり、そこに木製の「千石船」が復元されている。船大工を集めなければ、やれない作業である。復元作業は平成 9 年から開始されており、この時期の船は、大半はすでに金属と合成樹脂で作られており、多くの船大工が残っているとは考えにくい。原則釘を一本も使わないで大型帆船という構造物を作りだすのだから、寺院を作る宮大工と並び、洗練された特殊技能である。岩手の大船渡市から 7 名の船大工を招き、作業に当たっている。船じたいは巨大で、江戸期に作られていた「千石船」の設計図をもとに復元されている。歴史の再現であり、多くの歴史的「再現」に見られるように、時代的な「異物」でもある。150 年を一挙に飛び越えるのだから、それじたい推移するものの圧縮でもある。この圧縮には莫大な人のエネルギーと資金が必要となる。

千石船は、貨物船についてのこの地域での呼び名であり、全国的な名称は「弁財船」である。佐渡は、西回り航路の中継地の一つであり、弁財船は速度を競う上方型弁財船と、多くの荷物を積むことができる北前型弁財船に分かれる。西廻り航路が開かれ、西日本や北陸の文化が伝わってきたこと、また配流者が伝えた文化も含めた貴族文化や武家文化、町人文化が一体となって、佐渡特有の文化を形成していったといわれる。

大阪から江戸へ荷物を運ぶ際には、江戸中期以降すでに速度が問題になっていた。この港(宿根木)の千石船が、はじめて記録に現れるのは、1774 年のことである。かつて船主や船頭をやっていたところには、仕切帳、造船資料、航海文書などがあった。だがこれらの資料は、戦後顧みられることも

なく、忘れられ捨てられていった。この高台の宿根木小学校が廃校となり、そこを博物館にしたおかげで、民具類や文書が収集された。そのなかに千石船の設計図があったのである。

人物(畑一成君)の後ろにあるのが、舵取り用の操舵尾で、帆を立てる柱は、博物館の天井を突き抜けるほどだから、船の中央表面に折りたたまれている。博物館の外に建てられた石碑の文字によれば、船の建造費は 1 億 4 年万円とあるので、多くの寄付がなければ成立しない一大事業である。作業に取り掛かる前には、誰にとっても「夢物語」であったに違いない。それが実行に移され、とことんやりきってしまうところが「歴史」である。物語は、歴史的距離の再編のことである。物語にしか出現しない幻の船が、ここにこうして現物として存在する。それが驚きなのである。

千石船　白山丸

能舞台は、佐渡の多くの地域に残っている。人口当たりの能楽堂の数でみれば、おそらく日本一の数である。電気のない時代のことだから、夕暮れから宵にかけて、篝火を焚いて能の舞台装置にしたと思われる。狭い空間に火を焚いて陰影の前後を作り出す空間は、どこか佐渡という島の在処に釣り合っている。あるいは夕暮れの小さな漁船のなかの雰囲気でもある。闇夜の中の火は、人を興奮させ、熱狂させるところがある。夜間の火事では、近所の人たちが別人のように力を発揮する。火事場の馬鹿力は、闇夜の火事に相応しい。これは夏祭りの花火でも同じである。

世阿弥は、室町幕府の三代将軍足利義満の寵愛を受け、能楽を大成させたが、六代将軍足利義教の怒りにふれ、1434 年に佐渡に流された。世阿弥 72 歳の時である。佐渡の多田に着いた世阿弥は、長谷寺を経て新保の万福寺に配所されている。在島中に世阿弥が著した小謡集『金島書』に書かれている元号から、1436 年までは佐渡に滞在していたことが分かっている。比較的短期の滞在であった。

世阿弥以前に、佐渡では「舞楽」が行われており、左衛門尉貞泰が、園中将という人の舞楽興行

の申請に応じて、領域内の勧進を許可するという内容の資料が残っている。毎年 3 月 15 日には舞楽が予定され、寺中の繁盛や仏法の興隆を讃える口上が述べられている。年数から見ると、1351 年の日付になっているので、世阿弥が生まれる以前のことである。舞楽は仮面を着けて踊る曲名が多い神事なので、舞うための仮面を必要とする芸能社会が、14 世紀の中頃には、久地郷に生まれていたことになる。神事として舞楽がすでに行われており、能楽のための予備的な設備は整っていたと考えてもよい。

世阿弥が流されて以降、約 100 年後(1553 年)には、観世元忠が、河原田の城主に招かれ、一座を連れて興行を行ったという資料がある。この時期には、すでに能の興業が広範に行われていたことを示唆している。記録によれば、世阿弥の玄孫にあたる観世元忠が、門人の「市若彦九郎」「保生七郎」「服部又四郎」「服部三太夫」を連れて、猿楽を行ったとある。名前の作りから見て、芸能社会の「芸名」のような作りであり、新規の参入者も多く、能はすでに伝承される芸能になっていたようである。

白山神社境内　能楽堂

能は、おそらく当時でも蓄積された事前知識の必要な洗練された芸能になっていて、現在ではそれほど敷居の低い芸能ではない。それは佐渡ばかりではなく、日本全国でも事情はほぼ同じである。能のような高度な熟練と洗練を具えた文化は、間口が狭く奥行きが際限なく深い。江戸時代の最盛期には佐渡に 200 箇所ほどの能舞台が作られ、現在でも 30 か所程度残っているようである。季節に応じて実際に籌能も行われている。他方盆踊り風の大衆身体表現は、多くの人の参加が主眼になるので、見るものではなく、自分でも踊るものになっていく。

2　ゴールドラッシュ

佐渡は、「今昔物語集」にも記録されているように、昔から金が採れる島として知られていた。江戸時代に入ると、経済的利権を確保するために、徳川家康が幕府直轄（天領）として指定し(1601 年)、

翌年には大久保長安が奉行となった。明治維新後、宮内省御料局財産から、民間の三菱金属に払い下げられたが、長期にわたり佐渡奉行所が管理したいわゆる「経済特区」である。

鉱山の繁栄によって日本各地から山師、金穿り、大工、測量技術者、商人、漁業者などが集まり、当時人口が急増し食糧需要が増えた。そのため鉱山の技術を応用して海岸段丘上に新田開発も行われた。また鉱山で使用する炭・木材等の生産資材確保のため、山間部の森林も御林（官有林）として、奉行所によって管理が行われている。

金銀産出のピークはいくつかある。幕府直轄の当初が最初のピークであり、この時期の銀の産出は、6 万キロから 9 万キロと試算されており、当時の世界産出量で見て 15%に相当するようである。すさまじいゴールドラッシュである。奉行からヤマを請け負って稼業するのが、「山師」であり、「「山主」とも「山元」とも呼ばれたこともあるが、いずれにしろ現代的には「起業家」である。

山師は、有望そうなヤマを見立てて、多数の敷人足(坑内労働者)と岡人足(坑外労働者)を雇い事業を起こしている。このゴールドラッシュ時には、100 人近い山師がいたと言われている。山師は苗字、帯刀も許され、管制「企業家」であり、出身地は丹波、石見、若狭、備前、備後、但馬等にもおよび、全国から寄せ集まってきたというのが実情である。そのなかに味方但馬というのがいた。但馬は、関ヶ原の戦いで戦功があり、500 石の知行を得ていたが、それを捨てて山師になり、佐渡で 57 か所の鉱区を稼働させ、それ以外に多田銀山、奥州南部銀山でもヤマを請け負ったらしい。現代的に言えば、公務員を捨てたマルチ・ベンチャーである。

元禄時代(1680－1709 年)には、一時激減した産出量が、再度大幅に回復した。湧水を取り除く水道(南沢疎水道)が開通したことによる。金鉱採掘の妨げになるのは、掘った坑道が水に浸かってしまうことである。雨が降れば坑道に流れ込み、掘り進めば湧水が出現する。水に埋まったのでは鉱物を取り出すことはできない。しかし南沢祖水道が開通したことで坑内の水を入り口まで運び出さなくても、地下排水路を使って水を海まで流すことができるようになった。この大土木工事を指揮したのが、静野与右衛門であり、資金勘定を行ったのが時の佐渡奉行、荻原近江守重秀である。これによって水汲み人足の数は実質的に大幅に減った。

敷人足にとって危険な条件がもう一つあった。坑内の酸素不足である。坑内は基本的に昼間でも真っ暗である。岩を読んでいくためには、かなりの明るさが必要である。そのため松脂やロウを燃やして、坑内を明るくしている。空気坑を掘っても、簡単に空気環境は改善しない。そのため坑内労働者は、労歴 10 年が限度だとも言われている。

狭い範囲に莫大な労力を投入するのが、鉱山の仕事である。現在的に言えば、限りなく密な仕事場である。農民も水汲みに駆り出されたが、文政 5(1822)年には労役に代えて、農民からの拠金に置き換えられている。相当額のお金を支払えば、水汲みの割り当てが免除されるようになった。現代で言えば驚くことではないが、ここには時代の大きな推移が見られる。「現物経済」から「貨幣経済」への移行である。

金によって幕府財政が支えられるようになると、生糸や織物を中心とした商品作物の生産拡大が各

地で続いている。ことに上州での商品作物は多かった。商品経済は元禄のころから明確なかたちをとり始め、金貨、銀貨にささえられて貨幣経済とともに急成長した。それまで現物で納めていたさまざまな取引は、貨幣をつうじての取引に置き換わり、経済の姿が変わってしまった。貨幣経済になると、貨幣さえもてばそれだけで仕事になる金貸しや、それに群がるものたちが同時に出現してきたのである。

貨幣の動くところには、賭場が立ち、貨幣を求めて流浪するものたちが出現してきた。いわゆる「無宿人」である。この時代の無宿は、たんに住所不定のもののことではない。人別帳(戸籍)から除外された「帳外」のもののことである。そのため各地の領主にとっては、この者たちに対して、取り締まりの権限も監督権もない。領主にとってはそもそもいない人間である。これが「無宿」である。このなかには伝説となるようなスターも含まれている。「国定忠治」や「鼠小僧次郎吉」である。

無宿人にとって、生きていく場所は、かなり多く用意されていた。街道筋もそうであり、雲助のような交通労働もそうである。領主からすれば、無宿人はそもそも捌きようのない制度的、構造的な「アウトロー」である。必ずしも無宿は、犯罪者とは言えない。貨幣経済への移行によって、無宿は貨幣に寄り付き、寄生するものたちで、経済システムの変換とともに夥しく出現してきた。しかも自然災害や一揆とともに、騒ぎに便乗する者たちも出た。アウトローにとっては、騒ぎはいつもチャンスである。現在でもコロナ禍の騒動のなかで、公的補助金に便乗して詐欺を行う者たちが夥しく出現する。騒ぎのなかに金蔓となるチャンスが見える者たちがいる。おそらく無宿の中にそうした人たちが一定頻度で潜んでいたのである。

無宿人の佐渡送りが開始されるのが、1778 年である。江戸は、すでに当時世界有数の大都市である。大都市は、無宿の生存の機会を高めてくれる。そして江戸という大都市そのもののリスクをおのずと高める。勘定奉行の石谷淡路守は、「江戸市中を徘徊している無罪の無宿者に、幕府は処理に困っているので、佐渡金山に送り込みたい」という意向を漏らしている。佐渡奉行側の受け止めは、「江戸でさえ処置に困っている者を、佐渡で受け入れるわけにはいかない」というものである。いくつかのやり取りの後、無宿者の佐渡送りが決定された。江戸の治安維持の確保と佐渡での人足の確保という、一挙両得だから最初から落ち着きどころは見えていた。こうして無宿というアウトローの逮捕が進められることになった。多くの無宿は犯罪者ではないが、犯罪予備軍ではある。江戸と周囲の関八州に、無宿の逮捕の通達が出された。

佐渡金山では、過酷労働のためか、病気やケガで頻繁に死者がでる。無宿佐渡送りも同じである。だが無宿者には、戸籍はなく、名前も定かではない。死ねば葬らなければならないが、そもそも葬る場所がない。

無宿人・墓地

相川の金鉱山跡地入り口から坂道をしばらく下ったところの山間に、無宿たちの集合墓地がある。弔うものがいるのか、枯れていない花が供えてあった。金銀が大量に採掘され、市中に出回ると、商品作物の生産とともに、貨幣経済が広範に広まる。貨幣と現実の生産活動の隙間に、大量の無宿人が発生した。金融経済の規模が大きくなれば、金融にまとわりついて生業とするものたちが出現する。利益を狙っての抗争も起き、抗争のどちらかに加担することで、そのことを金に換える者たちも出現した。いわゆる「渡世人」である。これは江戸という大都市のリスクを高めることになった。幕府から見れば、佐渡送りには金融に寄生するもの(高利貸し、博徒、盗賊)たちを実労働に戻す機能があり、同時に江戸処払いという治安維持の機能を併せ持っている。無宿人からすれば、貨幣経済という自分たちを生み出した構造的変化の一部をさらに加速させる仕事に、あらためて佐渡で着くことになった。そして無宿として一括りされた「無名の死」を迎えたのである。

3　思想断層

佐渡への島流しになった人物のなかでは、日蓮が名高い。日蓮の島流しは、1271－1274 年の 3 年間であり、日蓮の 49 歳から 52 歳にかけてである。ある意味、日蓮からすれば勲章のような歴史的事件であり、新たな布教の場所を得た新天地への転身でもある。

実は 1261 年から 1263 年まで、日蓮は幕府によって拘束され、伊豆の伊東に流罪となっている。伊豆流罪中、日蓮の監視に当たったのは伊東の地頭・伊東八郎左衛門祐光である。伊東八郎左衛門裕光はもともと日蓮が終生攻撃を続けた「念仏者」だったが、ある時病気になり、そのとき日蓮の祈念によって快癒したので、日蓮に帰依するようになった。日蓮にはこの類の逸話が多い。危機のタイミングをうまく活用し、自分の介入を自他ともに過大に評価するタイプの宗教者であった。危機の時代を

生き延びる天性のレジェンドだった。

佐渡送りのさいの事件も、相当に生々しい。佐渡送りになる 3 年前の 1268 年年 1 月に蒙古と高麗の国書が九州の太宰府に送りつけられ、この文書は直ちに鎌倉に送られ、幕府はそれを朝廷に回送している。蒙古文書は、日本と交易を求めながら、武力侵攻もありうるという内容である。日蓮は、蒙古文書の到来を、外国侵略を予言した「立正安国論」の正しさを証明する事実だとして、執権・北条時宗、侍所所司・平頼綱らの幕府要人のほか、極楽寺良観、建長寺道隆ら鎌倉仏教界の主要僧侶に書簡を送り、仏教諸宗との公場対決を要求した。ともかくも騒ぎを利用して、自説の展開を図る典型的なやり方である。

騒ぎが続くので、1271 年 9 月に幕府は、日蓮を召喚して尋問を行い、その後武装した数百人の兵士を率いて日蓮の逮捕に向かっている。平頼綱は内々で日蓮を斬首する意志を固め、日蓮を龍の口の刑場へと連行した。日蓮が斬首の場に臨み、刑が執行されようとする時、江の島方面から強烈な光り物が現れ、太刀を取る武士の目がくらむほどの事態になって、刑の執行は中止された、と伝えられている。良く出来すぎた話である。この後、佐渡への流罪が決定された。

日蓮の体質には、他の教団への激しい非難が含まれている。ことに念仏と禅宗に対しては容赦のない批判を繰り出した。1271 年 6 月、日蓮は、当時関東における真言教団の中心者で、非人の労働力を組織し、道路や橋の建設、港湾の維持管理などの事業を行っていた極楽寺良観が、当時起きていた旱魃への対応として、幕府によって降雨の祈願を要請されたことを知った。そして日蓮は、良観を相手取って、7 日の間に雨が降らないなら、法華経に帰依せよ、と降雨祈願の勝負を申し出ている。そして実際雨は降らなかった。こんなことをやり続ければ、多くの方面から恨みを買うに決まっている。

実際に静岡の伊東に流されたとき、親切にしてくれた少数のものを気づかう感謝の手紙を残してもいる。日蓮と親しいことが周囲にばれないようにした方がよいという助言も述べている。「地頭も民衆も、日蓮を忌み嫌うこと鎌倉より甚だしく、わが姿を見れば眼を離さず、耳にする者は敵視している時、ことに五月の頃とあれば米も乏しかったろうに、日蓮を内々に養って下さったこと、日蓮の父母が、伊豆の伊東、川奈という所に生まれ替り給うたか」(「日蓮消息」木下順二訳)。周囲敵だらけでも、臆している様子も、方針を変える様子もない。

日蓮は、天台教学を「迹門の妙法蓮華経（法華経)」であり「理の一念三千」と呼んだ。天台の体質が思弁的、観念的であることを批判し、自分の教義を「事の一念三千」として、実践的行為であることを強調している。また日蓮は、法（真理）をよりどころとすべきであり、人（権力）をよりどころとしてはならないと説いている。さらに仏教史を克明かつ批判的に検討し、念仏、禅、真言宗だけではなく、天台密教(比叡山延暦寺)も批判するようになった。天台宗の密教化をおし進めた第 3 代天台座主の慈覚大師円仁、5 大院安然、恵心僧都源信と並べて「師子の身の中の三虫」と断定してもいる。東密（真言宗・高野山）だけでなく、台密（天台宗）までも批判の対象とするようになったのである。自分自身の思いや考えを「立場」として明確にすることは、一般に自分自身の選択肢を狭くする。その場合には、教義から別の通路を付けなければ、閉塞してしまう。この別の通路こそ「現実の政治」

である。

こうした多くの批判をつうじて、日蓮に対してもかえって反批判、敵対行動が出現したことはむしろ当然である。信徒への弾圧も続いた。それによって、それを糧にして教団の団結が強まる方向と、教団そのものが分裂していく方向を生んだ。少なくとも傾向として、周囲と折り合いを取りながら宗門の維持を図ろうとする出仕組(受派)と、法理の純粋性を維持しようとする非出仕組(不受不施派)がはっきりと分かれてくる。後者は、法華経の信者でないものからの供養やほどこしは受けないという断固すぎる方針である。

ここまで先鋭化すれば、さらにおのずと分断が進む。公儀の眼が厳しいのだから、表向き体裁状は「受派」を装っても、「不受」を続ける信念を持ち続けるものには寛容であるべきだとするのが、「日指派」であり、これに対して「津寺派」は、外の混濁に対しては徹底抗戦すべきだという立場である。日指派は、内浄を優先し、津寺派は外濁との戦いを強調した。組織に対しての外圧が強ければ、しばしば起きる組織防衛にための岐路でもある。

自然災害にさいしても、幕府が邪宗を抱えることで起きていることだとして、幕府に対しては、邪宗を排し、自分の主張する「法華経」を中心に据えるように要求した。そのため当初より日蓮宗は、政治的動向を強く帯びることになった。本性的に政治的であることが、宗教活動の中心となっている。禅宗のように身体修養を中心として、政治や国家とは独立の固有のネットワークを形成していく場合には、ほとんど政治化することはない。だが日蓮は違った。幕府の失政は、邪教を取り立てて擁護していることにあるのだから、それを変更せよという政治的要求となった。これはどのように理由づけされようと、幕府批判である。これで「危険視」されないはずがない。こうした政治性は、今日では創価学会と立正佼成会に引き継がれている。創価学会は、「公明党」という政党さえ形成している。宗教団体が、それじたいで政党を作っているのである。

政治の前線は、言葉による論争である。鎌倉幕府や他の宗教を批判したとして日蓮は、1271 年に佐渡に流されて、塚原の三昧堂という荒れ果てた墓地の小堂に配所された。後に市野沢に移されるまで半年間そこに住んでいた。ここでも他宗の僧たちとの間で、「塚原問答」を戦わせ、「開目抄」を著し、市野沢に移されてからは「観心本尊抄」を著し、初めて日蓮宗の本尊とされる法華曼荼羅をあらわした、と言われている。

内面に向かうというよりは、ともかくも論争を挑み、そこから新たな展開を作り出していくタイプだった。論争は、勢力を拡大するさいや、教団の内部に不満がたまり、分裂寸前のときにはしばしば起きる。だが日蓮は、論争をつうじて自分の教説を形成していった。佐渡での書簡には以下のような記述がある。「仏法において、おだやかに軽悪を受け入れ説得する摂受と、威力を以って重悪を打ち砕く折伏とは、時に応じて使い分けねばならぬ。例えば世にいう文武二道のようなもの。されば昔の大聖は時によって然るべき法を行った。・・・・破戒や無戒をやっつけ持戒や正法を行おうとするからには、諸戒を堅く守らねばならぬ」(「佐渡御書」)。こうした戦いは、どこかで終わるような性格のものではない。戦いが次の戦いを引き出し、それに果敢に対応することで、さらに次の戦いが準備

される。

もう一つ政治性を含んだ宗教的体質に、「末法思想」の取り込みがある。法華経の「久遠本仏の常住」、「遣使還告の譬」、「勧持品二十行の偈文」を「末法悪世の相」に相当すると解釈し、法華経の使命は、衆生の救済を目指すものだと訴えていった。日蓮にとって「末法重病の衆生」を救済することのできる唯一最良の薬は、「法華経」のみである。「真言亡国、禅天魔、念仏無間、律国賊」のように激しく他宗(真言、禅、念仏、天台)を攻撃する「四箇格言」は、法華経のみが、末法において衆生を救済する唯一の教義であり、他の教えはかえって衆生を救済から遠ざけてしまう、という強い自己主張となって表明されている。

日蓮宗・根本寺境内・太鼓堂

日蓮宗のお寺は、佐渡にも多く残っている。根本寺は、広大な敷地であり、訪問した日曜日は実質的に閉館だった。それでも投げ銭のように観覧費を置き、入ってみた。他に拝観しているものはない。どこまでも奥行きの続く道である。境内の長い通路には、どこか緊迫感や緊張感がある。それが戦いのさなかのひとときの休養なのか、さらに布教を展開するための準備なのかはわからない。休息のない休戦のようにも感じられる。波乱万丈のさなかのひとときの空白が、いまなお続いているという感触である。

参考文献

磯部欣三『佐渡金山』(中央公論、1992 年)

磯部欣三『無宿人　佐渡金山秘史』(人物往来社、1964 年)

梅原猛他『日本の古典12.　親鸞・道元・日蓮』(河出書房新社、1973 年)

門田岳久他『生活文化研究フォーラム No.1』(生活文化研究フォーラム、2020 年)

計良勝範他『佐渡の文化史』(両津市郷土博物館、2003 年)

佐渡名販『佐渡の昔ばなし』(佐渡名銘、2020 年)

永井次芳著、荻野由之校閲『佐渡風土記』(臨川書店、1941 年)

テム研究所『佐渡金山』(2001 年、株ゴールデン佐渡)

テム研究所『図説佐渡金山』(ゴールデン佐渡、1985 年)

白山丸友の会『時代に帆を揚げて』(白山丸友の会、平成 16 年)

松本清張『佐渡流人行』(新潮社、1976 年)

山本修之助編『佐渡叢書　第二巻――佐渡志、佐渡志附録図』(佐渡叢書刊行会、1972 年)

山本修之助『佐州巡村記：佐渡市民風俗他』(佐渡叢書刊行会、1977 年)

おわりに

思わぬ形で既存の論文のいくつかを共通したテーマにまとめてみる機会をえることができた。ここには相当に年数の経ったものから、ごく最近のものまで含まれている。私の理論能力は、おそらくごく自然なかたちで、年を取るごとに落ちている。だが能力が下降線に入ってからが、本当の勝負所だという思いもある。自分の頭でも、もはや思うようには動いてくれない。そのなかでももがきながら何かを記し、作り上げていかなければならない、という思いもある。下降することの苦吟というものがあってもおかしくいない。そうした姿を見せることができれば幸いである。以下が初出一覧である。

河本英夫

初出一覧

はじめに　書下ろし

1 章　書下ろし

2 章　書下ろし

3 章　「物性の自己組織化」(『Web マガジン en 』2004, 1)1 - 8、「鉄の途」(『エコ・フィロソフィ研究』Vol、13、2019 年 3 月)25－38(後半)

4 章　「鉄の途」(『エコ・フィロソフィ研究』Vol、13、2019 年 3 月)25－38(前半)

5 章　「ゲーテ自然学とオートポイエーシス」(『モルフォロギア』第 38 号、2016、11)24-36

6 章　「行為としての意識とその可能性」(神経現象学リハビリテーション開発機構講演、2013 年 12 月、自治医大)草稿

7 章　「文明創発の舞踏――笠井叡氏の講演によせて」『日本病跡学会誌』(2017 年)17－22

8 章　「芸術はどのような運動か」『最新精神医学』(第 25 巻、第 5 号、2020 年 5 月)393－398

9 章　「浮遊する島」『白山哲学』(『白山哲学』Vol,53、2019 年 3 月)27－46

10 章　「トワイライト・アイランド」『白山哲学』(55 巻、2021 年 3 月)17－33